

1. 災害イベント別の全体像
2. 対象疾患別の分析
3. 保護因子の分析
4. 阪神・淡路大震災に関する文献の分析
5. 中越地震に関する文献の分析
6. 能登半島地震に関する文献の分析
7. 東日本大震災に関する文献の分析
8. 熊本地震に関する文献の分析
9. COVID-19感染症に関する文献の分析
10. 火山・噴火災害に関する文献の分析
11. 水害に関する文献の分析
12. 今後の展望と結語

結果資料

1. 災害イベント別の全体像

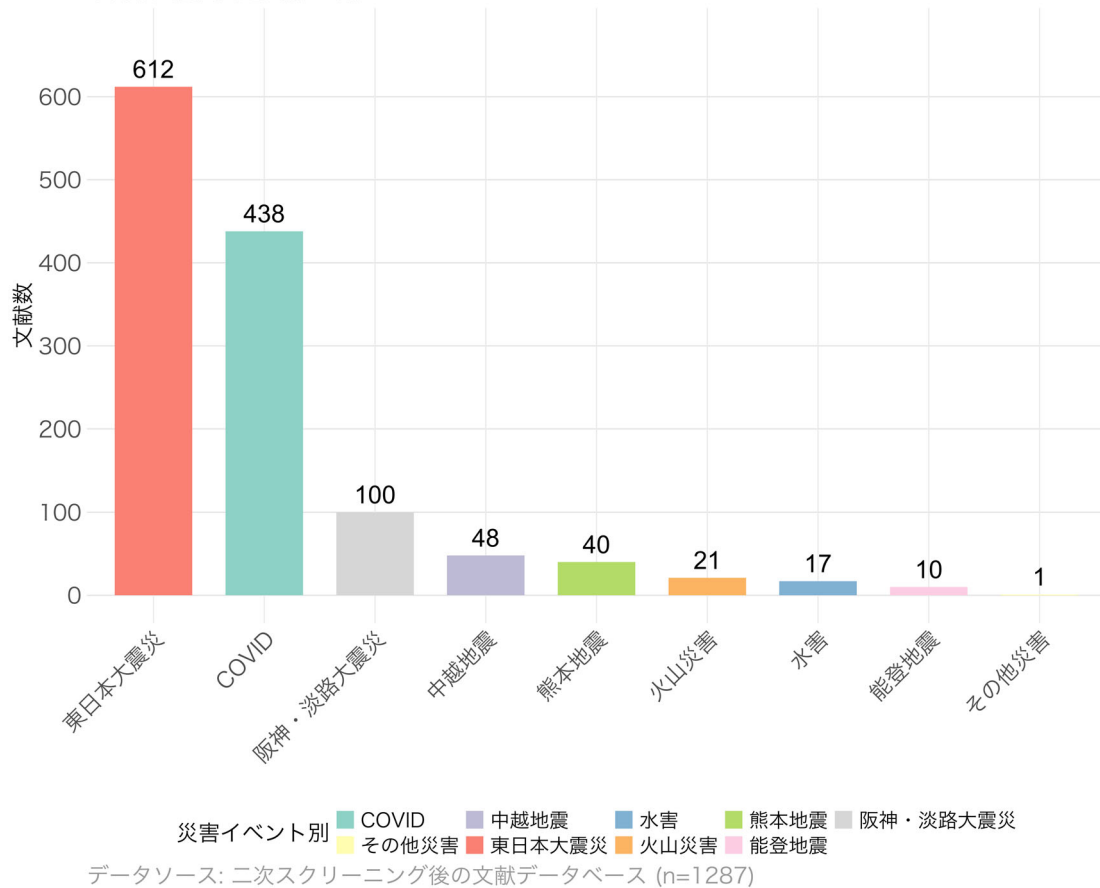
はじめに、本研究の分析対象となった文献の概要について報告する。

1.1 災害イベント別の文献数の比較

分析対象となった文献の災害イベント別の分布を確認する。

災害イベント別の分布		
災害イベント別	文献数	割合(%)
東日本大震災	612	47.6%
COVID	438	34.0%
阪神・淡路大震災	100	7.8%
中越地震	48	3.7%
熊本地震	40	3.1%
火山災害	21	1.6%
水害	17	1.3%
能登地震	10	0.8%
その他災害	1	0.1%

災害関連文献：災害イベント別の分布
東日本大震災関連文献が最多

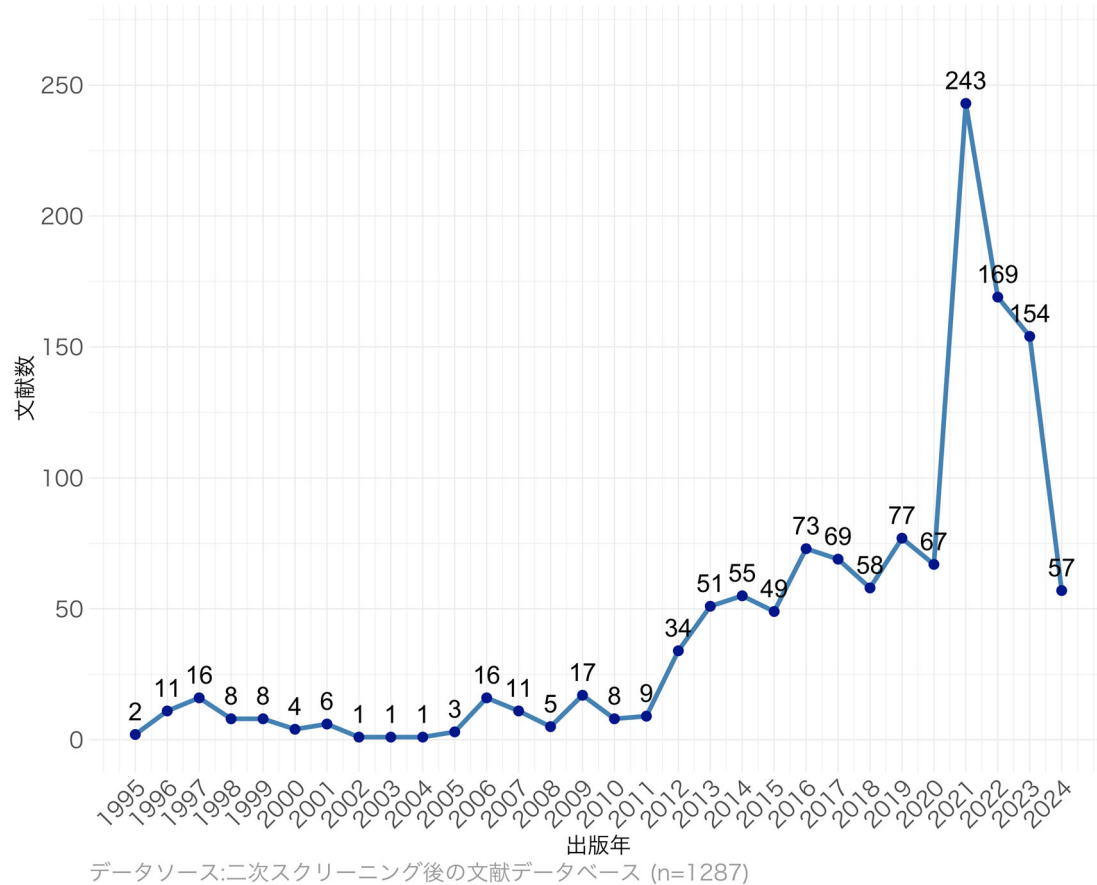


考察:

災害イベント別の分析結果から、東日本大震災に関する文献が612件（47.6%）と最も多く、次いでCOVID-19感染症関連の文献が438件（34%）となっている。この二つの災害で全体の80%以上を占めており、研究の焦点がこれらの大規模災害に集中していることがわかる。阪神・淡路大震災（100件、7.8%）と中越地震（48件、3.7%）といった過去の地震災害も一定数研究されており、COVID-19感染症関連を除く文献の大部分が地震災害で占められている。一方、豪雨災害や火山災害に関する研究は比較的少数に留まっている。

1.2 出版年別の推移

分析対象となった文献の出版年別の分布を確認する。



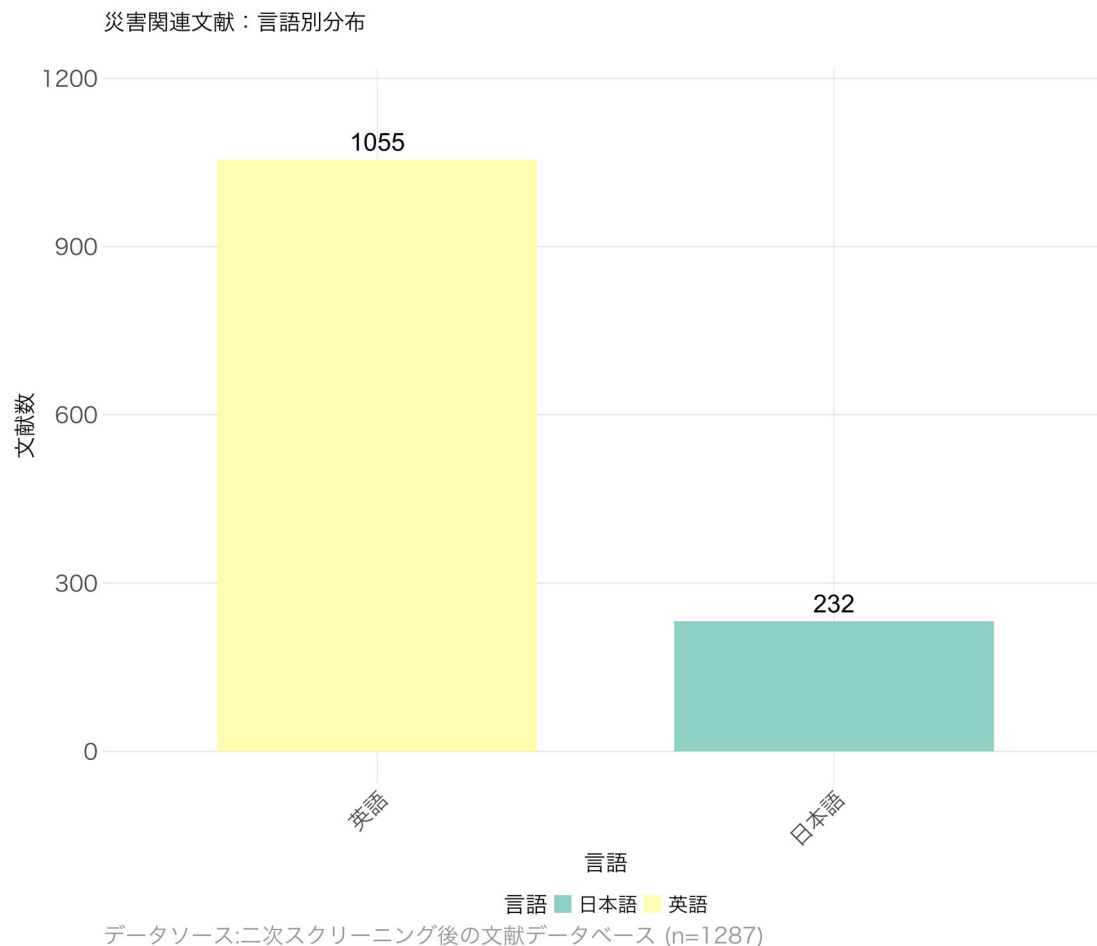
考察:

東日本大震災の発災翌年から出版数は増加傾向を認め、COVID-19流行下中に急速に出版数が伸びている。しかし、COVID-19の流行が収束に向かうに連れて出版数は減少傾向にある。

1.3 言語別の分析

分析対象となった文献の言語別の分布を確認する。

出版言語別の分布		
出版言語別	文献数	割合(%)
日本語	232	18.0%
英語	1,055	82.0%



考察:

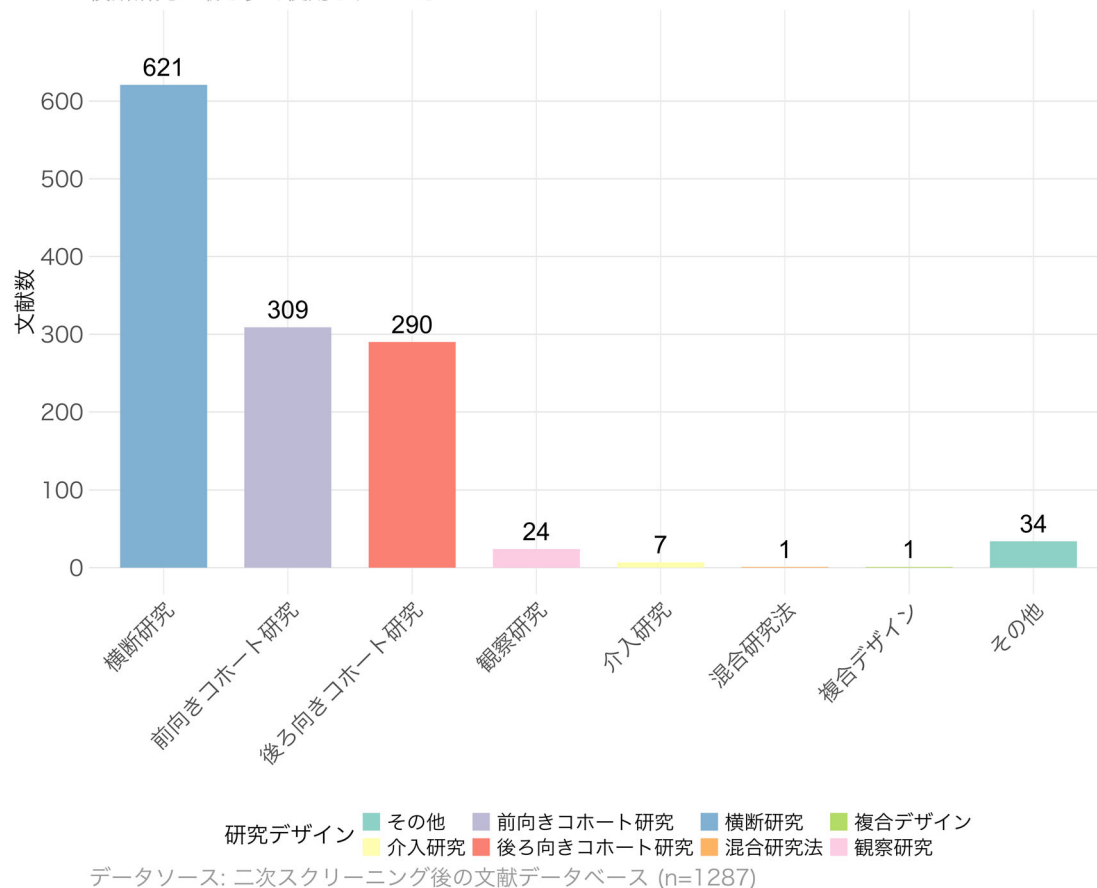
言語別の分析から、出版言語は英語（1055件、82%）が多数を占めており、次いで日本語（232件、18%）の順となっている。

1.4 研究デザインの分析

分析対象となった文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	621	48.3%
前向きコホート研究	309	24.0%
後ろ向きコホート研究	290	22.5%
観察研究	24	1.9%
介入研究	7	0.5%
混合研究法	1	0.1%
複合デザイン	1	0.1%
その他	34	2.6%

災害関連文献：研究デザイン別分布
横断研究が最も多く使用されている



考察:

研究デザインの分析から、横断研究が最も多く用いられており（621件、48.3%）約半数を占めている。次いで前向きコホート研究（309件、24%）、後ろ向きコホート研究（290件、22.5%）などの縦断分析が続いている。介入研究やその他のデザインは比較的小数にとどまっている。

1.5 災害フェーズの分類と分析

分析対象となった文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

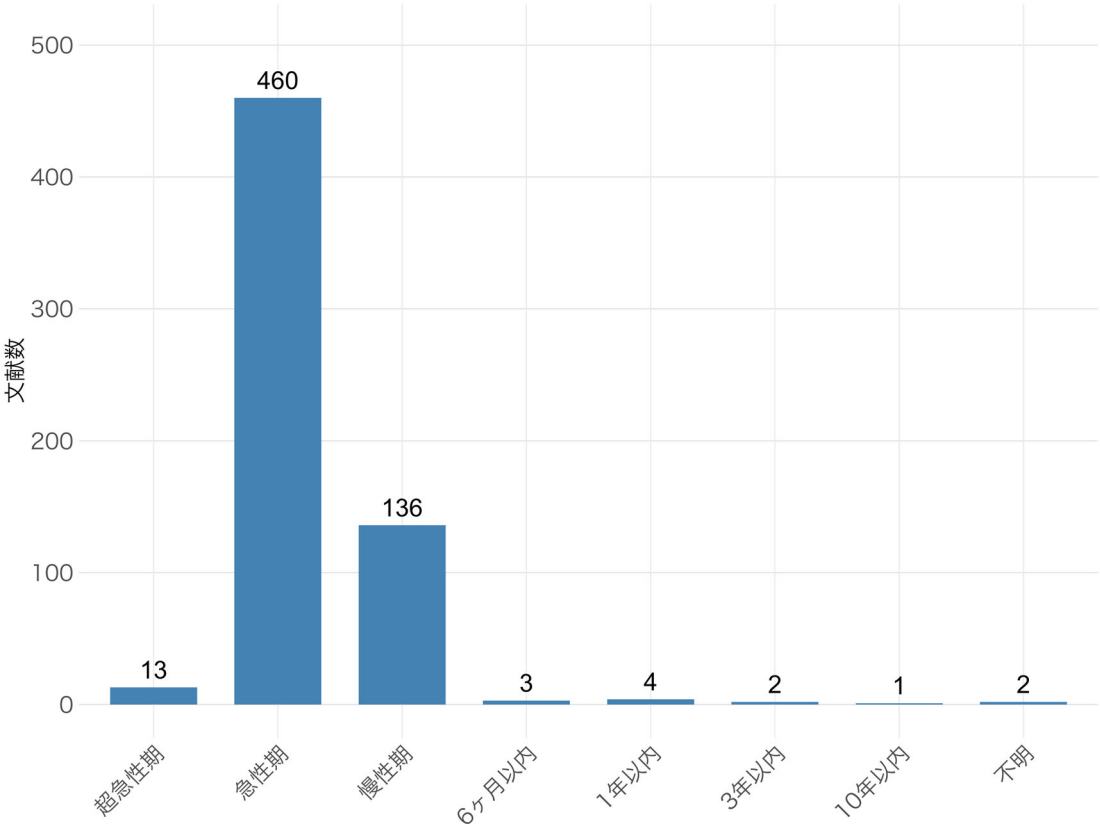
横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	13	2.1%
急性期	460	74.1%
慢性期	136	21.9%
6ヶ月以内	3	0.5%
1年以内	4	0.6%
3年以内	2	0.3%
10年以内	1	0.2%

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
不明	2	0.3%

横断研究における災害フェーズ別分布
急性期から慢性期(発災3ヶ月以内)の調査が多数



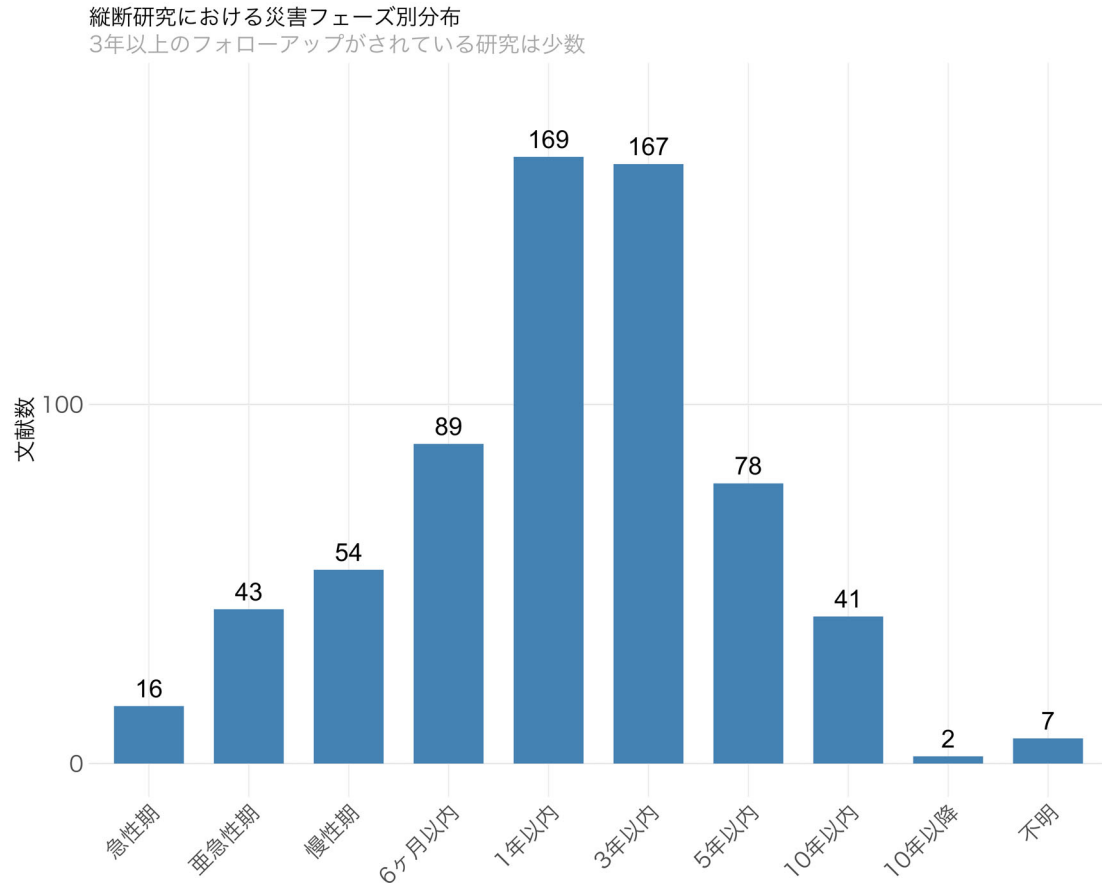
データソース:二次スクリーニング後の文献データベース(n=621)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	16	2.4%
亜急性期	43	6.5%
慢性期	54	8.1%
6ヶ月以内	89	13.4%
1年以内	169	25.4%
3年以内	167	25.1%
5年以内	78	11.7%
10年以内	41	6.2%
10年以降	2	0.3%

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
不明	7	1.1%



データソース:二次スクリーニング後の文献データベース(n=666)

考察:

横断研究では急性期に行われたものが大部分を占めており（460件）、続く慢性期に実施された研究（136件）を合わせてほぼ全ての研究が含まれている。

縦断研究では3年以内にフォローアップを終了した研究が多数であり、5年以上の長期間にわたってフォローアップがなされている研究は僅かである。しかし、今回の分析では調査開始時期から調査終了時期の関係性を考慮せずに分析を行ったため、実際のフォローアップ期間はより短い可能性がある。

1.6 対象疾患の分析

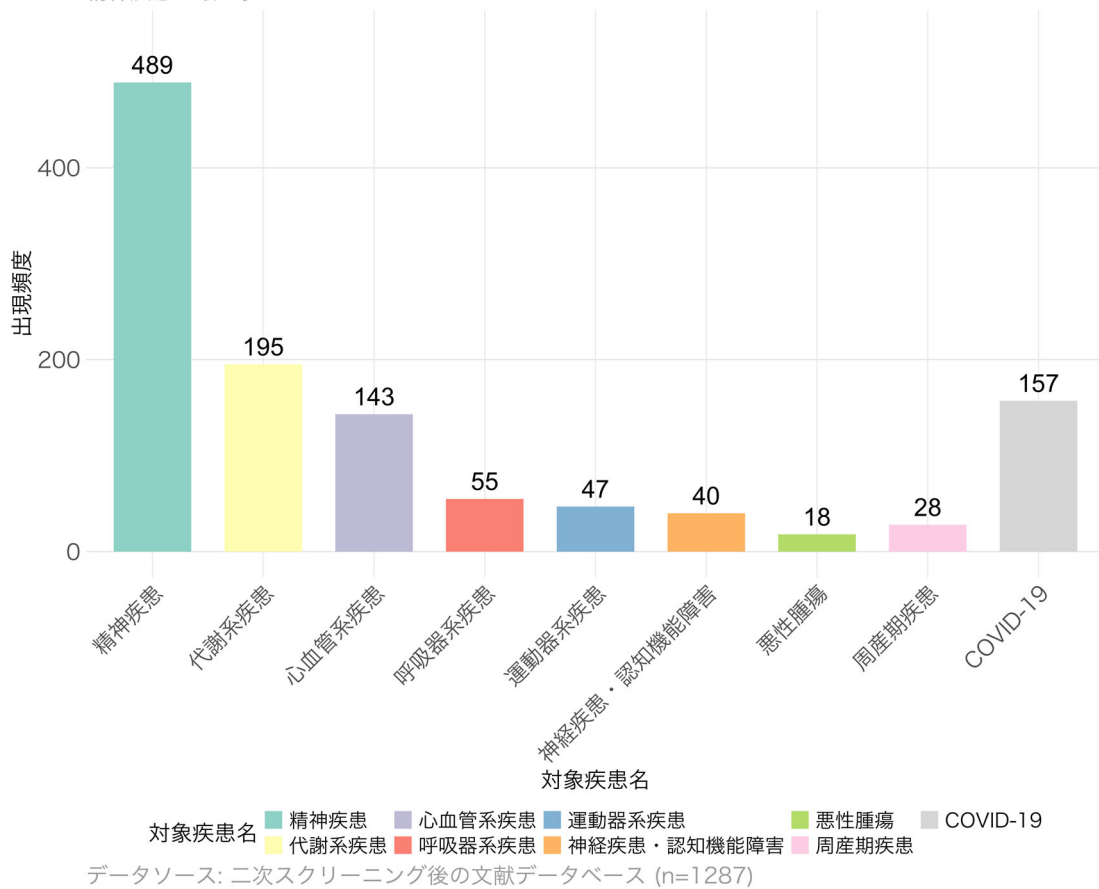
分析対象となった文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	489	41.7%
代謝系疾患	195	16.6%
心血管系疾患	143	12.2%
呼吸器系疾患	55	4.7%

対象疾患の出現頻度

対象疾患名	出現頻度	割合(%)
運動器系疾患	47	4.0%
神経疾患・認知機能障害	40	3.4%
悪性腫瘍	18	1.5%
周産期疾患	28	2.4%
COVID-19	157	13.4%

災害関連関連文献：対象疾患別分布
精神疾患が最も多い



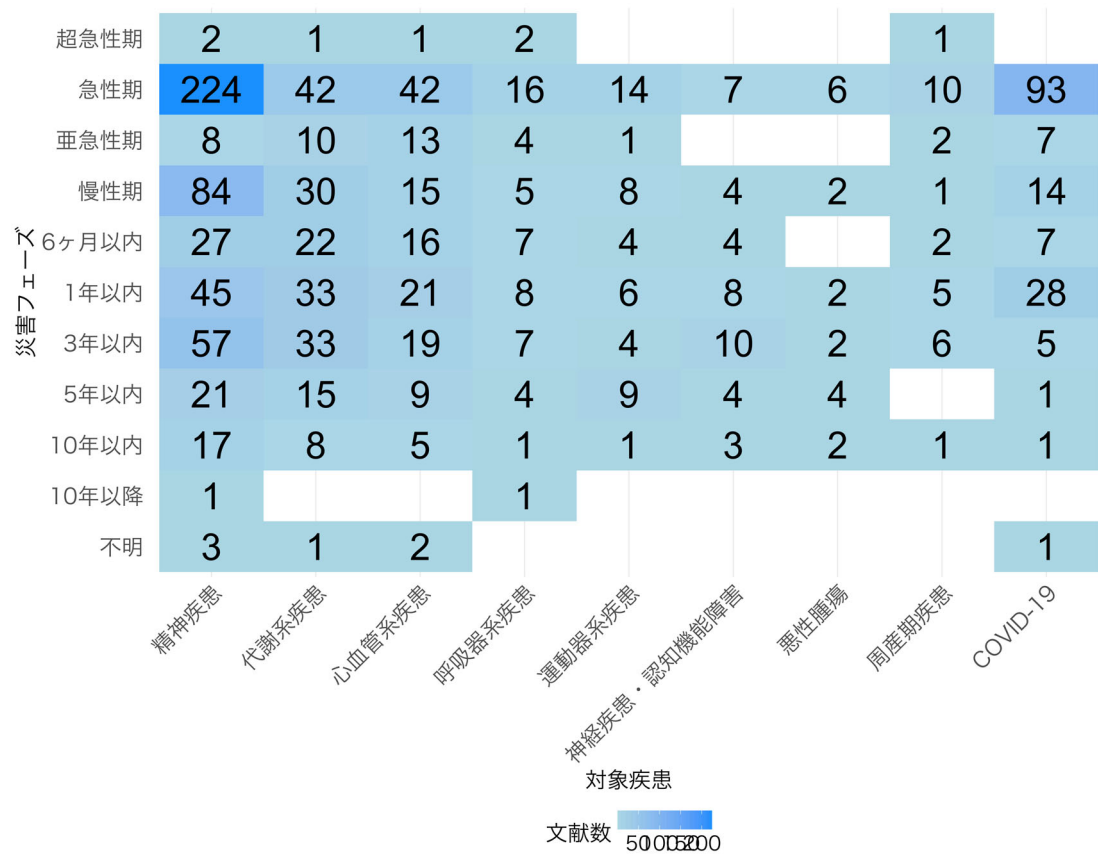
考察:

対象疾患の分析から、精神疾患を対象とした文献が最多であり（489件、38%）、糖尿病を含む代謝系疾患（195件、15.2%）、深部静脈血栓症などを含む心血管系疾患（143件、11.1%）が続いている。

1.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

分析対象となった文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。

災害フェーズと対象疾患の関連



データソース: 二次スクリーニング後の文献データベース (n=1287)

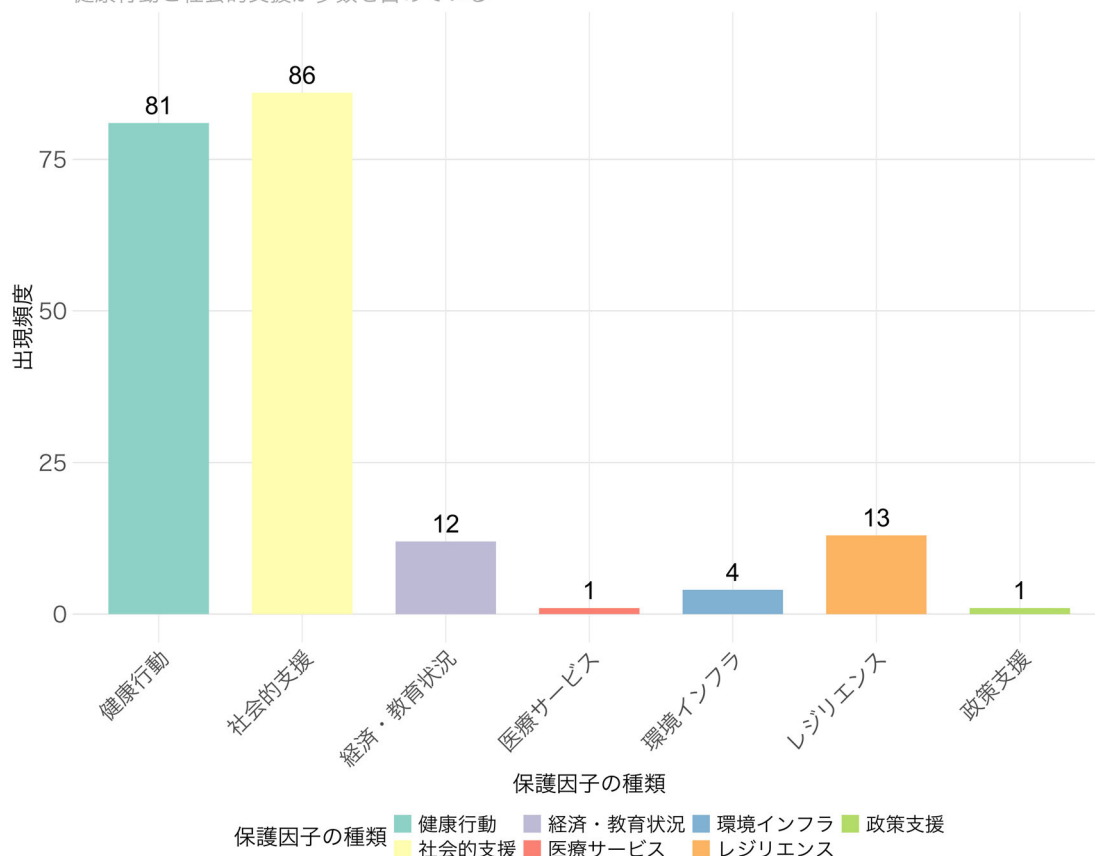
考察:
多くの疾患において急性期で実施された研究が多数を占めている。主に生活習慣病で構成される代謝系疾患では縦断研究において比較的長期間フォローアップされている傾向にある。呼吸器合併症や神経疾患・認知機能障害に関しては、災害による生活環境の変化が長期的に影響を及ぼす可能性が示唆される。

1.8 保護因子の分析

分析対象となった文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	81	40.9%
社会的支援	86	43.4%
経済・教育状況	12	6.1%
医療サービス	1	0.5%
環境インフラ	4	2.0%
レジリエンス	13	6.6%
政策支援	1	0.5%

災害関連関連文献：保護因子別分布
健康行動と社会的支援が多数を占めている



データソース:保護因子を取り扱った文献(n=182)

考察:

保護因子に関する研究は182件であり、全対象文献である1287件の14.1%を占めていた。各疾患に対して保護因子として主なものは健康行動（81件）と社会的支援（86件）であった。これらに経済・教育状況（12件）や、個人の特性としてのレジリエンス（13件）が続いていた。医療サービス、環境インフラ、政策支援に関する件数は少ないものの、類似したカテゴリが社会的支援や経済・教育状況に包含されていた。

1.9 文献分析の概要

本研究の分析対象となった文献の概要は以下の通りである。

東日本大震災文献分析の概要

分析項目	結果
総文献数	1287件
最も多い出版年	2021年（243件）
主要出版言語	英語（1055件）
最も多い研究デザイン	横断研究（621件）
最も多い対象疾患	精神疾患（489件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献を分析した結果、以下の特徴が明らかとなった。

災害イベント別：東日本大震災に関する文献が612件（47.6%）と最も多く、地震災害が占める割合が高かった。次いでCOVID-19感染症関連の文献が438件（34%）となっている。東日本大震災とCOVID-19で全体の80%以上を占めている。一方、豪雨災害や火山災害に関する研究は比較的少数に留まっている。

時間的推移：東日本大震災の発災翌年から出版数は増加傾向を認め、COVID-19流行下中に急速に出版数が伸びている。しかし、COVID-19の流行が収束に向かうに連れて出版数は減少傾向にある。

言語分布：英語（1055件、172.4%）、日本語（232件、37.9%）であり英語文献が多い。

研究デザイン：横断研究（621件、101.5%）が最も多く、前向きコホート研究（309件、50.5%）と後ろ向きコホート研究（290件、47.4%）が続く。介入研究やその他のデザインは比較的少数にとどまっている。

災害フェーズ：横断研究では急性期～慢性期に行われたものが大部分を占めている。縦断研究では3年以内にフォローアップが終了されている研究が多数であり、5年以上の長期間にわたってフォローアップがなされている研究は僅かである。

対象疾患：精神疾患（489件、79.9%）が多く、次いで代謝系疾患（195件、31.9%）、心血管系疾患（143件、23.4%）に関する研究が続く。

保護因子：保護因子に関する研究は182件であり、全対象文献の14.1%を占める。主なものは健康行動（81件）と社会的支援（86件）であった。これらに経済・教育状況（12件）や、個人の特性としてのレジリエンス（13件）が続いていた。

2. 対象疾患別の分析

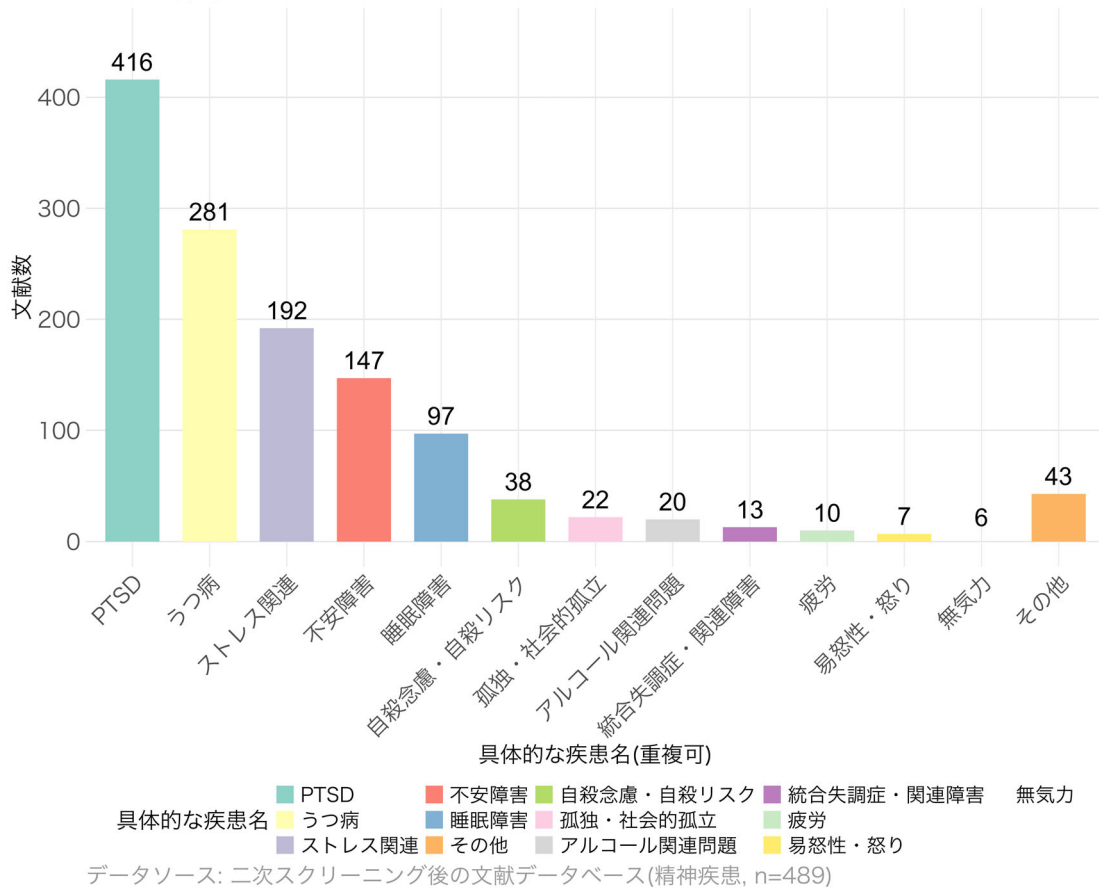
次に、各研究のアウトカムとして選定されていた対象疾患毎に詳細な分析を行う。

2.1 精神疾患に関する文献の分析

精神医学関連疾患の文献について詳細な検討を行う。

精神疾患の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
PTSD	416
うつ病	281
ストレス関連	192
不安障害	147
睡眠障害	97
自殺念慮・自殺リスク	38
孤独・社会的孤立	22
アルコール関連問題	20
統合失調症・関連障害	13
疲労	10
易怒性・怒り	7
無気力	6
その他	43

精神医学関連文献：具体的な疾患別分布（重複可）
PTSDが最も多い



考察:

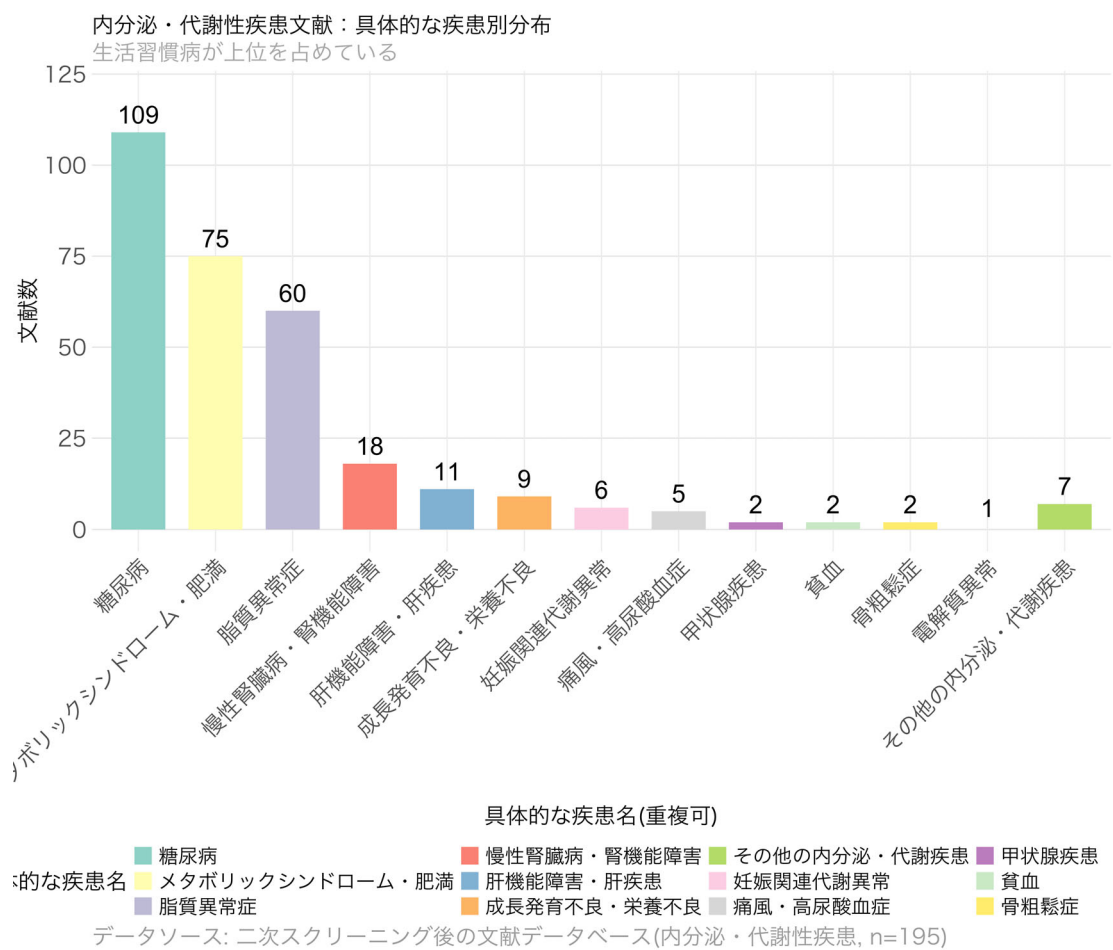
精神疾患を対象とした文献（489件）の内、PTSDが最も多く（416件）、うつ病（281件）、ストレス関連（192件）、不安障害（147件）、睡眠障害（97件）が続いている。
対象文献数は少ないものの、自殺念慮・自殺リスクを対象にした文献が38件存在することは特筆すべき点と考えられる。

2.2 内分泌・代謝性疾患に関する文献の分析

内分泌・代謝性疾患の文献について詳細な検討を行う。

内分泌・代謝性疾患の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
糖尿病	109
メタボリックシンドローム・肥満	75
脂質異常症	60
慢性腎臓病・腎機能障害	18
肝機能障害・肝疾患	11
成長発育不良・栄養不良	9
妊娠関連代謝異常	6

内分泌・代謝性疾患の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
痛風・高尿酸血症	5
甲状腺疾患	2
貧血	2
骨粗鬆症	2
電解質異常	1
その他の内分泌・代謝疾患	7



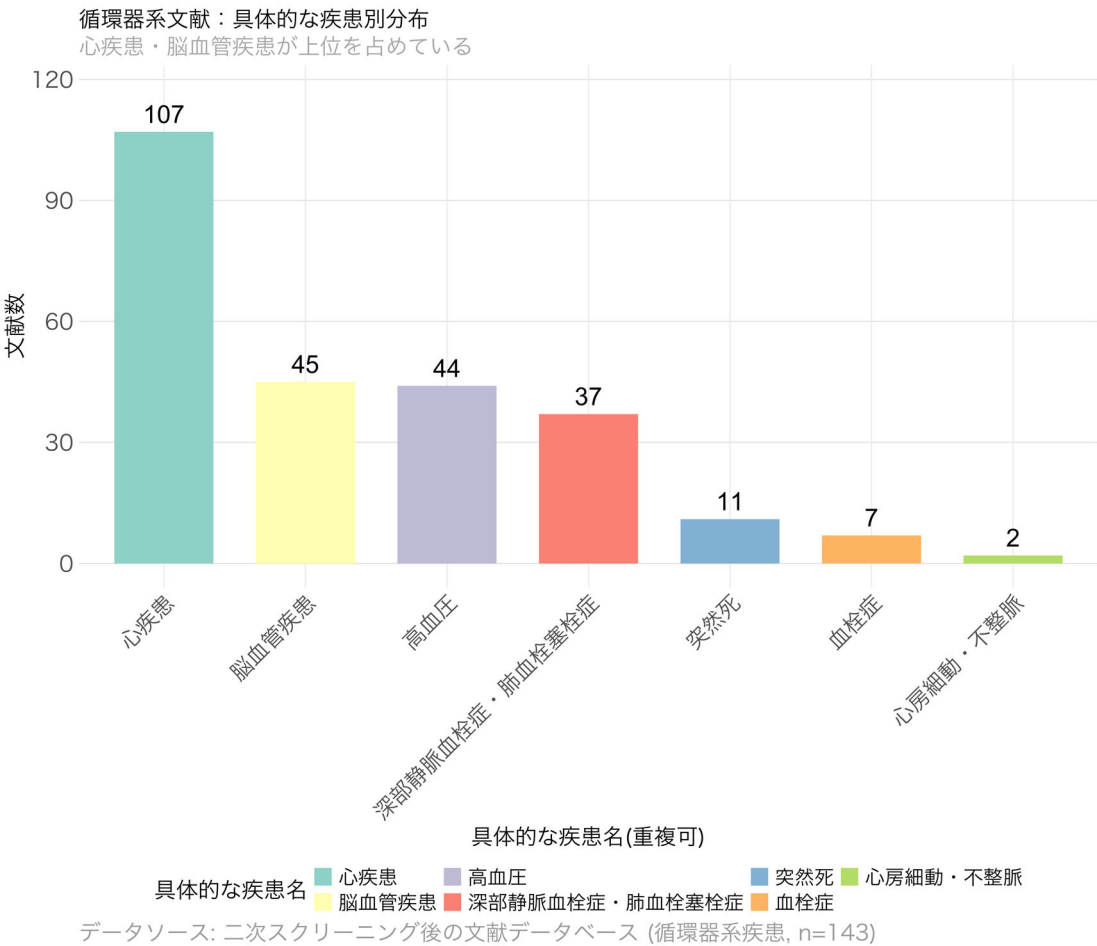
考察:

内分泌・代謝性疾患を対象とした文献（195件）の内、糖尿病（109件）、脂質異常症（60件）などの生活習慣病が多数を占めている。災害に関連する避難生活による療養環境の変化や医療・保健サービスへのアクセスの変化などの影響を反映していると考えられる。

2.3 心血管系疾患に関する文献の分析

心血管系疾患の文献について詳細な検討を行う。

循環器系疾患の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
心疾患	107
脳血管疾患	45
高血圧	44
深部静脈血栓症・肺血栓塞栓症	37
突然死	11
血栓症	7
心房細動・不整脈	2



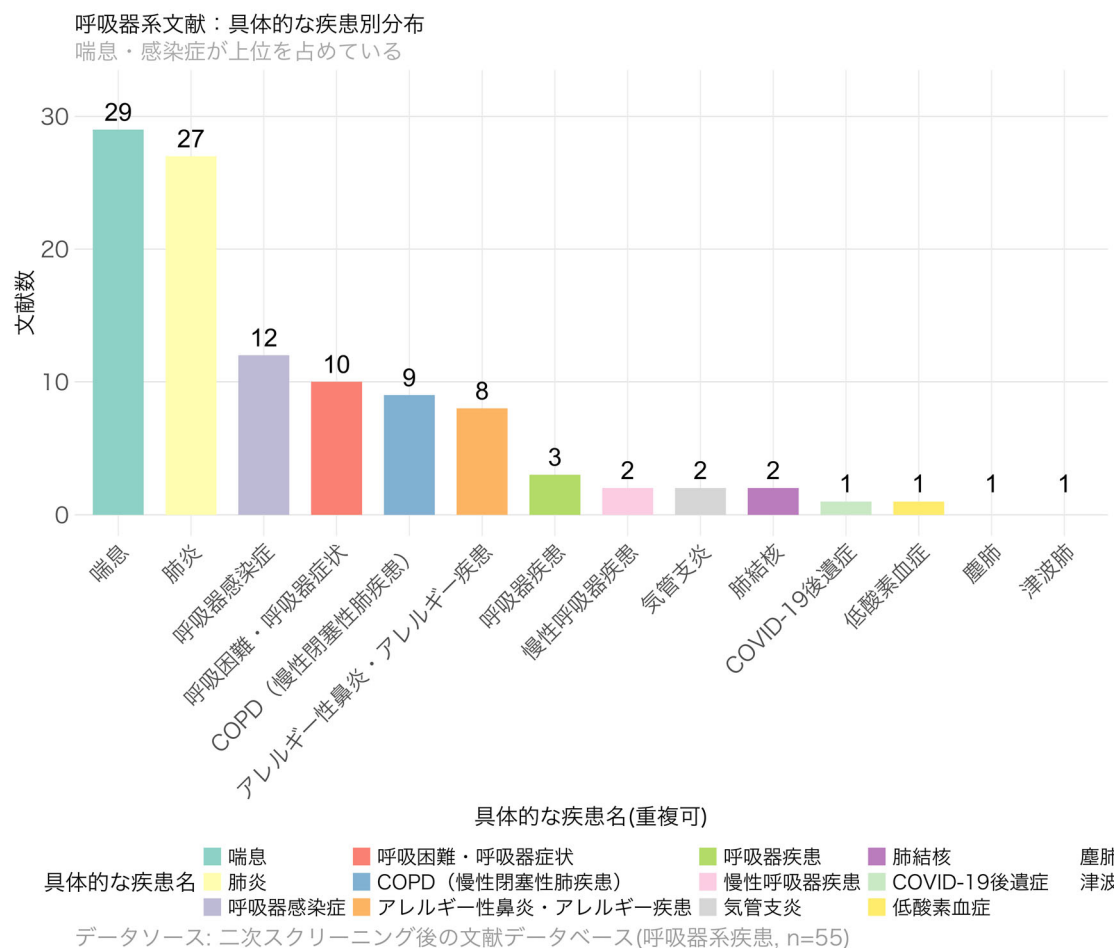
考察:
心血管系疾患を対象とした文献（107件）の内、心疾患（45件）と脳血管疾患が上位を占めていた。避難生活に関連した合併症である深部静脈血栓症・肺血栓塞栓症に関連する報告も複数存在している（37件）。

2.4 呼吸器系疾患に関する文献の分析

呼吸器系疾患の文献について詳細な検討を行う。

呼吸器系疾患の分布

具体的な疾患名(重複可)	文献数
喘息	29
肺炎	27
呼吸器感染症	12
呼吸困難・呼吸器症状	10
COPD（慢性閉塞性肺疾患）	9
アレルギー性鼻炎・アレルギー疾患	8
呼吸器疾患	3
慢性呼吸器疾患	2
気管支炎	2
肺結核	2
COVID-19後遺症	1
低酸素血症	1
塵肺	1
津波肺	1



考察:

呼吸器系疾患を対象とした文献（55件）の内、喘息が最多であった（29件）。肺炎（27件）や上気道感染症（12件）などを含む呼吸器感染症などの感染症も上位を占めていた。

2.5 運動器系疾患に関する文献の分析

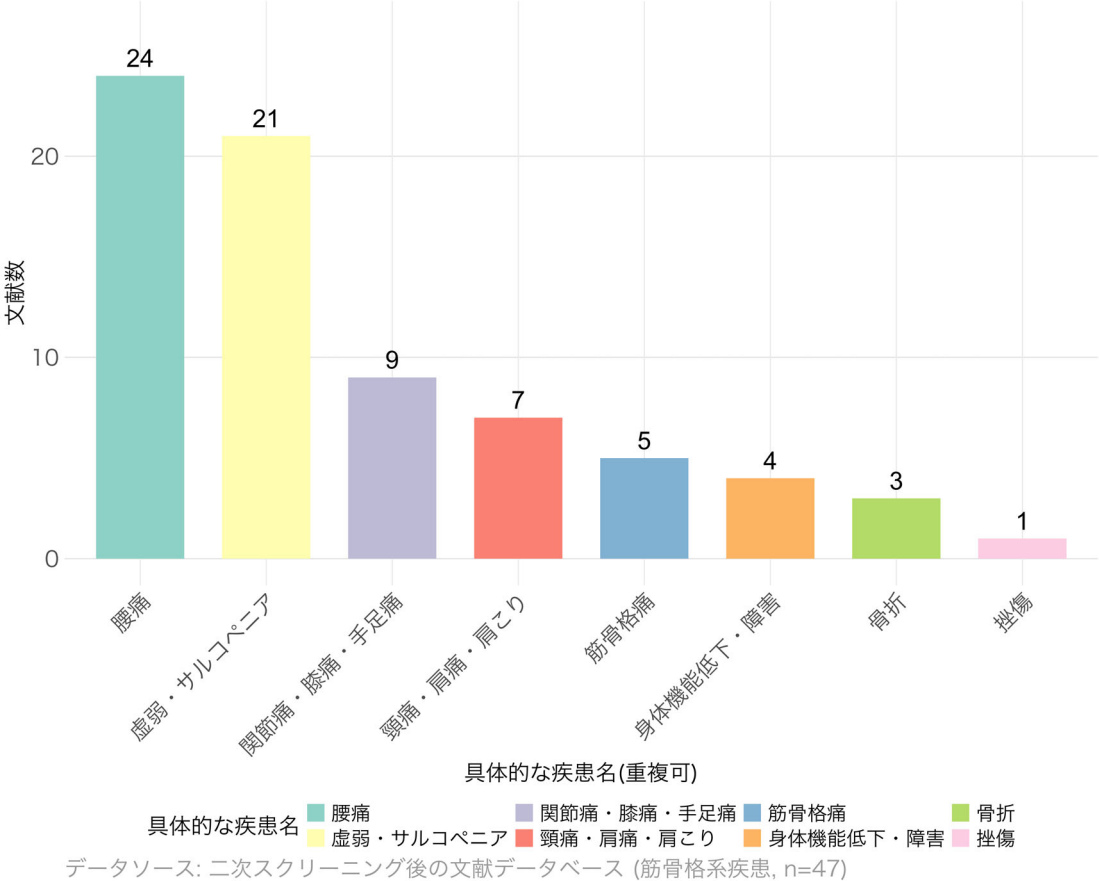
運動器系疾患の文献について詳細な検討を行う。

筋骨格系疾患の分布

具体的な疾患名(重複可) 文献数

腰痛	24
虚弱・サルコペニア	21
関節痛・膝痛・手足痛	9
頸痛・肩痛・肩こり	7
筋骨格痛	5
身体機能低下・障害	4
骨折	3
挫傷	1

筋骨格系疾患文献：具体的な疾患別分布
腰痛が最多であり、整形外科系疾患が続く



考察:

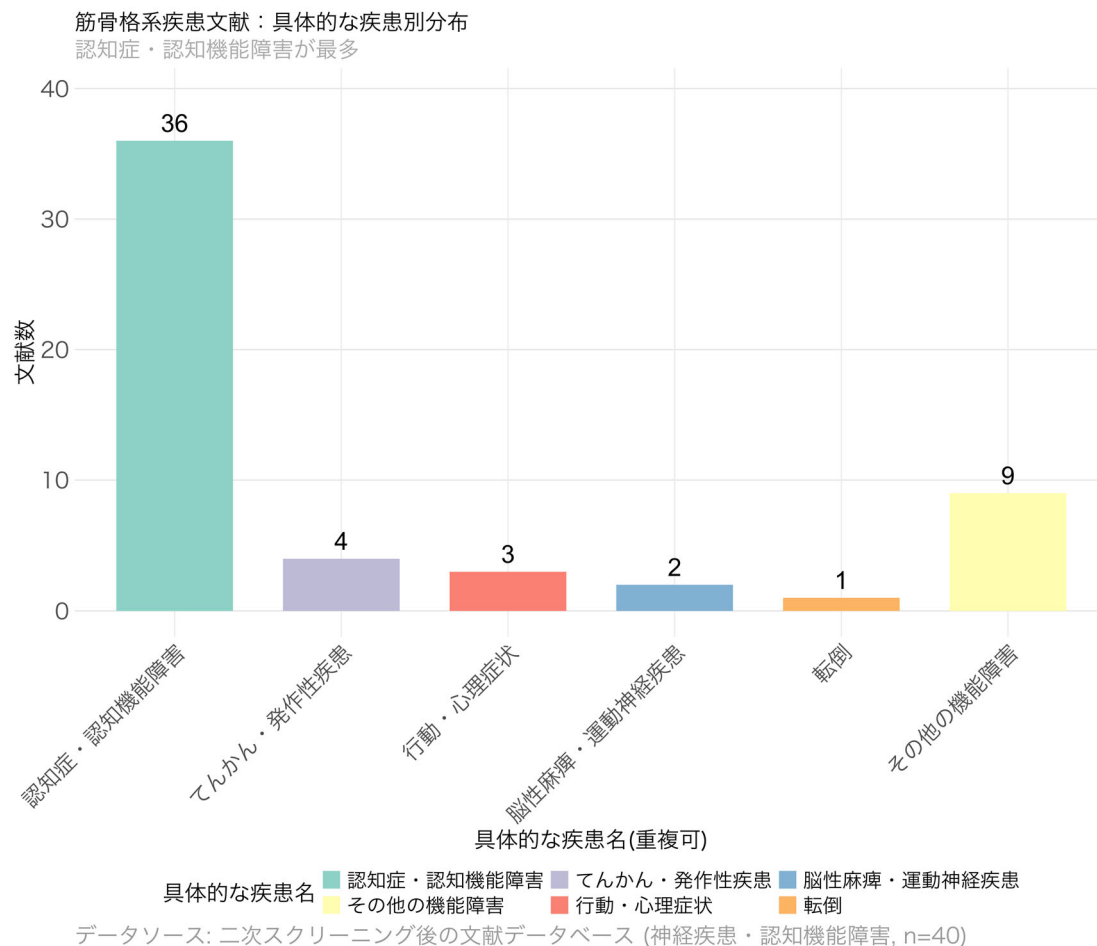
運動器系疾患を対象とした文献（47件）の内、腰痛（24件）が最も多かった。この他にも関節痛・膝痛・手足痛（9件）や頸痛・肩痛・肩こり（7件）などの症状が続いている。この他にも、身体機能の悪化として虚弱・サルコペニア（21件）に着目した研究も報告されている。

2.6 神経疾患・認知機能障害に関する文献の分析

神経疾患・認知機能障害の文献について詳細な検討を行う。

神経疾患・認知機能障害の分布

具体的な疾患名(重複可)	文献数
認知症・認知機能障害	36
てんかん・発作性疾患	4
行動・心理症状	3
脳性麻痺・運動神経疾患	2
転倒	1
その他の機能障害	9



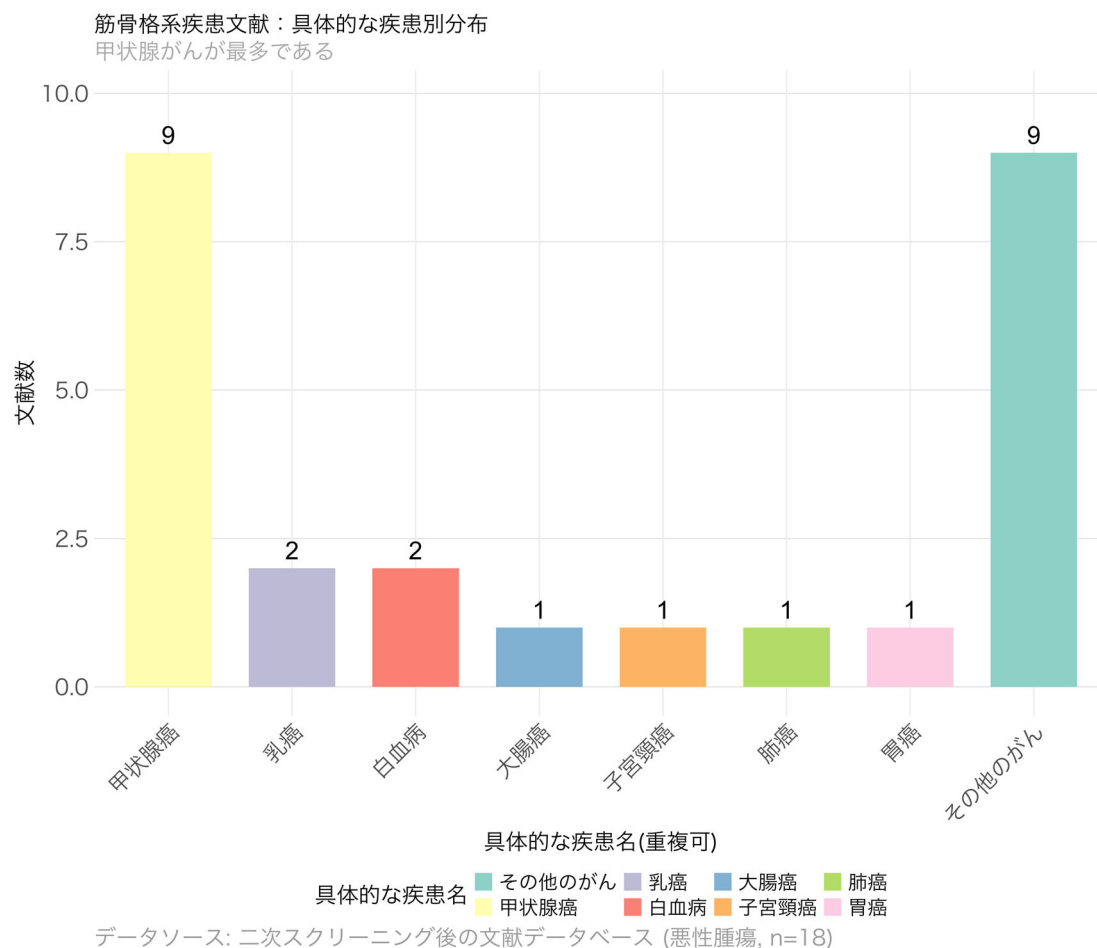
考察:

神経疾患・認知機能障害を対象とした文献（40件）の内、対象疾患として認知機能障害（36件）が最も多い。

2.7 悪性腫瘍に関する文献の分析

悪性腫瘍の文献について詳細な検討を行う。

悪性腫瘍の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
甲状腺癌	9
乳癌	2
白血病	2
大腸癌	1
子宮頸癌	1
肺癌	1
胃癌	1
その他のがん	9



考察:

悪性腫瘍を対象とした文献（18件）の内、甲状腺がん（9件）が対象として最も多い。東日本大震災で発生した福島第一原子力発電所事故に関連した放射線被ばくの影響を評価した研究が要因であると考えられる。

2.8 周産期疾患に関する文献の分析

周産期疾患の文献について詳細な検討を行う。

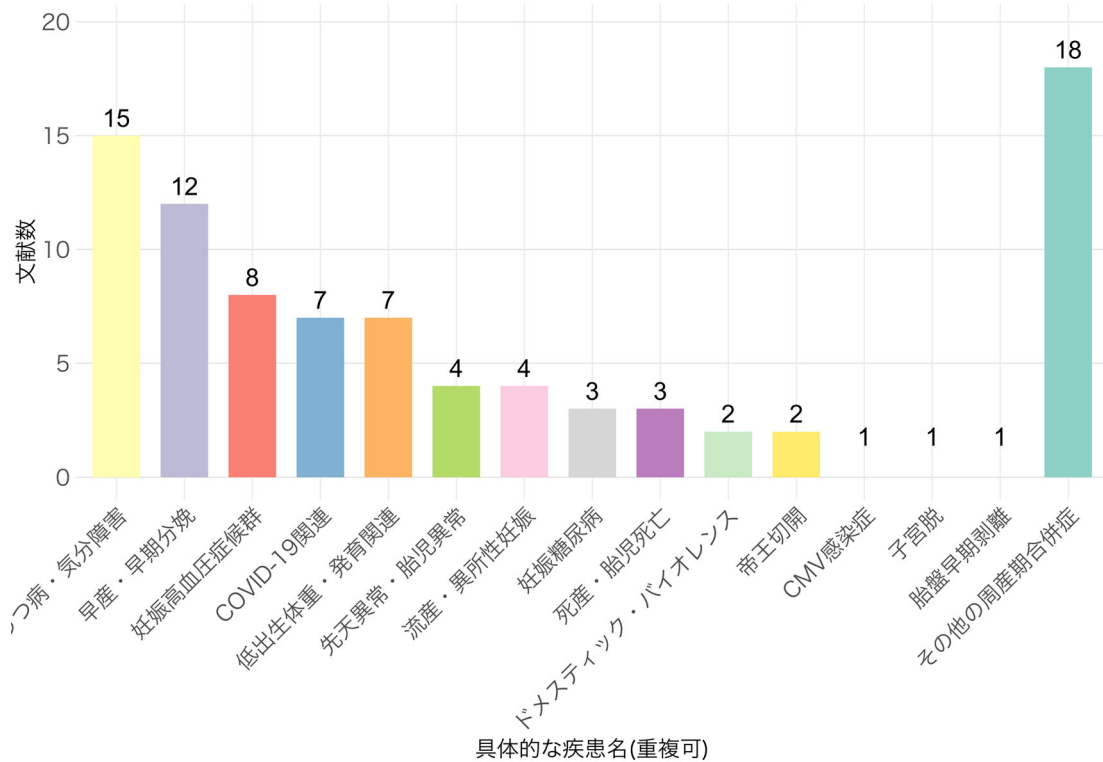
周産期疾患の分布	
具体的な疾患名(重複可)	文献数
周産期うつ病・気分障害	15
早産・早期分娩	12
妊娠高血圧症候群	8
COVID-19関連	7
低出生体重・発育関連	7
先天異常・胎児異常	4
流産・異所性妊娠	4
妊娠糖尿病	3

周産期疾患の分布

具体的な疾患名(重複可) 文献数

死産・胎児死亡	3
ドメスティック・バイオレンス	2
帝王切開	2
CMV感染症	1
子宮脱	1
胎盤早期剥離	1
その他の周産期合併症	18

周産期疾患文献：具体的な疾患別分布
周産期うつ病・気分障害が最多である



具体的な疾患名(重複可)

■ その他の周産期合併症
 ■ 妊娠高血圧症候群
 ■ 先天異常・胎児異常
 ■ 死産・胎児死亡
■ 周産期うつ病・気分障害
 ■ COVID-19関連
 ■ 流産・異所性妊娠
 ■ ドメスティック・バイオレンス
■ 早産・早期分娩
 ■ 低出生体重・発育関連
 ■ 妊娠糖尿病
 ■ 帝王切開

データソース: 二次スクリーニング後の文献データベース (周産期疾患, n=28)

考察:

周産期疾患を対象とした文献（28件）の内、周産期うつ病・気分障害（15件）が最も多かった。

3. 保護因子の分析

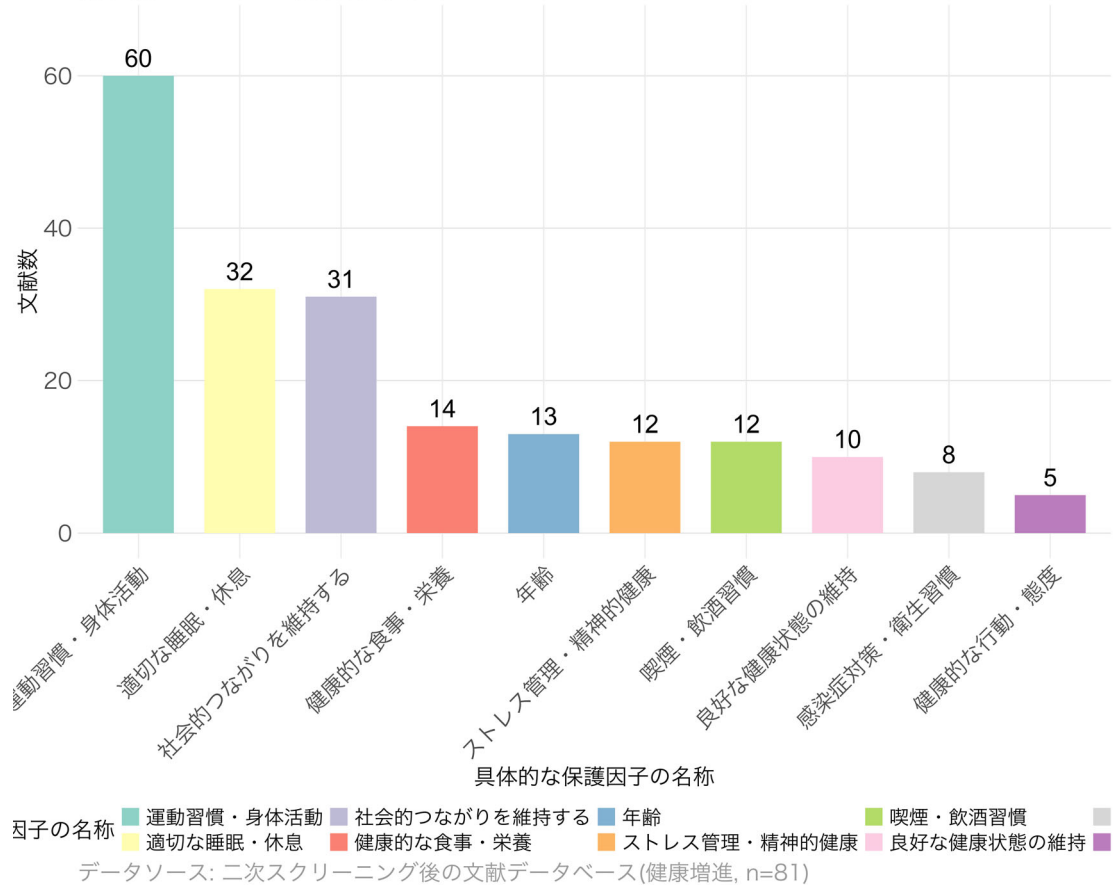
次に、疾患や合併症の予防に係る保護因子に着目して詳細な分析を行う。

3.1 健康行動に関する文献の分析

健康行動を取り扱う文献について詳細な検討を行う。

健康増進に関連する保護因子の分布 (上位10件)	
具体的な保護因子の名称	文献数
運動習慣・身体活動	60
適切な睡眠・休息	32
社会的つながりを維持する	31
健康的な食事・栄養	14
年齢	13
ストレス管理・精神的健康	12
喫煙・飲酒習慣	12
良好な健康状態の維持	10
感染症対策・衛生習慣	8
健康的な行動・態度	5

健康増進関連文献：具体的な保護因子別分布 (上位10件)
研究対象となった主な健康増進因子



考察:
健康行動を対象とした文献（81件）の内、運動習慣・身体活動（60件）が最も多く、適切な睡眠・休息（32件）や社会的つながりを維持するための活動（31件）が上位に位置した。

3.2 社会的支援(ソーシャルサポート)に関する文献の分析

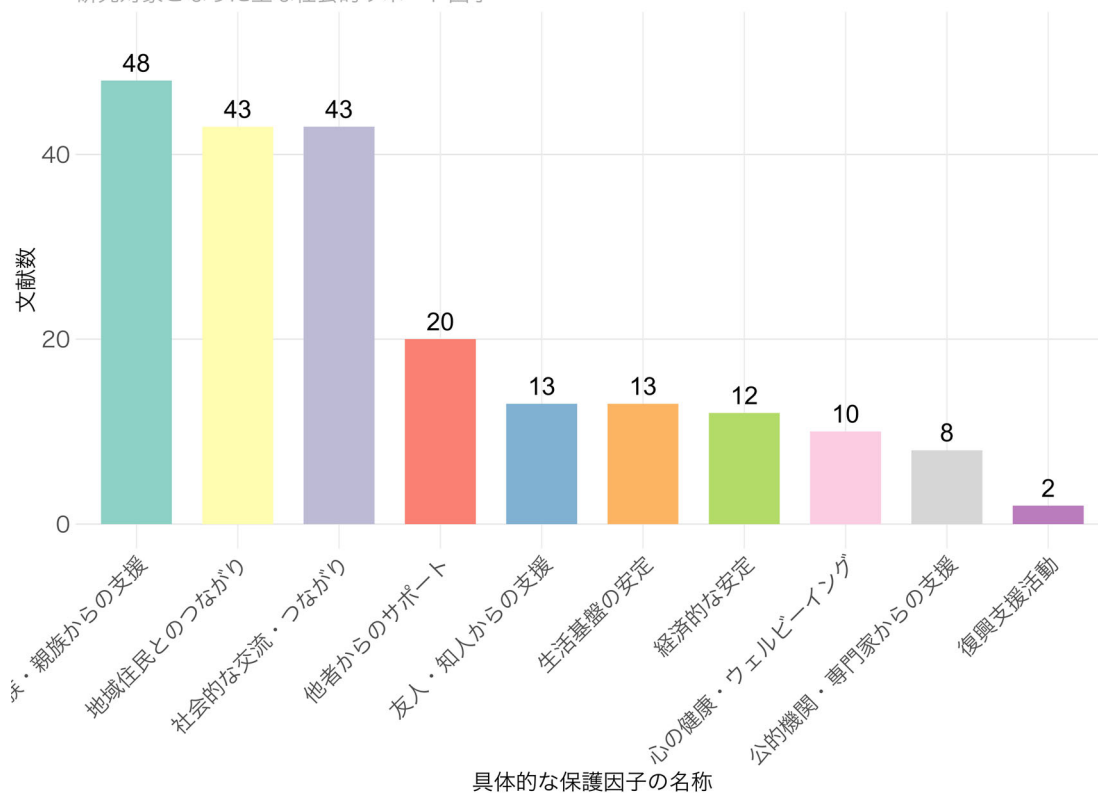
社会的支援を取り扱う文献について詳細な検討を行う。

社会的サポートに関連する保護因子の分布 (上位10件)	
具体的な保護因子の名称	文献数
家族・親族からの支援	48
地域住民とのつながり	43
社会的な交流・つながり	43
他者からのサポート	20
友人・知人からの支援	13
生活基盤の安定	13
経済的な安定	12
心の健康・ウェルビーイング	10
公的機関・専門家からの支援	8

社会的サポートに関連する保護因子の分布 (上位10件)

具体的な保護因子の名称	文献数
復興支援活動	2

社会的サポート関連文献：具体的な保護因子別分布 (上位10件)
研究対象となった主な社会的サポート因子



の名称

- 家族・親族からの支援
- 社会的な交流・つながり
- 友人・知人からの支援
- 経済的な安定
- 公
- 地域住民とのつながり
- 他者からのサポート
- 生活基盤の安定
- 心の健康・ウェルビーイング
- 復興

データソース: 二次スクリーニング後の文献データベース(社会的サポート, n=86)

考察:

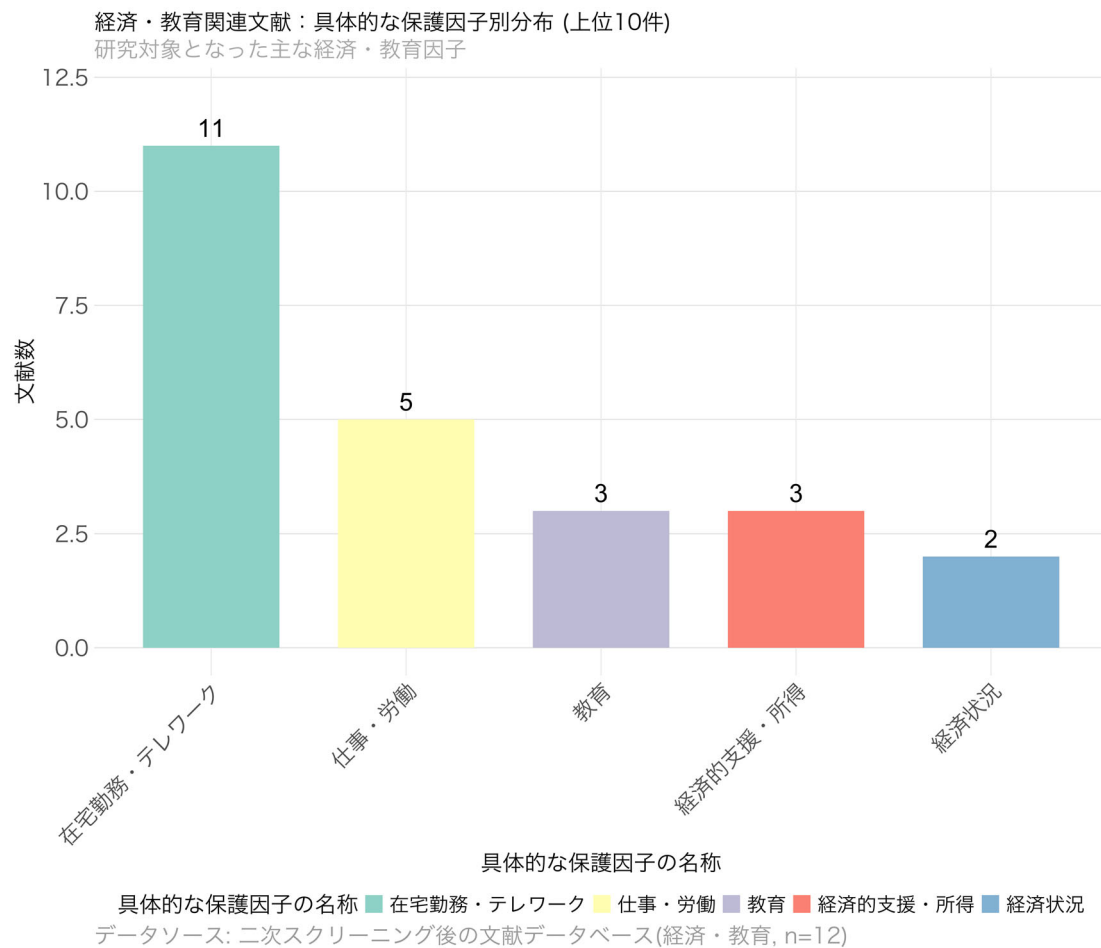
社会的支援を対象とした文献（86件）の内、家族・親族からの支援（48件）が最も多く、地域住民とのつながり（43件）や社会的な交流・つながり（43件）が上位に位置した。

3.3 経済・教育的状況に関する文献の分析

経済・教育的状況を取り扱う文献について詳細な検討を行う。

経済・教育に関連する保護因子の分布 (上位10件)

具体的な保護因子の名称	文献数
在宅勤務・テレワーク	11
仕事・労働	5
教育	3
経済的支援・所得	3
経済状況	2



考察:

経済・教育的状況を対象とした文献（12件）の内、COVID-19感染症の流行下における在宅勤務・テレワーク（11件）が最も多く、仕事・労働に関する研究（5件）が続いている。

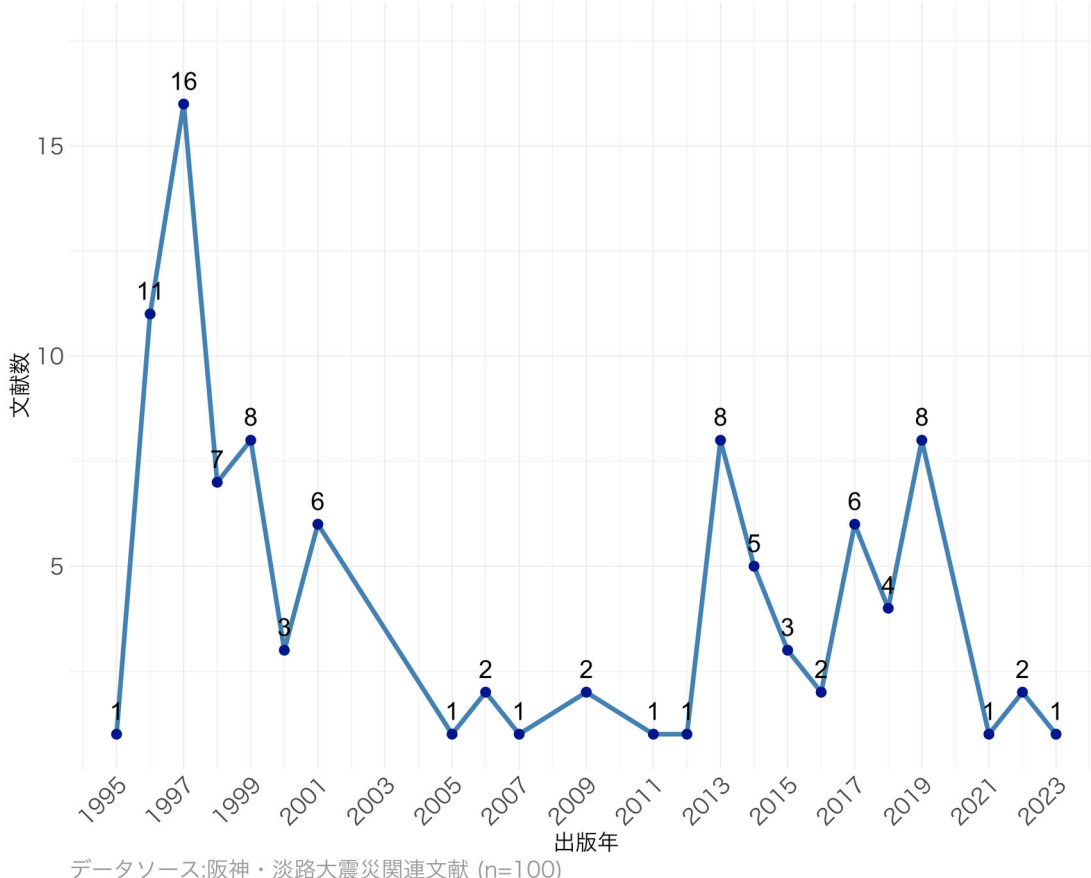
4. 阪神・淡路大震災に関する文献の分析

次に、阪神・淡路大震災に焦点を当てて詳細な検討を行う。阪神・淡路大震災関連の文献は計100件あり、全体の7.8%を占めている。

4.1 出版年別の推移

阪神・淡路大震災関連文献の出版年別の分布を確認する。

阪神・淡路大震災関連文献の出版年推移 (1995-2024)
長期間にわたる研究出版の特徴



考察:

阪神・淡路大震災関連文献の出版年推移を見ると、災害発生直後の1995年は文献数が少なく（1件）、1997年にピーク（16件）を迎え、その後急激な減少傾向を示している。これは、研究の実施から出版までのタイムラグがあることや、長期的な影響調査の結果が報告されるまでの期間を反映していると考えられる。長期的なフォローアップが行われている研究には乏しいと考えられる。2013年以降に文献数が増加しているが、東日本大震災を契機として実施された研究が含まれている。

4.2 言語別の分析

阪神・淡路大震災関連文献の言語別の分布を確認する。

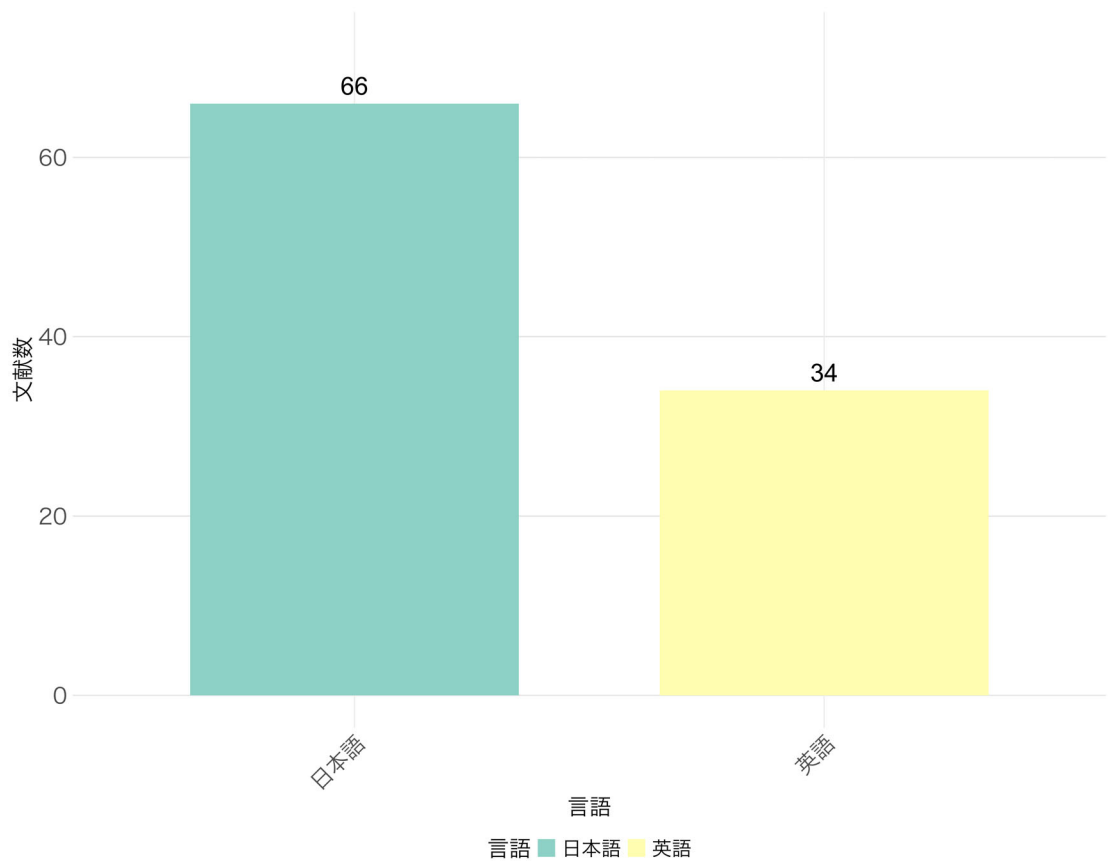
出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
-------	-----	-------

日本語	66	66.0%
-----	----	-------

英語	34	34.0%
----	----	-------

阪神・淡路大震災関連文献：言語別分布



データソース:阪神・淡路大震災関連文献 (n=100)

考察:

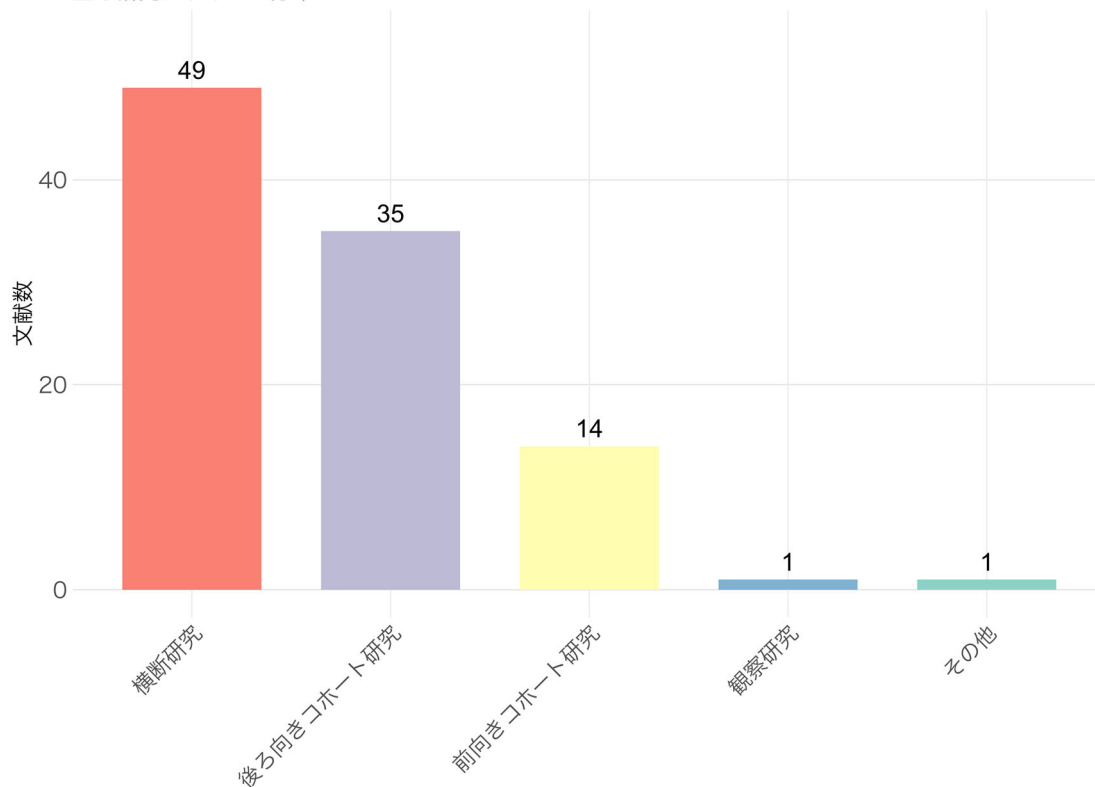
言語別の分析から、阪神・淡路大震災関連文献の出版言語は日本語（66件、66%）が最も多く、次いで英語（34件、34%）の順となっている。

4.3 研究デザインの分析

阪神・淡路大震災関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	49	49.0%
後ろ向きコホート研究	35	35.0%
前向きコホート研究	14	14.0%
観察研究	1	1.0%
その他	1	1.0%

阪神・淡路大震災関連文献：研究デザイン別分布
主な研究デザインの分布



研究デザイン: 横断研究 観察研究 後ろ向きコホート研究 前向きコホート研究 その他
データソース: 阪神・淡路大震災関連文献 (n=100)

考察:

研究デザインの分析から、阪神・淡路大震災関連研究では横断研究が最も多く用いられており（49件、49%）、半数を占めている。これに次いで、後ろ向きコホート研究（35件、35%）、前向きコホート研究（14件、14%）が続いている。

4.4 災害フェーズの分類と分析

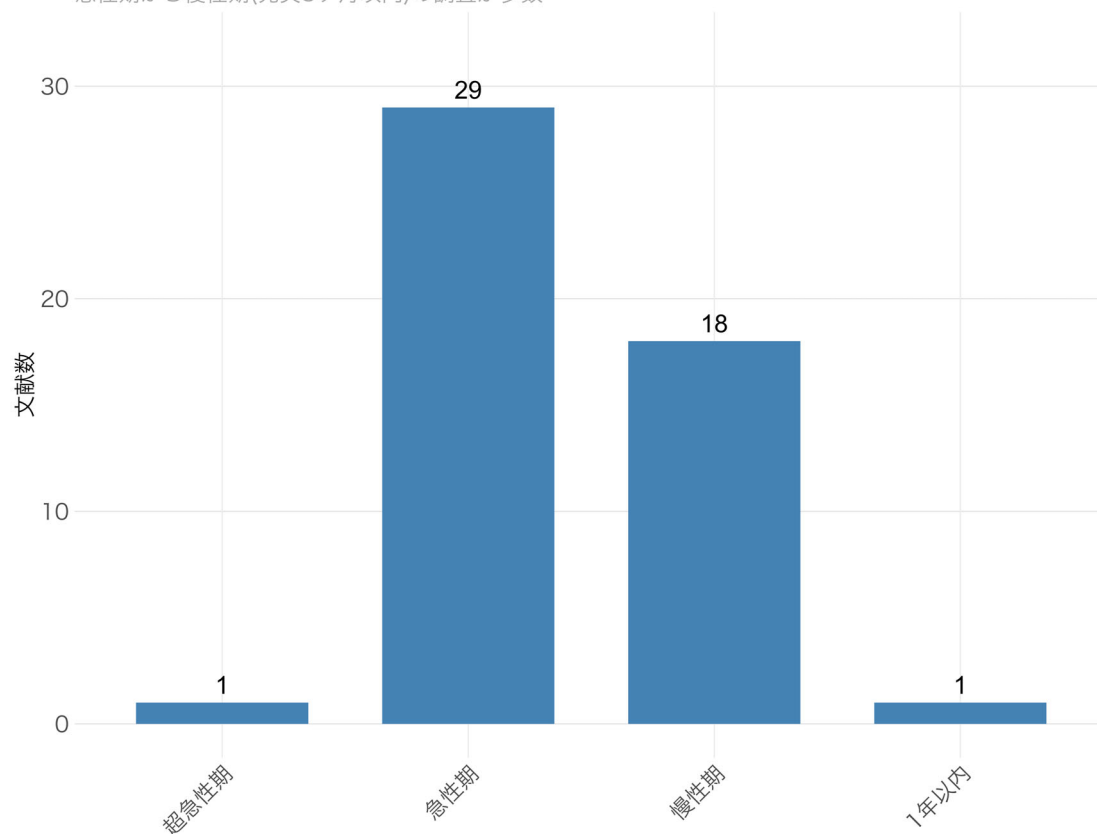
阪神・淡路大震災関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	1	2.0%
急性期	29	59.2%
慢性期	18	36.7%
1年以内	1	2.0%

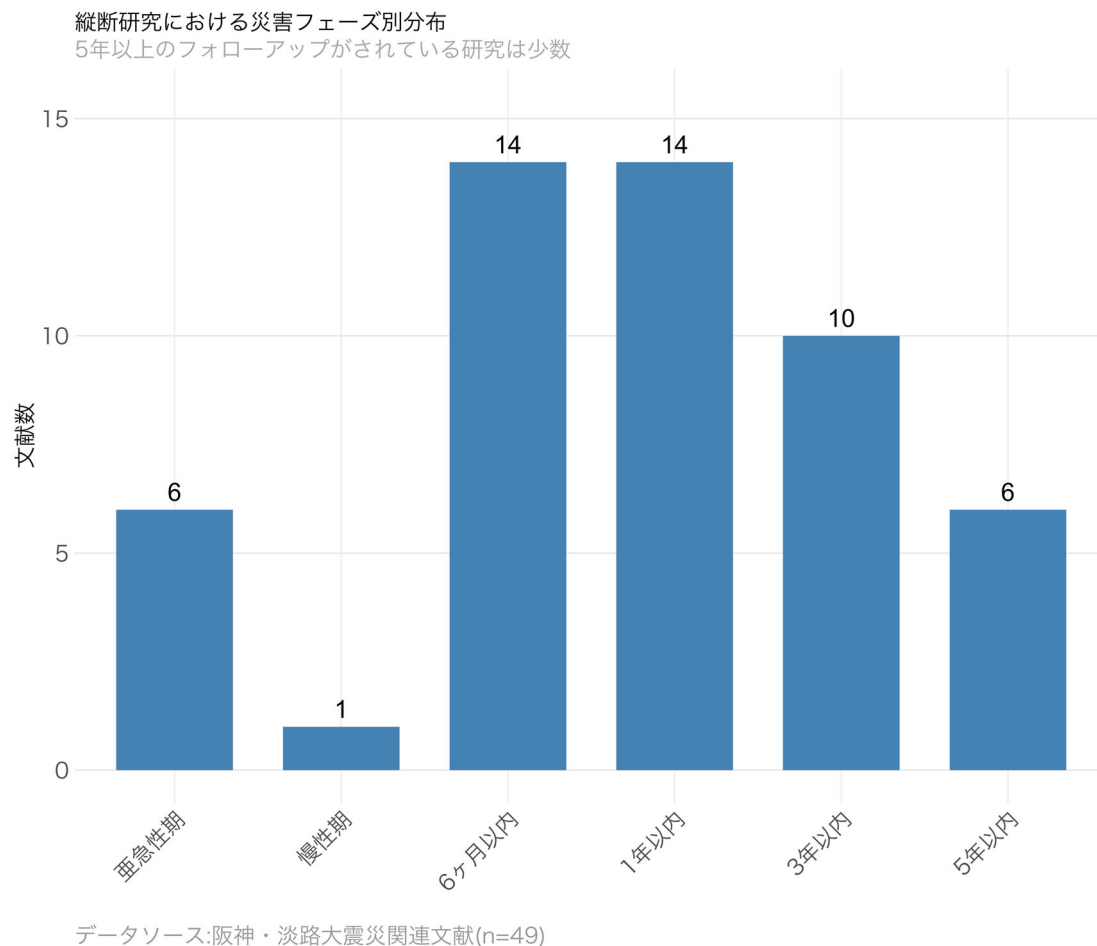
横断研究における災害フェーズ別分布
急性期から慢性期(発災3ヶ月以内)の調査が多数



データソース:阪神・淡路大震災関連文献(n=49)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
亜急性期	6	11.8%
慢性期	1	2.0%
6ヶ月以内	14	27.5%
1年以内	14	27.5%
3年以内	10	19.6%
5年以内	6	11.8%



考察:

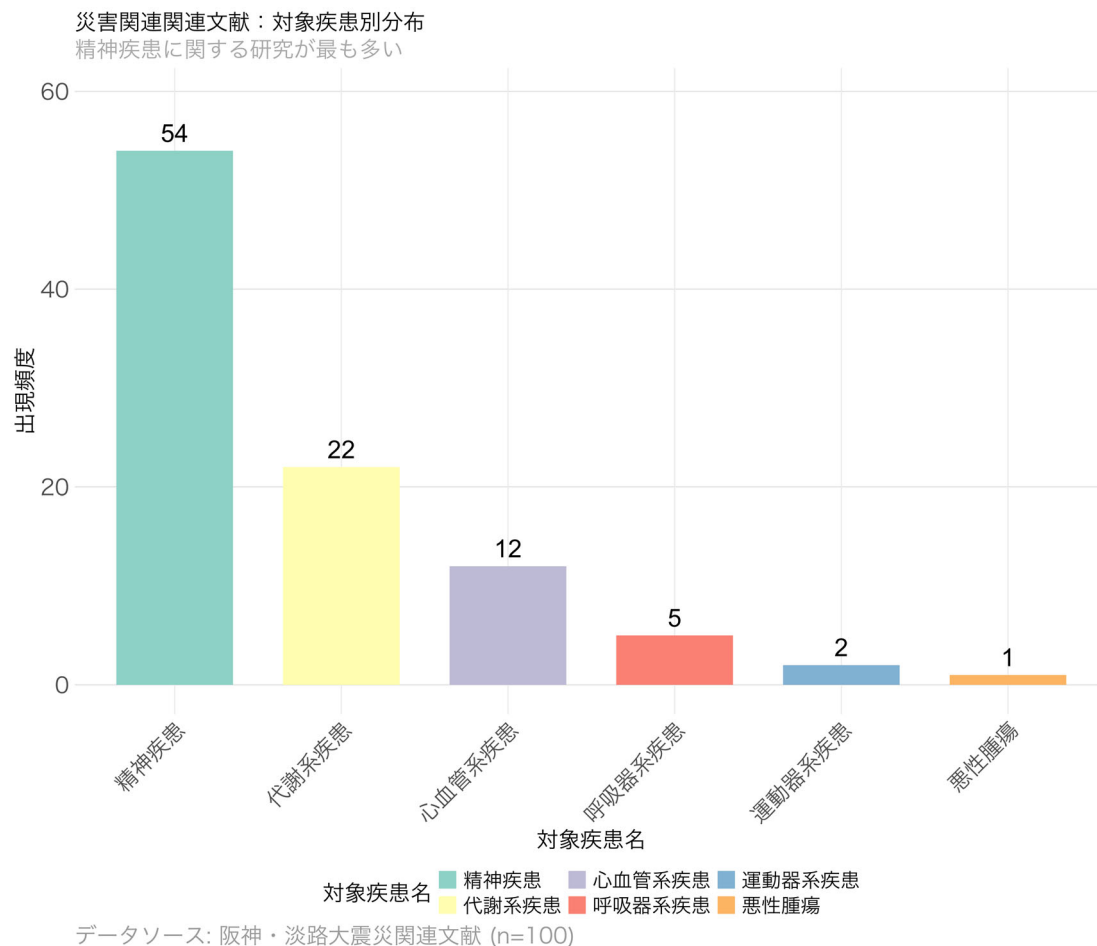
横断研究では急性期（29件）が最多数であり、慢性期（18件）に行われたものを合わせて大部分を占めている。

縦断研究では5年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、長期間のフォローアップを実施した研究はない。多くの研究においてフォローアップ期間は1年未満となっている。

4.5 対象疾患の分析

阪神・淡路大震災関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	54	56.2%
代謝系疾患	22	22.9%
心血管系疾患	12	12.5%
呼吸器系疾患	5	5.2%
運動器系疾患	2	2.1%
悪性腫瘍	1	1.0%



考察:

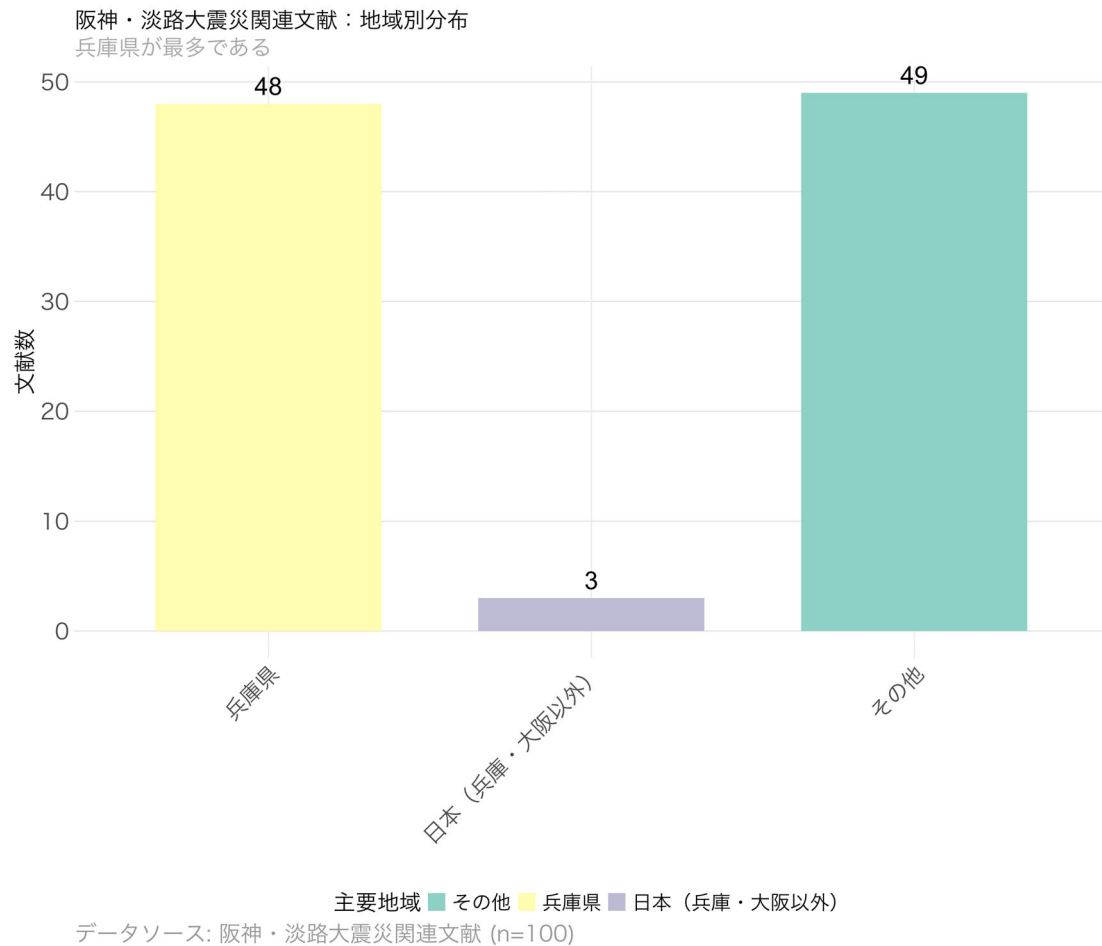
対象疾患別の分析から、阪神・淡路大震災関連文献では精神疾患を対象にした文献が半数以上を占めており（54件、54%）、代謝系疾患（22件、22%）、心血管系疾患（12件、12%）が続いている。

4.6 地理的範囲の分析

阪神・淡路大震災関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

阪神・淡路大震災関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
兵庫県	48	48.0%
日本（兵庫・大阪以外）	3	3.0%
その他	49	49.0%

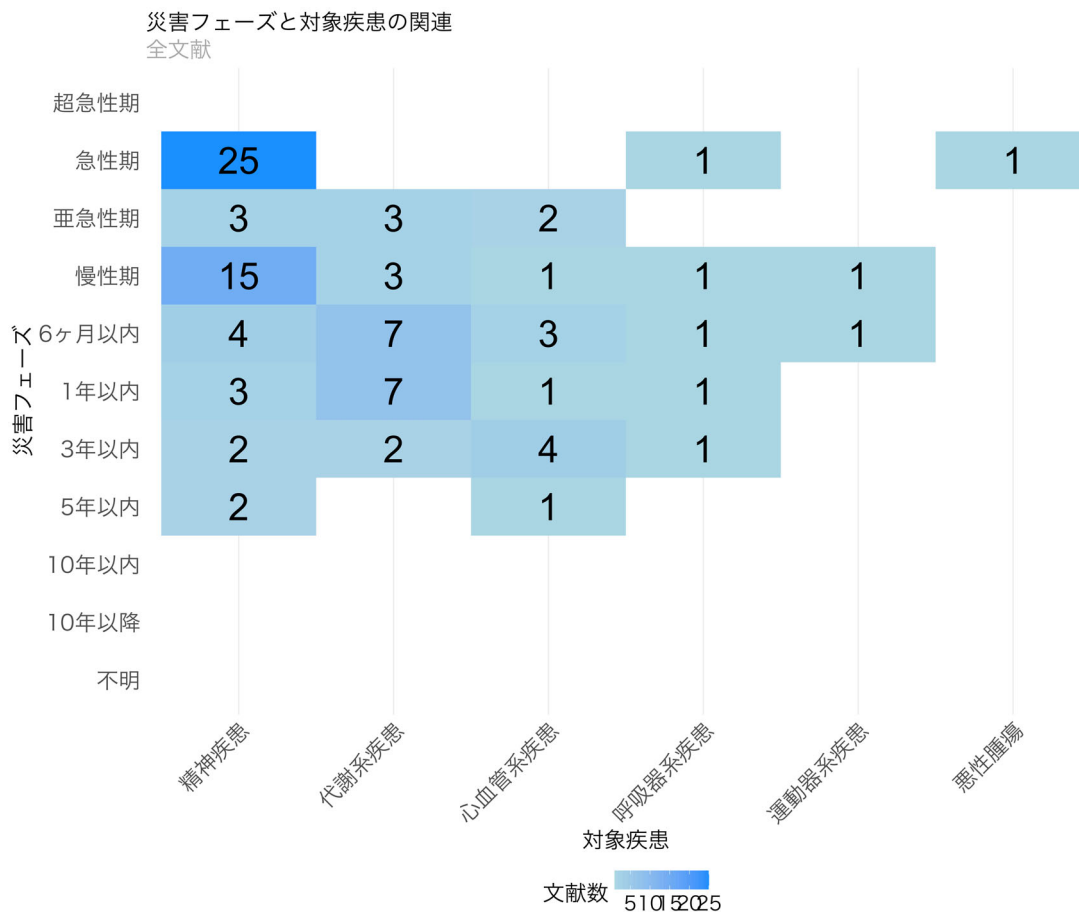


考察:

地理的範囲の分析から、震源地である兵庫県を対象とした研究が最多である（48件）。

4.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

阪神・淡路大震災関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



データソース: 阪神・淡路大震災関連文献 (n=100)

考察:

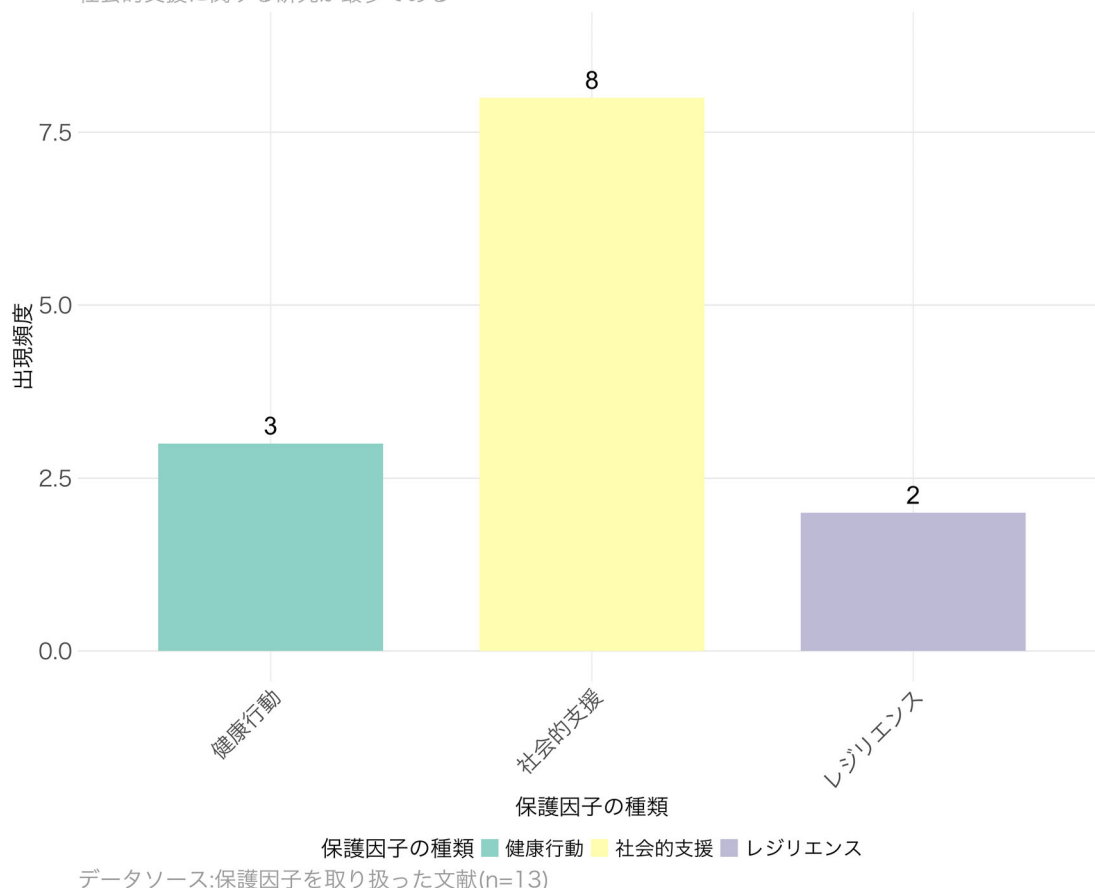
急性期から慢性期にかけて精神疾患に関する研究が多数行われている。代謝系疾患や心血管系疾患などでは発災6ヶ月以降に調査が実施されている傾向にある。

4.8 保護因子の分析

阪神・淡路大震災関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	3	23.1%
社会的支援	8	61.5%
レジリエンス	2	15.4%

災害関連関連文献：保護因子別分布
社会的支援に関する研究が最多である



考察:

保護因子に関する研究は13件であり、阪神・淡路大震災関連文献（100件）の%を占めていた。社会的支援について調査した研究（86件）が最も多かった。

4.9 阪神・淡路大震災文献分析の概要

阪神・淡路大震災関連文献の概要は以下の通りである。

阪神・淡路大震災文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
阪神・淡路大震災関連文献数	100件
最も多い出版年	1997年（16件）
主要出版言語	日本語（66件）
最も多い研究デザイン	横断研究（49件）
最も多い対象疾患	精神疾患（54件）
保護因子に関する文献	13件
最も多い研究対象地域	その他（54件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、阪神・淡路大震災関連文献は100件（7.8%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移: 文献数は1995年から増加し、1997年にピーク（16件）を迎えた後に急激な減少傾向を示している。

言語分布: 英語（34件、34%）、日本語（66件、66%）であり日本語文献が多い。

研究デザイン: 横断研究（49件、49%）が最も多く、後ろ向きコホート研究（35件、35%）と前向きコホート研究（14件、14%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究では急性期～慢性期に行われたものが大部分を占めている。縦断研究では5年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、3年以上のフォローアップを実施した研究は限定的である。

対象疾患: 精神疾患（54件、54%）が多く、次いで代謝系疾患（22件、22%）、心血管系疾患（12件、12%）に関する研究が続く。

保護因子: 保護因子に関する研究は13件であり、東日本大震災関連文献（100件）の13%を占めていた。

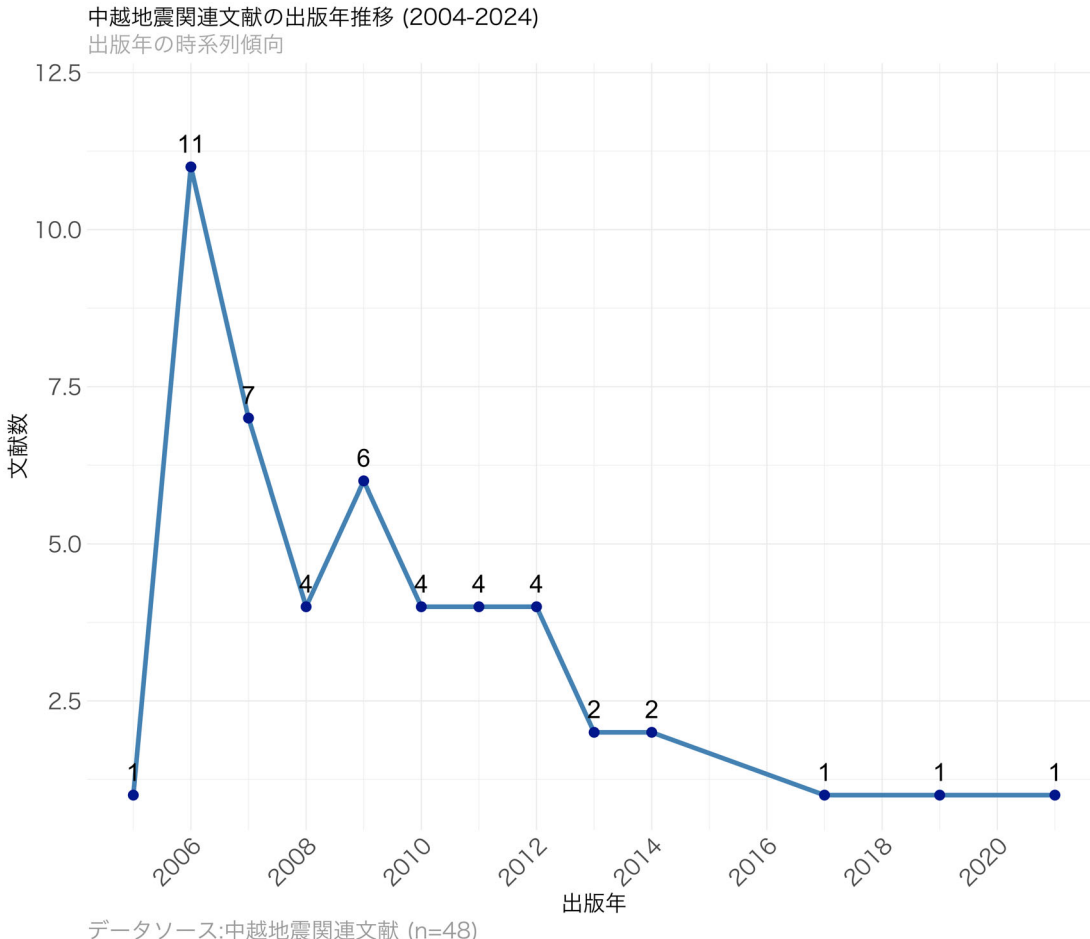
地理的範囲: 兵庫県（48件、48%）が主な研究範囲である。

5. 中越地震に関する文献の分析

次に、中越地震に焦点を当てて詳細な検討を行う。中越地震関連の文献は計48件あり、全体の3.7%を占めている。

5.1 出版年別の推移

中越地震関連文献の出版年別の分布を確認する。



考察:

中越地震関連文献の出版年推移を見ると、災害発生直後の2004年は文献数が少なく（1件）、2006年(11件)と2009年(7件)にピークを認める。長期的なフォローアップを実施した研究には乏しい。これは、研究の実施から出版までのタイムラグがあること、長期的な影響の結果が報告されるまでの期間があることを反映していると考えられる。

5.2 言語別の分析

中越地震関連文献の言語別の分布を確認する。

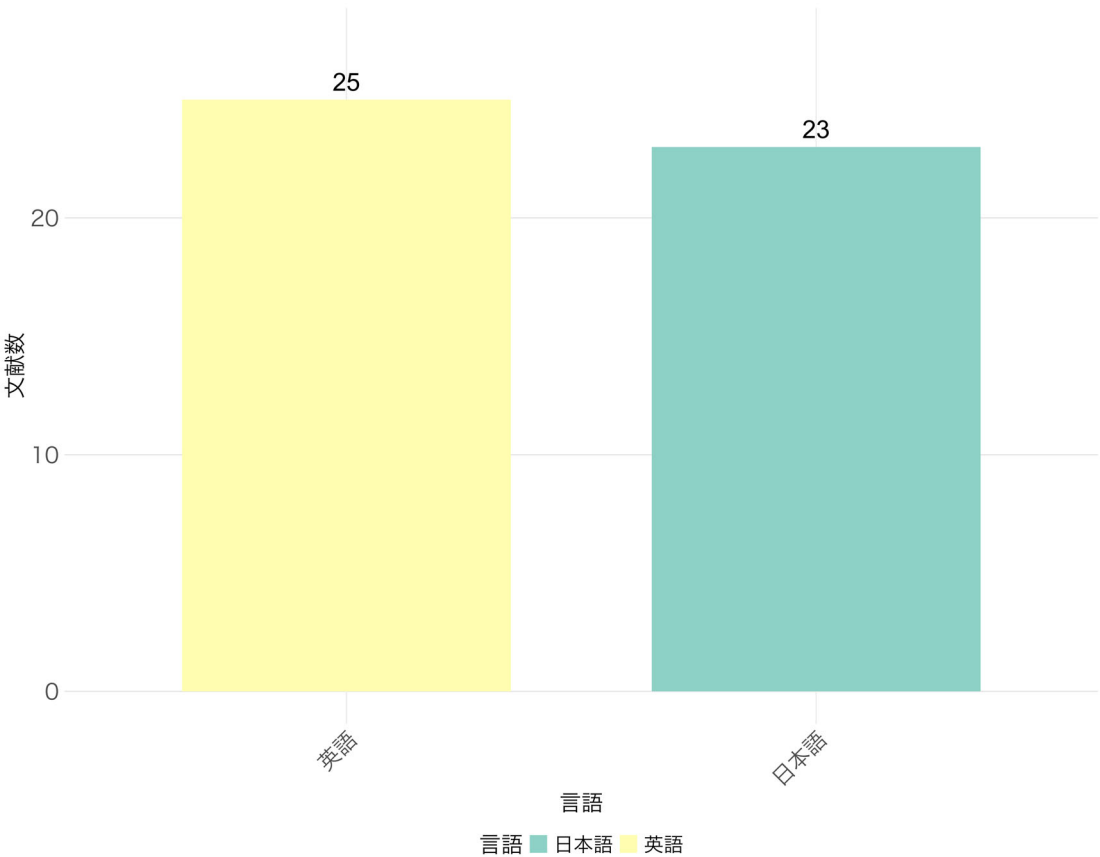
出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
-------	-----	-------

日本語	23	47.9%
-----	----	-------

英語	25	52.1%
----	----	-------

中越地震関連文献：言語別分布



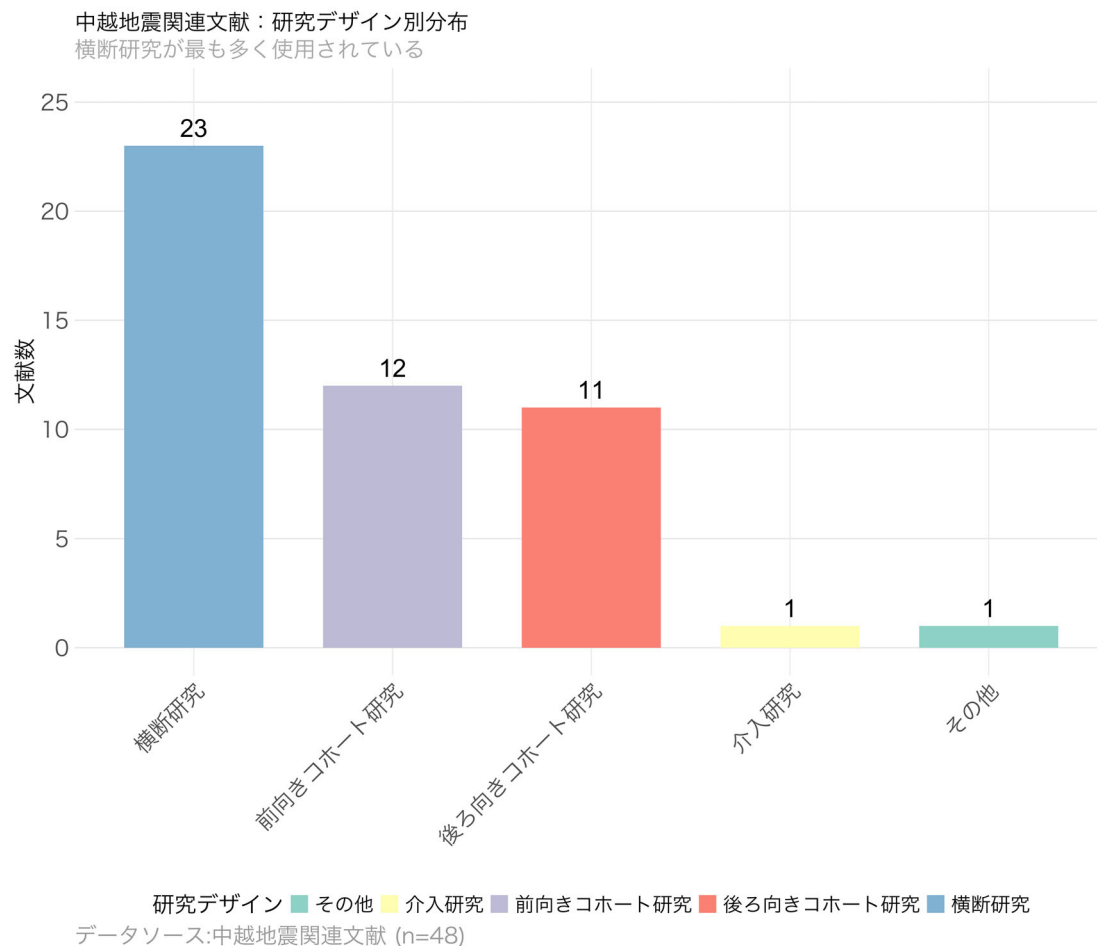
データソース:中越地震関連文献 (n=48)

考察:
言語別の分析から、中越地震関連文献の出版言語は英語（25件、52.1%）と日本語（23件、47.9%）でほぼ同数である。

5.3 研究デザインの分析

中越地震関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	23	47.9%
前向きコホート研究	12	25.0%
後ろ向きコホート研究	11	22.9%
介入研究	1	2.1%
その他	1	2.1%



考察:

研究デザインの分析から、中越地震関連文献では横断研究が最も多く用いられており（23件、47.9%）、半数を占めている。これに次いで、前向きコホート研究（12件、25%）、後ろ向きコホート研究（11件、22.9%）が続いている。1件のみであるものの、介入研究が報告されている。

5.4 災害フェーズの分類と分析

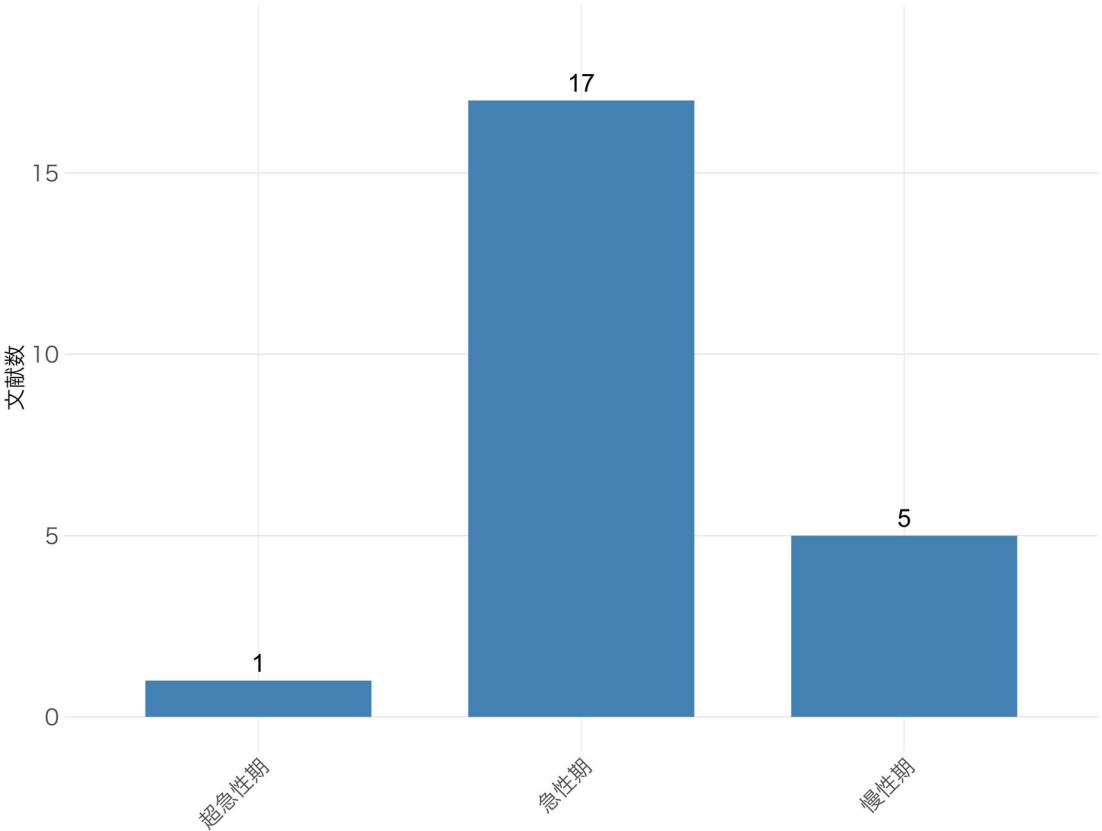
中越地震関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	1	4.3%
急性期	17	73.9%
慢性期	5	21.7%

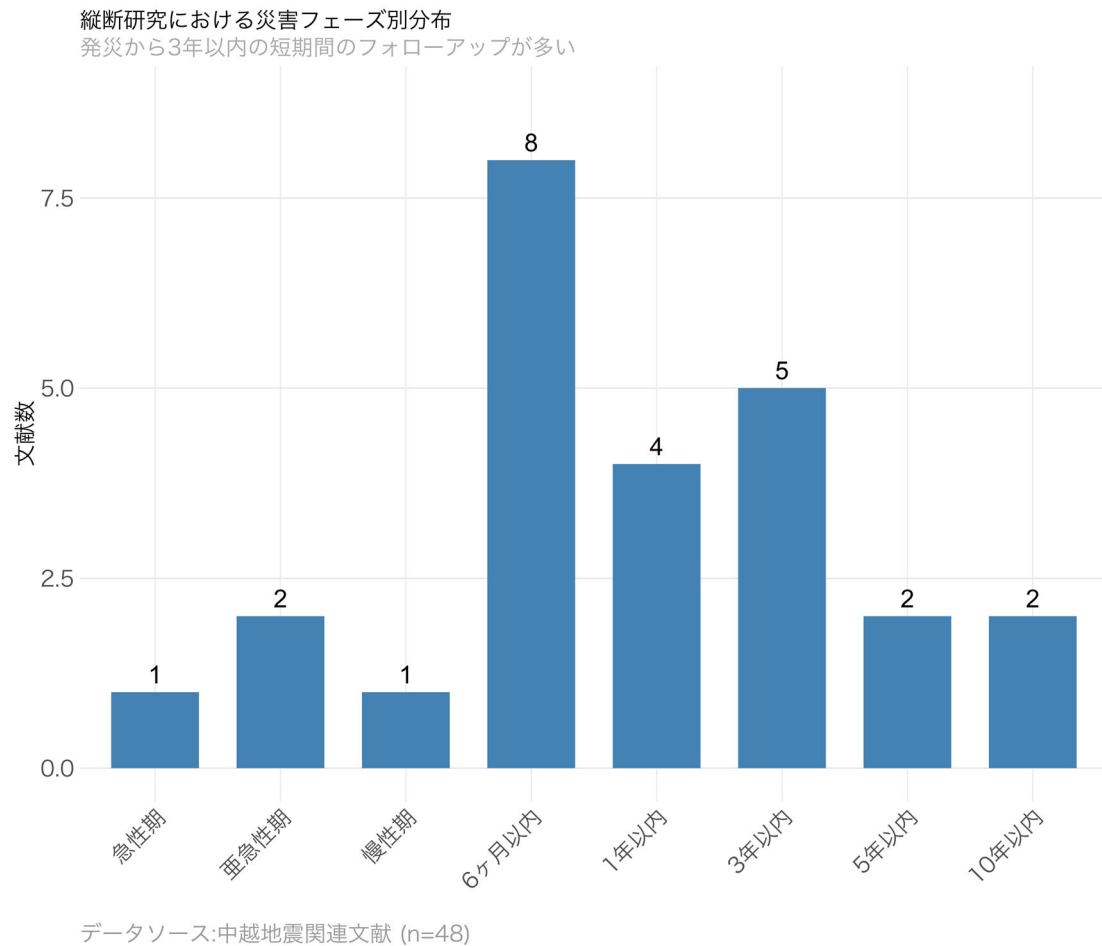
横断研究における災害フェーズ別分布
急性期に行われた研究が最も多い



データソース:中越地震関連文献 (n=48)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	1	4.0%
亜急性期	2	8.0%
慢性期	1	4.0%
6ヶ月以内	8	32.0%
1年以内	4	16.0%
3年以内	5	20.0%
5年以内	2	8.0%
10年以内	2	8.0%



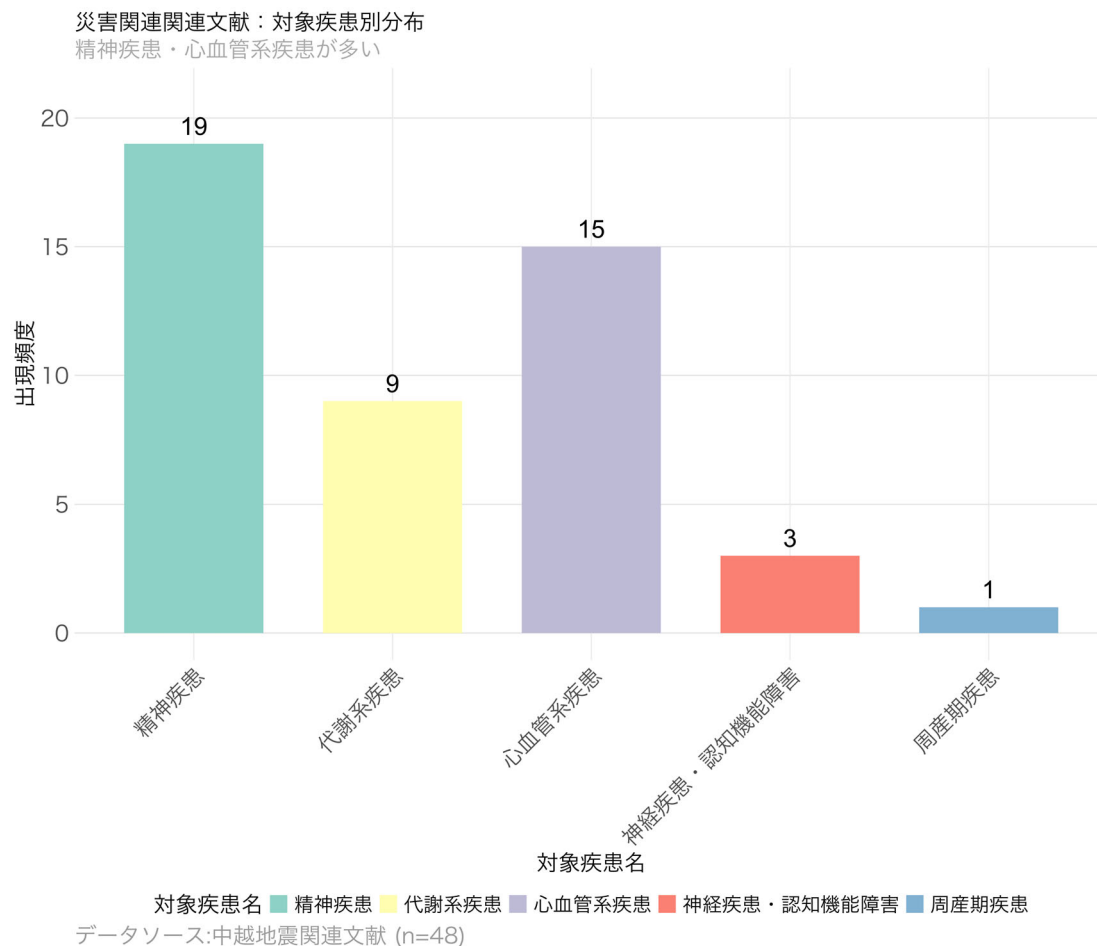
考察:

横断研究では急性期（17件）が最多数であり、すべての研究が慢性期（5件）までに行われている。縦断研究では3年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、長期間のフォローアップを実施した研究はない。多くの研究においてフォローアップ期間は1年未満となっている。

5.5 対象疾患の分析

中越地震関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	19	40.4%
代謝系疾患	9	19.1%
心血管系疾患	15	31.9%
神経疾患・認知機能障害	3	6.4%
周産期疾患	1	2.1%



考察:

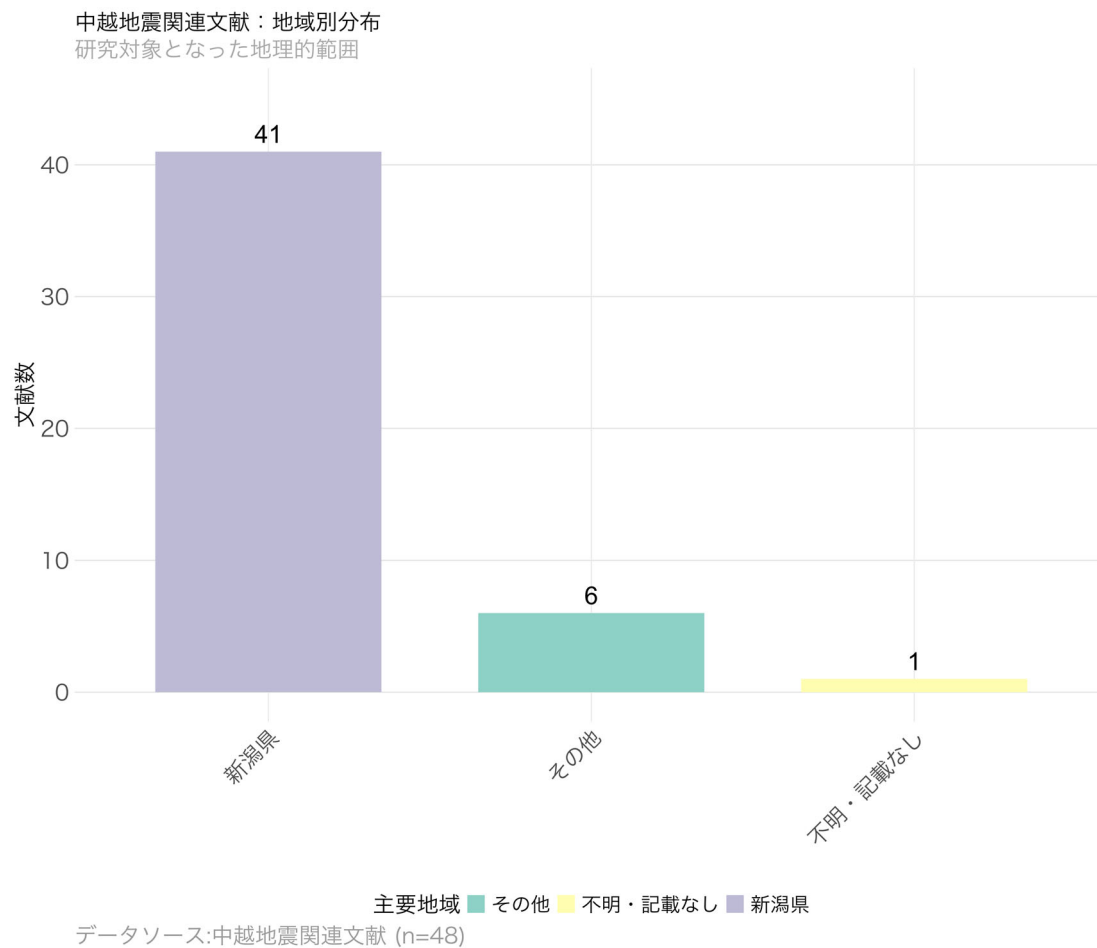
対象疾患の分析から、中越地震関連文献では精神疾患を対象とした文献が最多であり（19件、39.6%）、心血管系疾患（15件、31.2%）が続いている。

5.6 地理的範囲の分析

中越地震関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

中越地震関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
新潟県	41	85.4%
その他	6	12.5%
不明・記載なし	1	2.1%

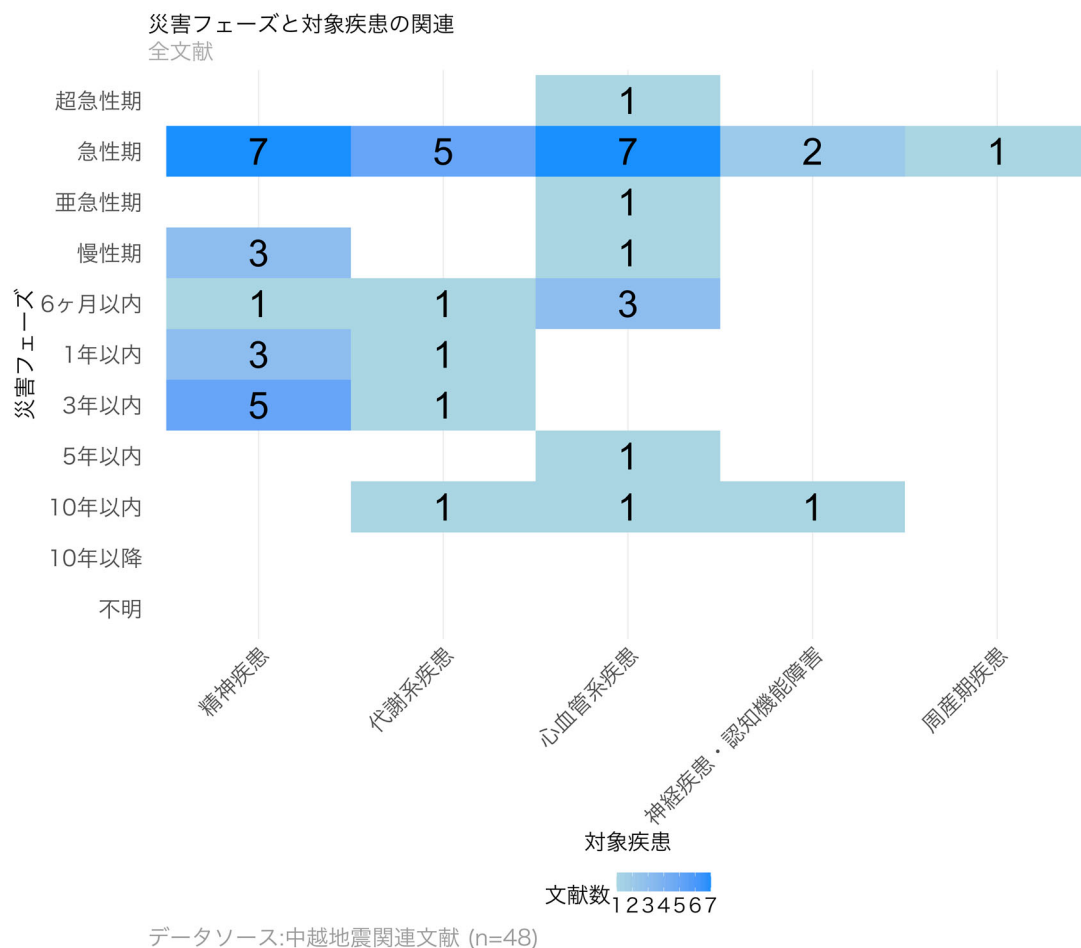


考察:

地理的範囲の分析から、新潟県を対象とした研究が大半である（41件）。これは、新潟県の地理的特性と地震という局所災害が要因として考えられる。

5.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

中越地震関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



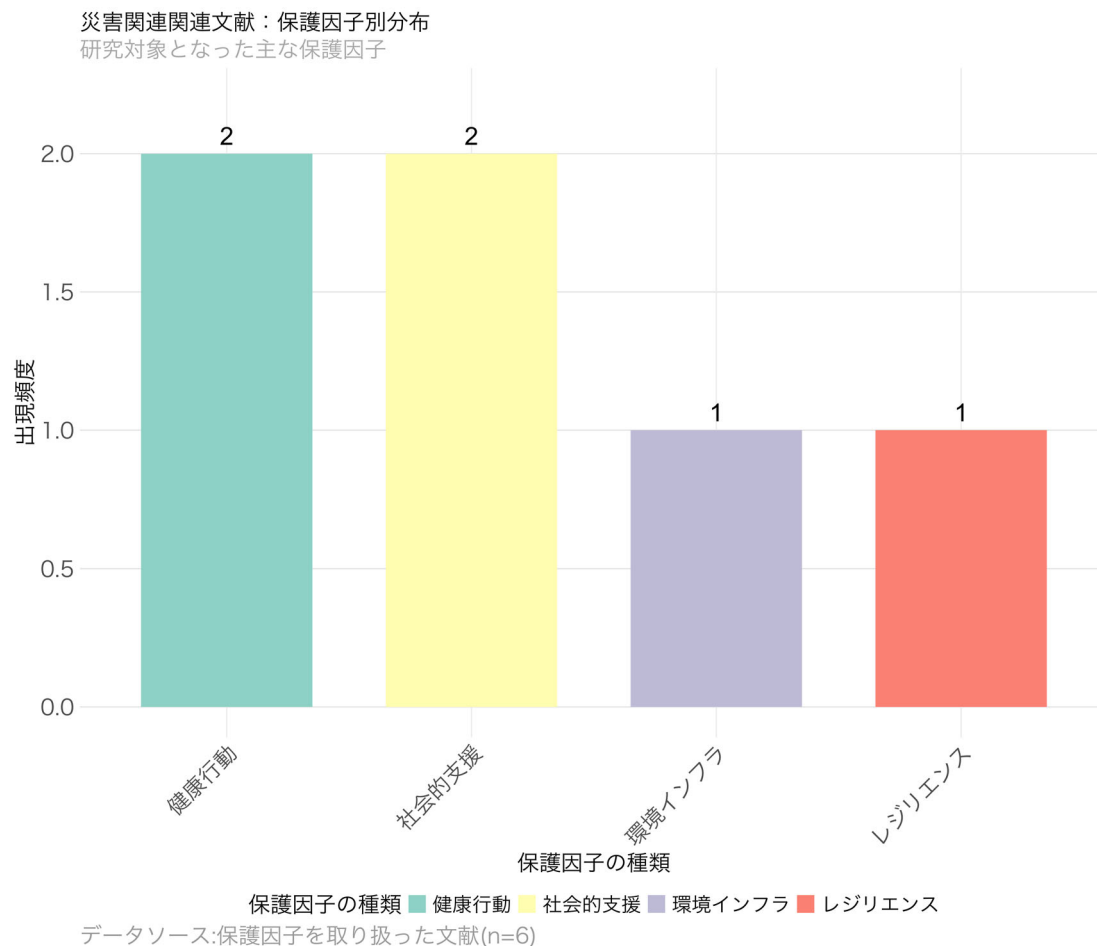
考察:

多くの研究が急性期以前に実施されている。精神疾患や心血管系疾患に関しては縦断的に評価されており、それ以外の疾患についてのフォローアップは乏しい。

5.8 保護因子の分析

中越地震関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	2	33.3%
社会的支援	2	33.3%
環境インフラ	1	16.7%
レジリエンス	1	16.7%



考察:

保護因子に着目した研究が6件と極めて限られており、全体的に研究の実施に乏しい。

5.9 中越地震文献分析の概要

中越地震関連文献の概要は以下の通りである。

中越地震文献分析の概要

分析項目	結果
総文献数	1287件
中越地震関連文献数	48件
最も多い出版年	2006年（11件）
主要出版言語	英語（25件）
最も多い研究デザイン	横断研究（23件）
最も多い対象疾患	精神疾患（19件）
保護因子に関する文献	6件
最も多い研究対象地域	新潟県（19件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、中越地震関連文献は48件（3.7%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移: 文献数は2004年から増加し、2006年と2009年にピークを認める。

言語分布: 英語（25件、52.1%）、日本語（23件、47.9%）でほぼ同数である。

研究デザイン: 横断研究（23件、47.9%）が最も多く、前向きコホート研究（12件、25%）と後ろ向きコホート研究（11件、22.9%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究では全ての研究が慢性期までに行われている。縦断研究では3年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、多くの研究においてフォローアップ期間は1年未満となっている。

対象疾患: 精神疾患（19件、39.6%）が多く、次いで心血管系疾患（15件、31.2%）、代謝系疾患（9件、18.8%）に関する研究が続く。

保護因子: 保護因子に関する研究は6件であり、中越地震関連文献（48件）の12.5%と限定的である。

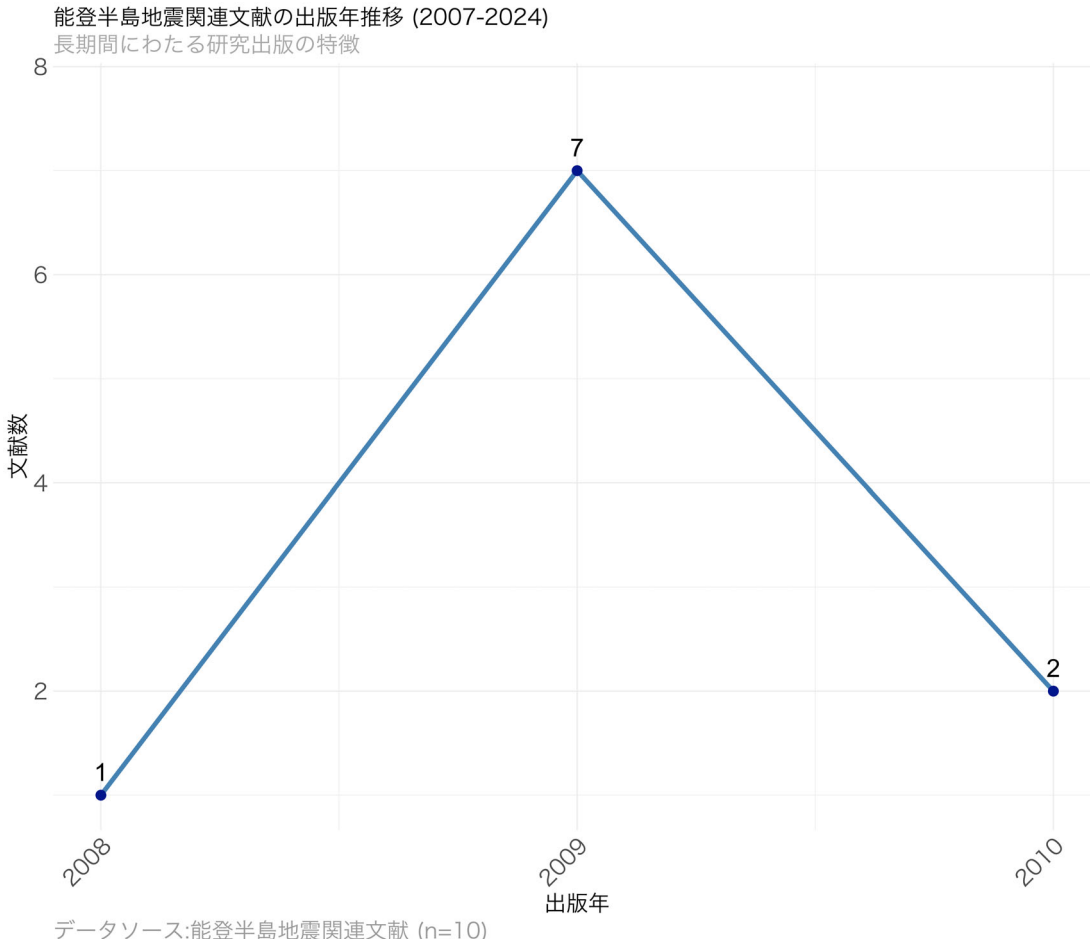
地理的範囲: 新潟県（41件）が主な研究範囲である。

6. 能登半島地震に関する文献の分析

次に、能登半島地震に焦点を当てて詳細な検討を行う。能登半島地震関連の文献は計10件あり、全体の0.8%を占めている。

6.1 出版年別の推移

能登半島地震関連文献の出版年別の分布を確認する。



考察:

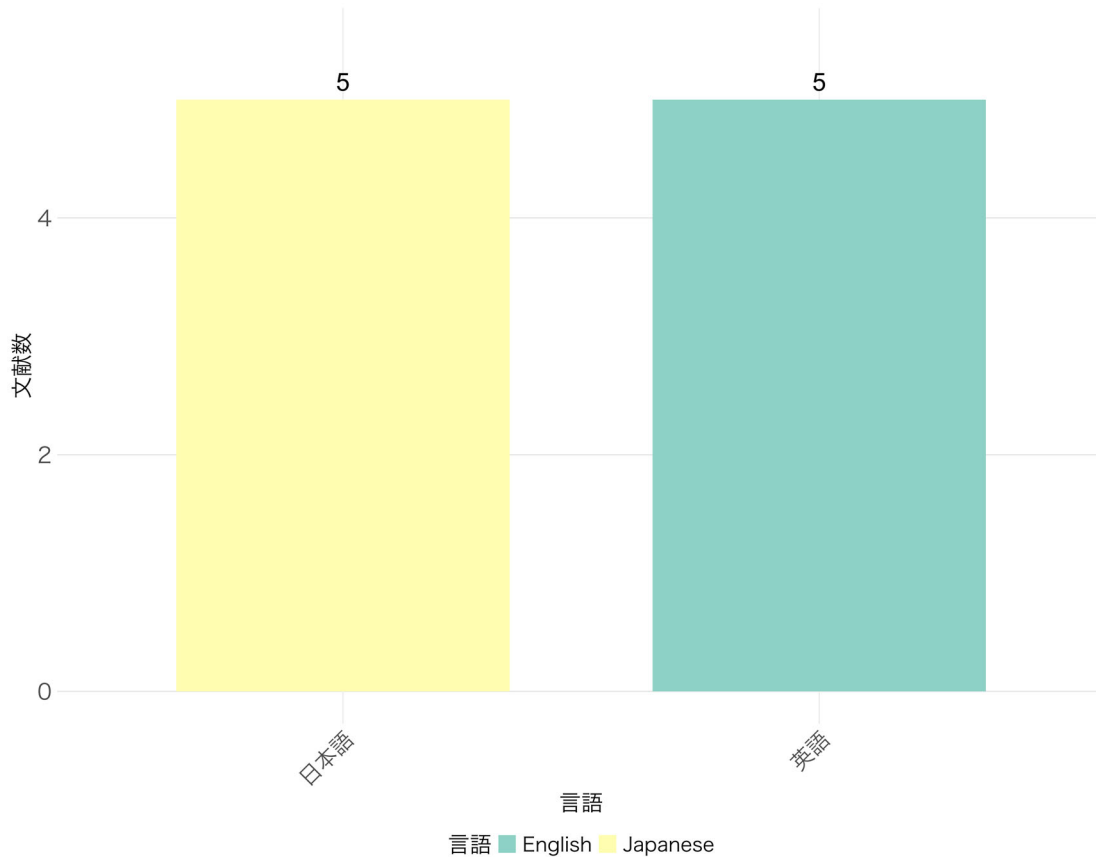
能登半島地震の発災翌年から3年以内に全ての文献が出版されている。遠隔期における文献の出版は認められない。

6.2 言語別の分析

能登半島地震関連文献の言語別の分布を確認する。

出版言語別の分布		
出版言語別	文献数	割合(%)
日本語	5	50.0%
英語	5	50.0%

能登半島地震関連文献：言語別分布



データソース:能登半島地震関連文献 (n=10)

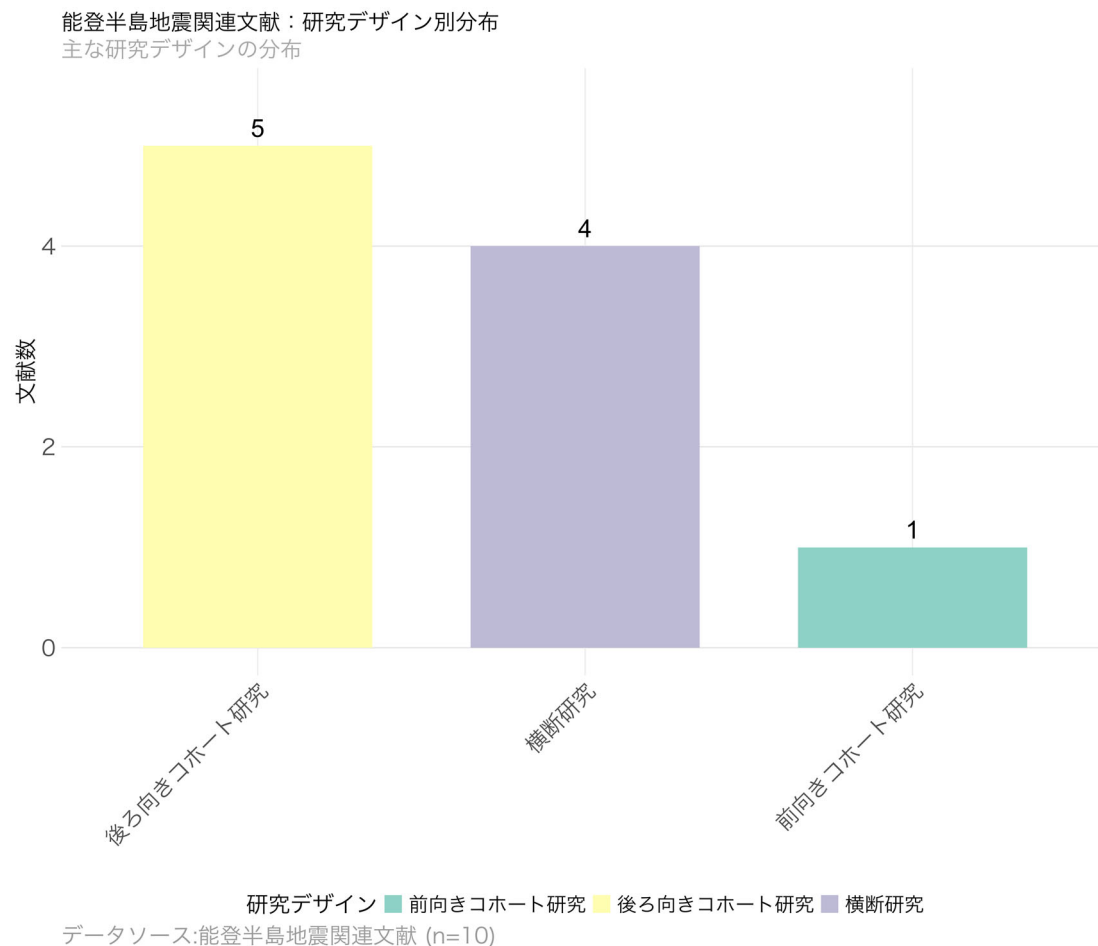
考察:

言語別の分析から、能登半島地震関連文献の出版言語は英語（5件、50%）と日本語（5件、50%）でほぼ同数である。

6.3 研究デザインの分析

能登半島地震関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
後ろ向きコホート研究	5	50.0%
横断研究	4	40.0%
前向きコホート研究	1	10.0%



考察:

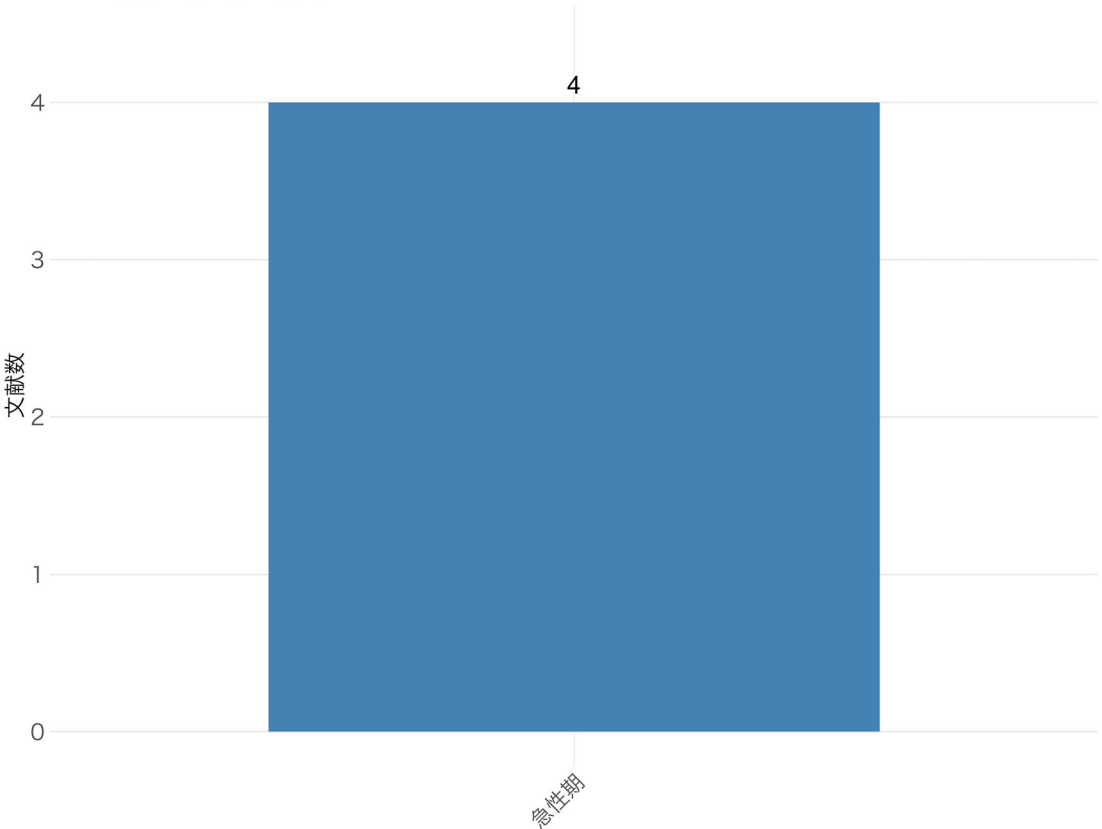
研究デザインの分析から、能登半島地震関連文献では後ろ向きコホート研究（5件、10%）が最も多く用いられている。これに横断研究（4件、40%）が続いている。
研究参加者をフォローアップした前向き研究は限定的である。

6.4 災害フェーズの分類と分析

能登半島地震関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。
横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布		
災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	4	100.0%

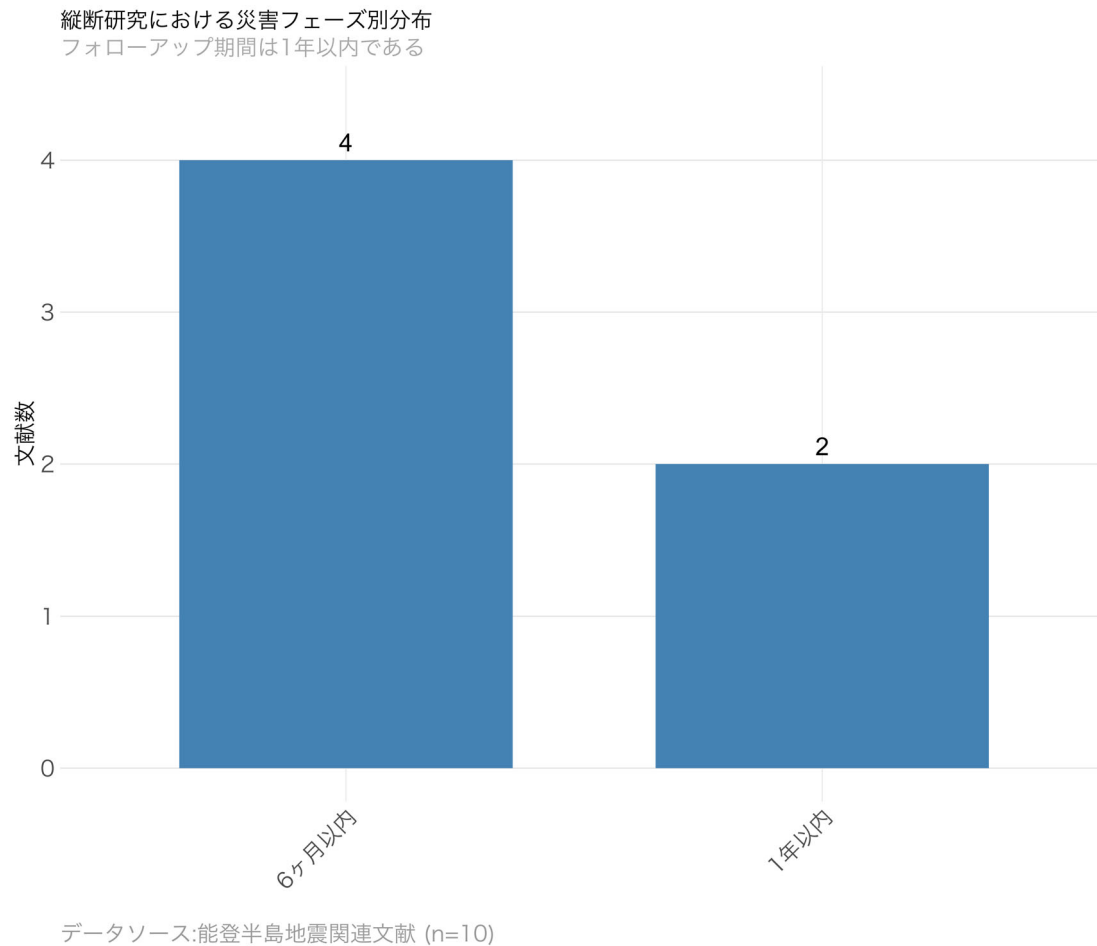
横断研究における災害フェーズ別分布
全ての研究が急性期に行われている



データソース:能登半島地震関連文献 (n=10)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
6ヶ月以内	4	66.7%
1年以内	2	33.3%



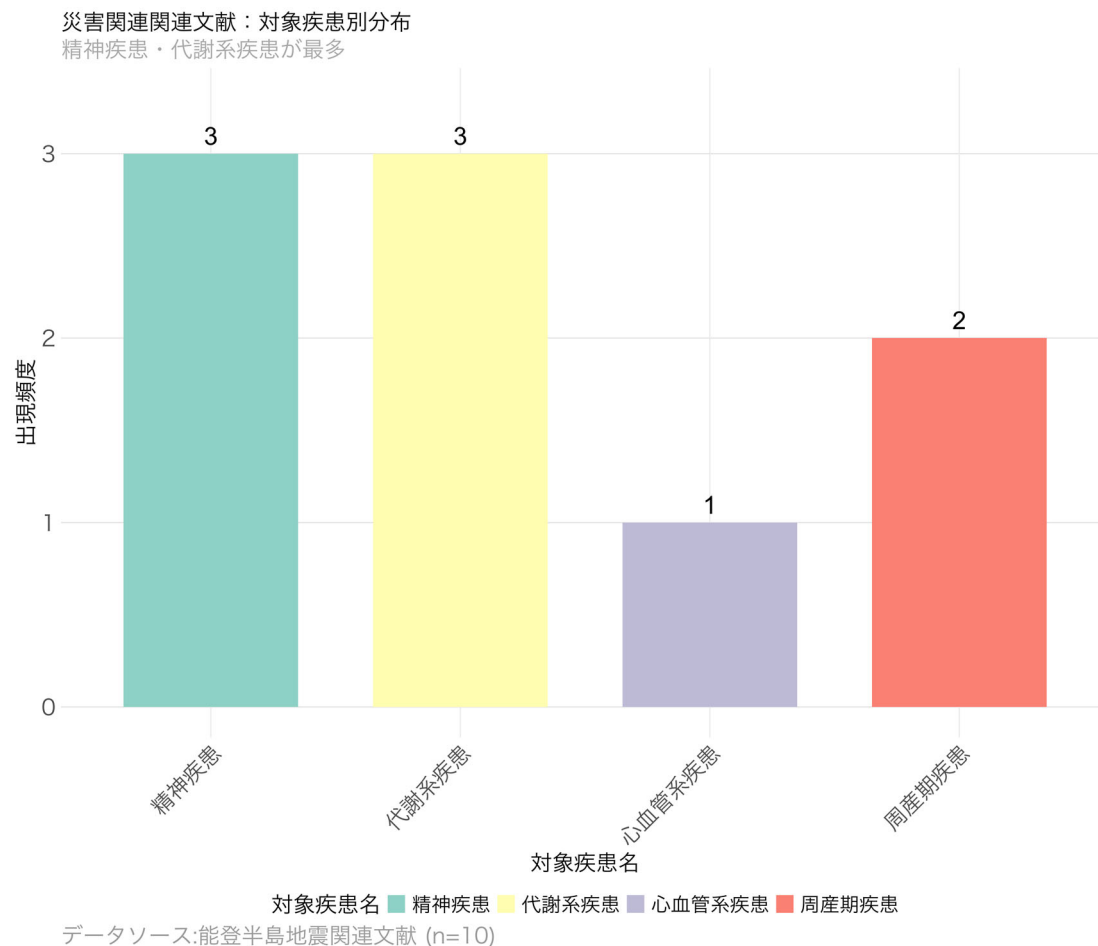
考察:

能登半島地震関連文献において、横断研究は全ての研究が急性期（4件）に実施されている。
縦断研究では1年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、長期間のフォローアップを実施した研究はない。

6.5 対象疾患の分析

能登半島地震関連文の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	3	33.3%
代謝系疾患	3	33.3%
心血管系疾患	1	11.1%
周産期疾患	2	22.2%



考察:

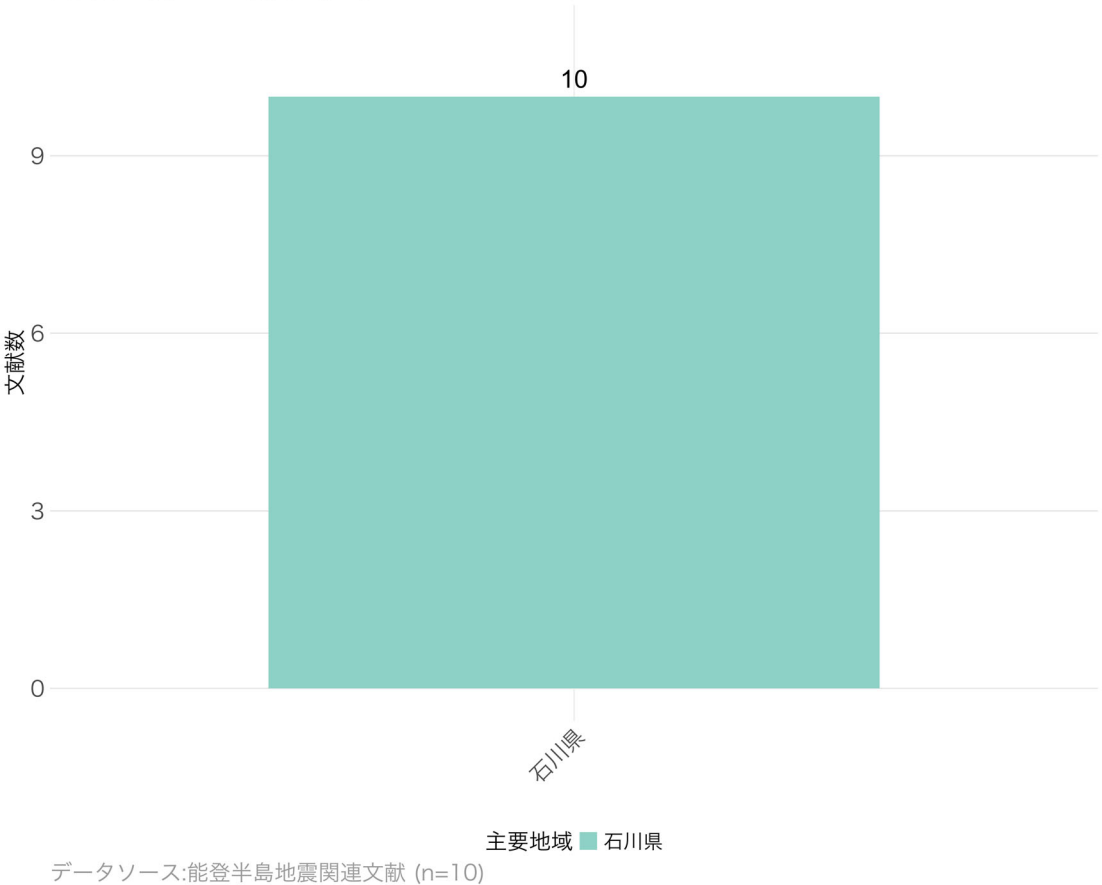
対象疾患別の分析から、能登半島地震関連文献では精神疾患（3件、30%）、代謝系疾患（3件、30%）を対象にした文献が多かった。

6.6 地理的範囲の分析

能登半島地震関連文の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

能登半島地震関連文献：主要地域別分布		
地域区分	文献数	割合(%)
石川県	10	100.0%

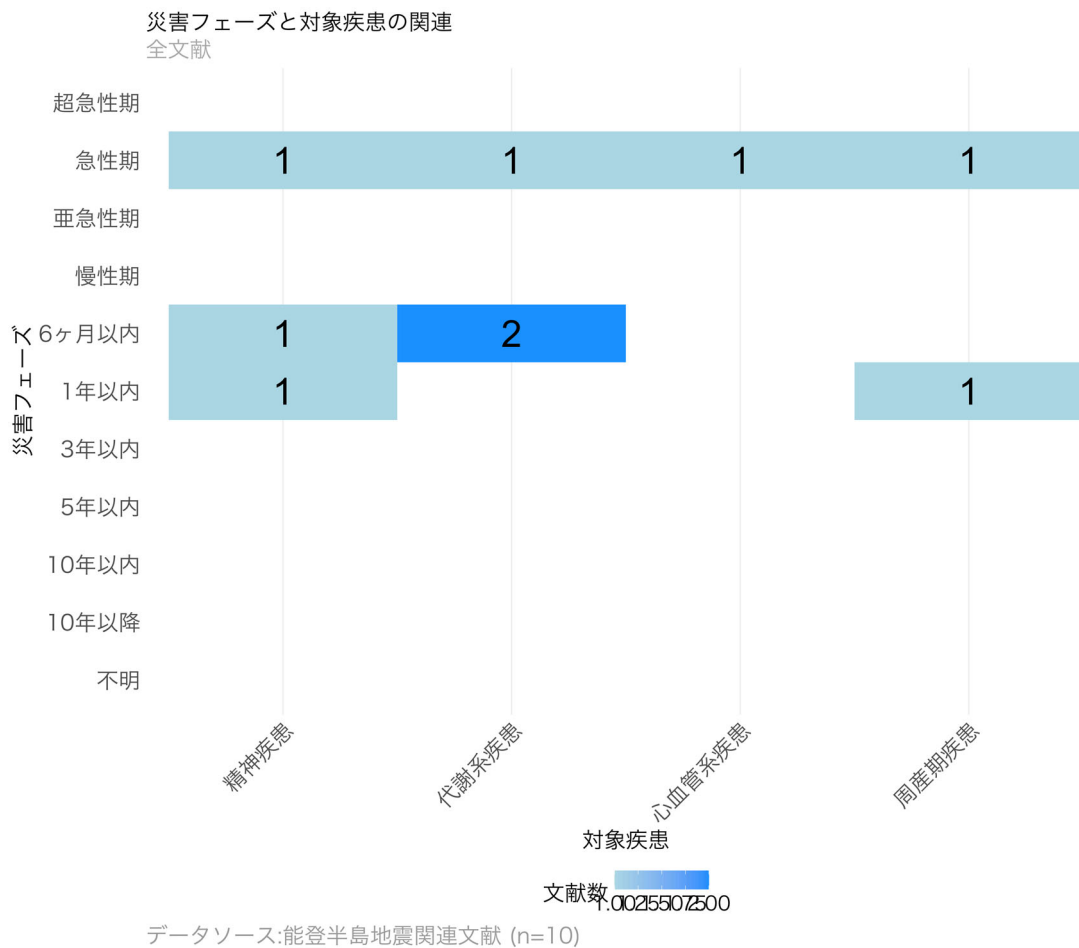
能登半島地震関連文献：主要地域別分布
宮城県を対象とした研究が最も多い



考察:
地理的範囲の分析から、全ての文献において震源地である石川県を対象となっている。

6.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

能登半島地震関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



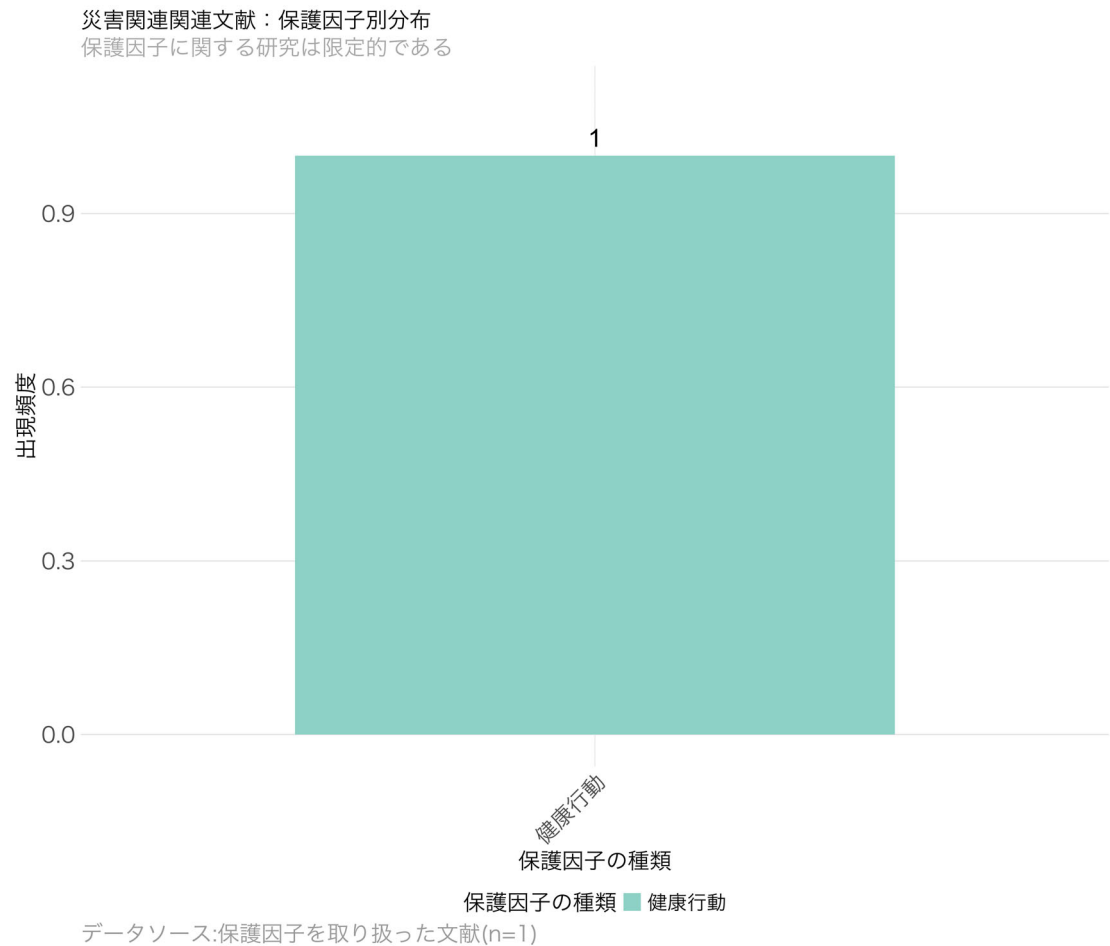
考察:

全ての対象疾患に関してフォローアップ期間が1年以内と短く、特徴的な分布は認められない。

6.8 保護因子の分析

能登半島地震関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	1	100.0%



考察:
保護因子に関する研究は1件であり、能登半島地震関連文献の件の10%と限定的であった。

6.9 能登半島地震文献分析の概要

能登半島地震関連文献の概要は以下の通りである。

能登半島地震関連文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
能登半島地震関連文献数	10件
最も多い出版年	2009年（7件）
主要出版言語	日本語（66件）
最も多い研究デザイン	後ろ向きコホート研究（5件）
最も多い対象疾患	精神疾患（54件）
保護因子に関する文献	1件
最も多い研究対象地域	その他（54件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、能登半島地震関連文献は10件（0.8%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移: 能登半島地震の発災3年以内に全ての文献が出版されており、長期的なフォローアップを実施した研究は報告されていない。

言語分布: 英語（5件、50%）、日本語（5件、50%）でほぼ同数である。

研究デザイン: 後ろ向きコホート研究（5件、50%）が最も多く、横断研究（4件、40%）、前向きコホート研究（1件、10%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究ではすべての研究が急性期に実施されている。縦断研究では1年以内にフォローアップが終了されている研究のみであり、長期間のフォローアップを実施した研究はない。

対象疾患: 精神疾患（3件、30%）と代謝系疾患（3件、30%）が多かった。

保護因子: 保護因子に関する研究は1件のみであり、能登半島地震関連文献（10件）の10%を占めていた。

地理的範囲: 全ての研究が石川県で実施されている。

7. 東日本大震災に関する文献の分析

次に、東日本大震災に焦点を当てて詳細な検討を行う。東日本大震災関連の文献は計612件あり、全体の47.6%を占めている。

7.1 出版年別の推移

東日本大震災関連文献の出版年別の分布を確認する。

東日本大震災関連文献の出版年推移 (2011-2024)
2016年をピークとし、徐々に減少傾向



データソース:東日本大震災関連文献 (n=612)

考察:

東日本大震災関連文献の出版年推移を見ると、災害発生直後の2011年は文献数が少なく、その後徐々に増加していることがわかる。特に2016年と2021年に二峰性のピークを迎え、その後緩やかな減少傾向を示している。これは、研究の実施から出版までのタイムラグや、長期的な影響調査の結果が報告されるまでの期間を反映していると考えられる。2021年頃に認めるピークは、災害発生から約10年経過した時点での長期的影響の評価研究が増えたことを示唆している。

7.2 言語別の分析

東日本大震災関連文献の言語別の分布を確認する。

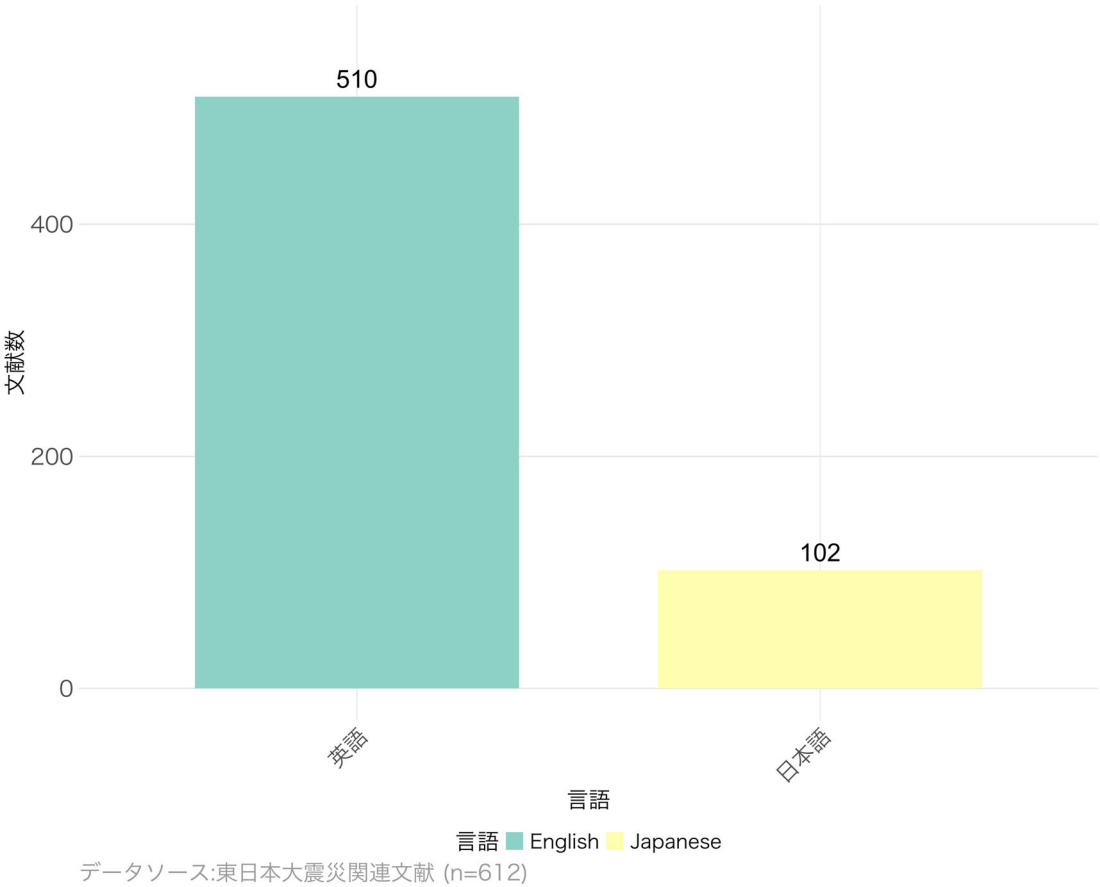
出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
-------	-----	-------

日本語	102	16.7%
-----	-----	-------

英語	510	83.3%
----	-----	-------

東日本大震災関連文献：言語別分布

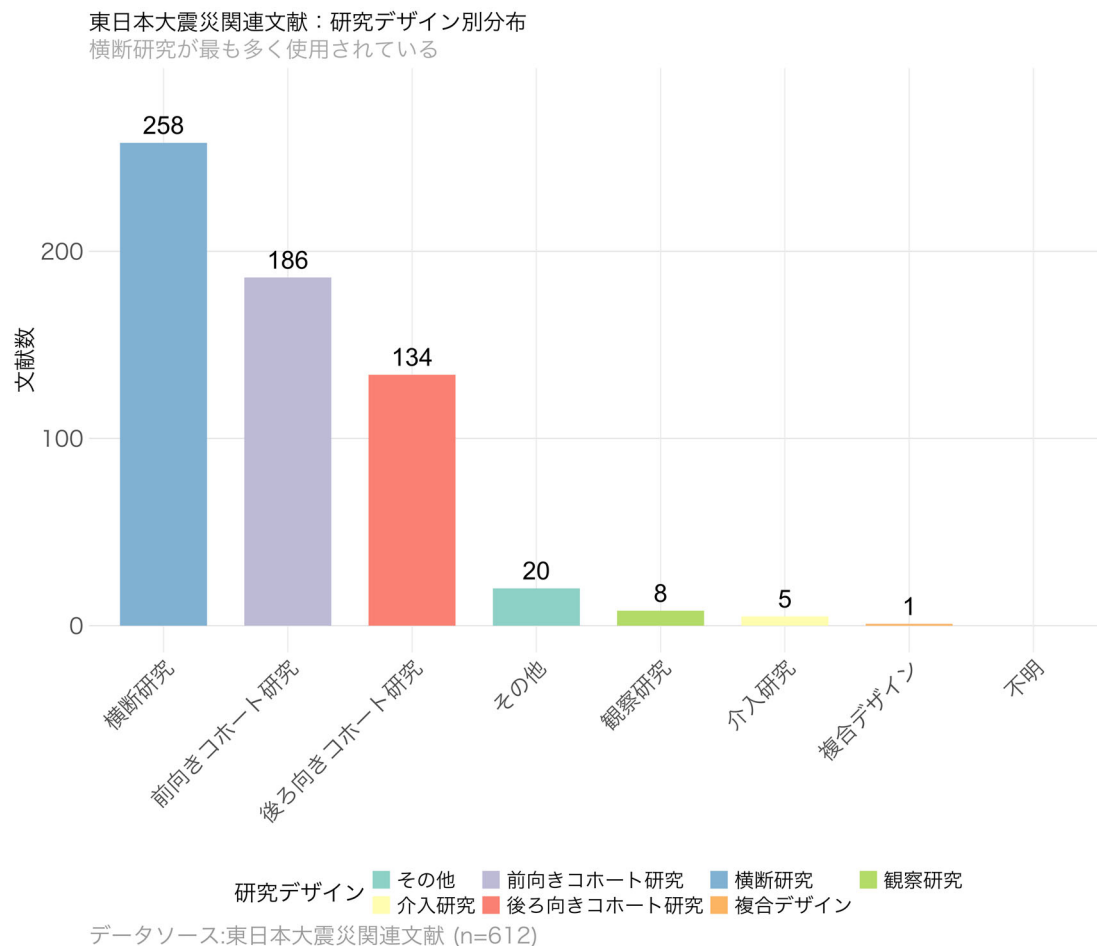


考察:
言語別の分析から、東日本大震災関連文献の出版言語は英語（510件、83.3%）が最も多く、次いで日本語（102件、16.7%）の順となっている。

7.3 研究デザインの分析

東日本大震災関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	258	42.2%
前向きコホート研究	186	30.4%
後ろ向きコホート研究	134	21.9%
その他	20	3.3%
観察研究	8	1.3%
介入研究	5	0.8%
複合デザイン	1	0.2%



考察:

研究デザインの分析から、東日本大震災関連研究では横断研究が最も多く用いられており（258件、42.2%）、次いで前向きコホート研究（186件、30.4%）、後ろ向きコホート研究（134件、21.9%）が続いている。これは災害研究の方法論的特徴を反映しており、災害発生後のある時点での状況把握（横断研究）と、被災者や被災地の経時的变化を追跡する研究（コホート研究）が主流であることを示している。介入研究やその他のデザインは比較的少数にとどまっている。

7.4 災害フェーズの分類と分析

東日本大震災関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

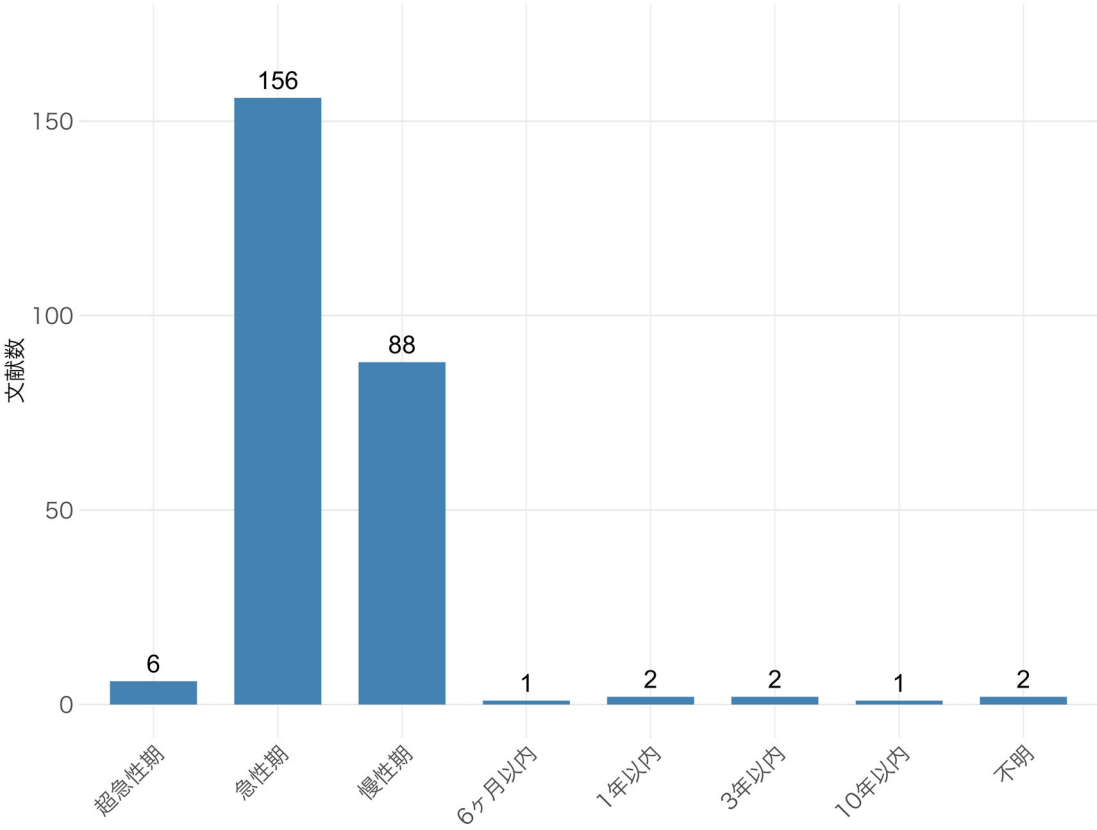
横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布		
災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	6	2.3%
急性期	156	60.5%
慢性期	88	34.1%
6ヶ月以内	1	0.4%
1年以内	2	0.8%
3年以内	2	0.8%

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
10年以内	1	0.4%
不明	2	0.8%

横断研究における災害フェーズ別分布
慢性期(発災3ヶ月以内)にほぼ全ての研究が実施されている



データソース:東日本大震災関連文献 (n=612)

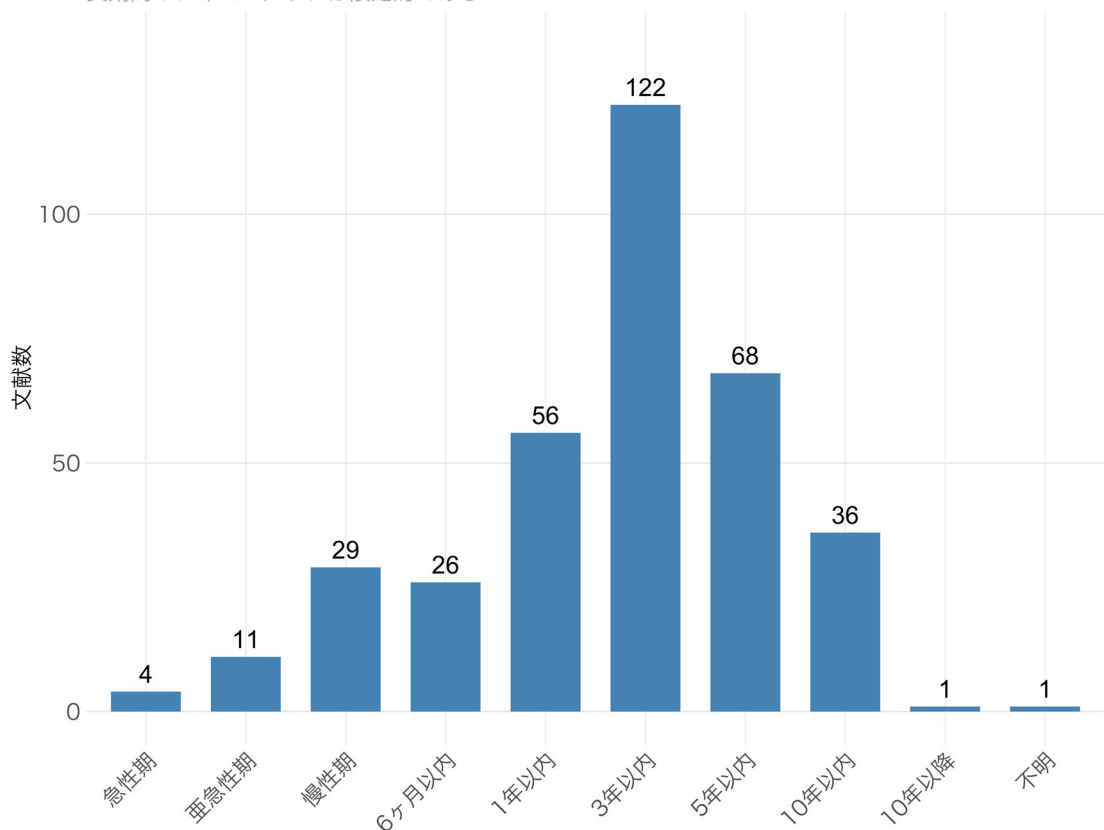
縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	4	1.1%
亜急性期	11	3.1%
慢性期	29	8.2%
6ヶ月以内	26	7.3%
1年以内	56	15.8%
3年以内	122	34.5%
5年以内	68	19.2%
10年以内	36	10.2%

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
10年以降	1	0.3%
不明	1	0.3%

縦断研究における災害フェーズ別分布
長期間のフォローアップは限定的である



データソース:東日本大震災関連文献 (n=612)

考察:

横断研究では急性期（156件）が最多数であり、慢性期（88件）までに行われたものを合わせて大部分を占めている。

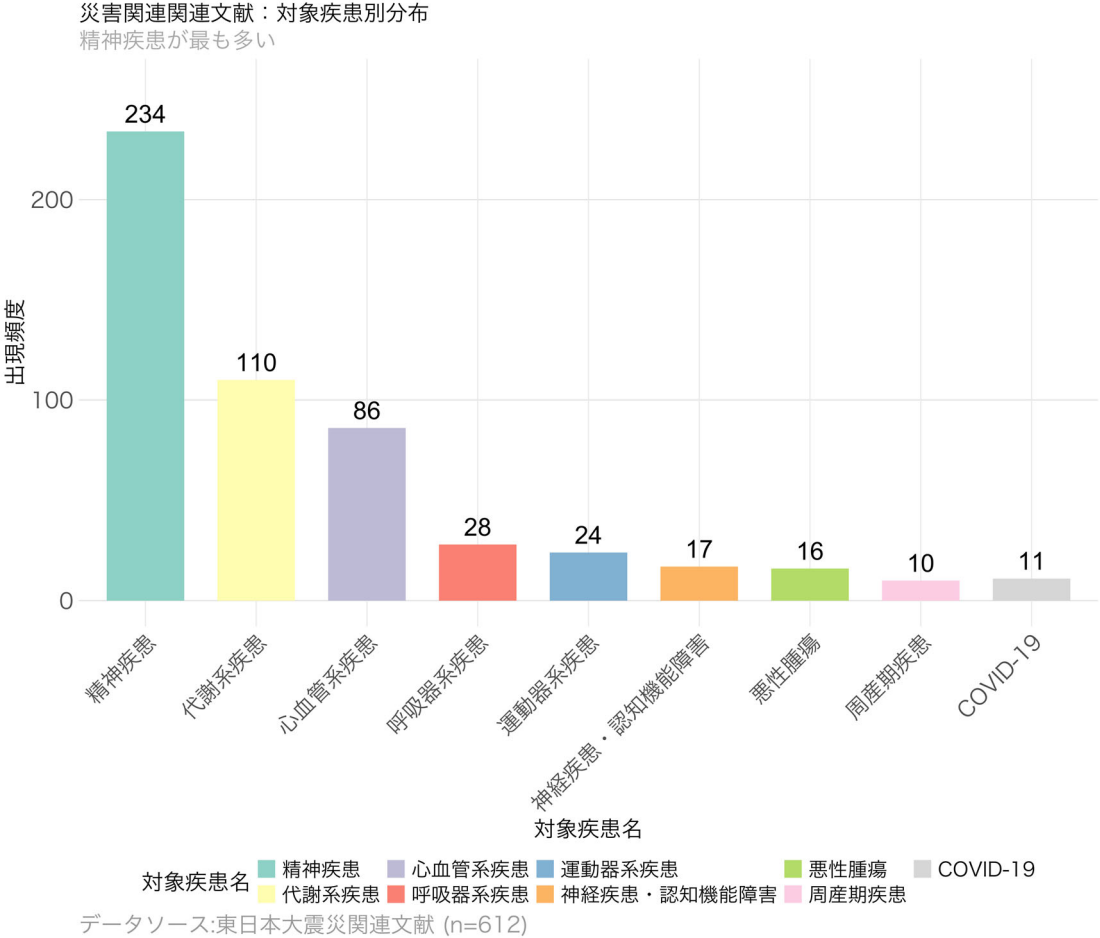
縦断研究では3年以内にフォローアップが終了されている研究が多数を占めており、10年以上の長期間のフォローアップを実施した研究は限定的である。

7.5 対象疾患の分析

東日本大震災関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	234	43.7%
代謝系疾患	110	20.5%
心血管系疾患	86	16.0%

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
呼吸器系疾患	28	5.2%
運動器系疾患	24	4.5%
神経疾患・認知機能障害	17	3.2%
悪性腫瘍	16	3.0%
周産期疾患	10	1.9%
COVID-19	11	2.1%



考察:

対象疾患の分析結果から、精神疾患を対象にした研究が最も多く占めている（234件、38.2%）。これは災害後のメンタルヘルス問題の重要性を反映している。次いで、糖尿病や甲状腺関連疾患などの代謝系疾患（110件、18%）、高血圧や深部静脈血栓症などの循環器系疾患（86件、14.1%）に関する研究が続いている。

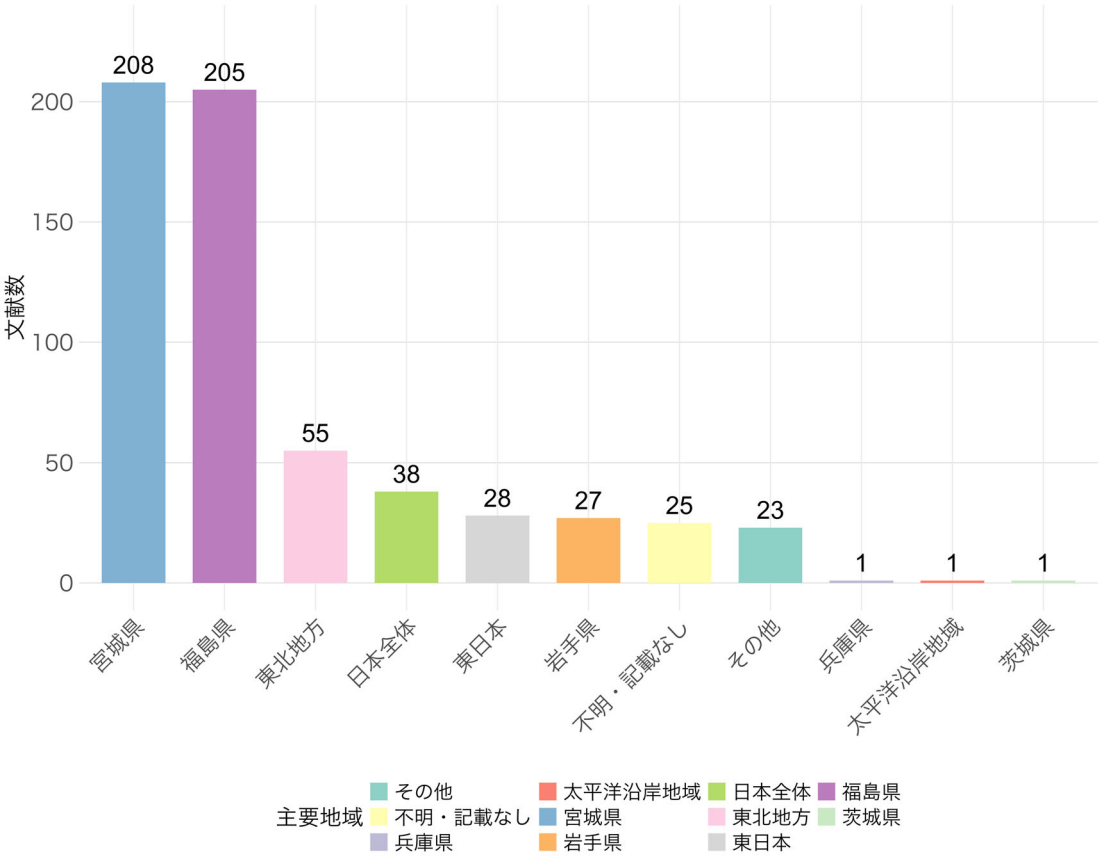
7.6 地理的範囲の分析

東日本大震災関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

東日本大震災関連文献：地理的範囲の分布

地域	文献数	割合(%)
宮城県	208	34.0%
福島県	205	33.5%
東北地方	55	9.0%
日本全体	38	6.2%
東日本	28	4.6%
岩手県	27	4.4%
その他	23	3.8%
兵庫県	1	0.2%
太平洋沿岸地域	1	0.2%
茨城県	1	0.2%
不明・記載なし	25	4.1%

東日本大震災関連文献：主要地域別分布
宮城県・福島県を対象とした研究が最も多い

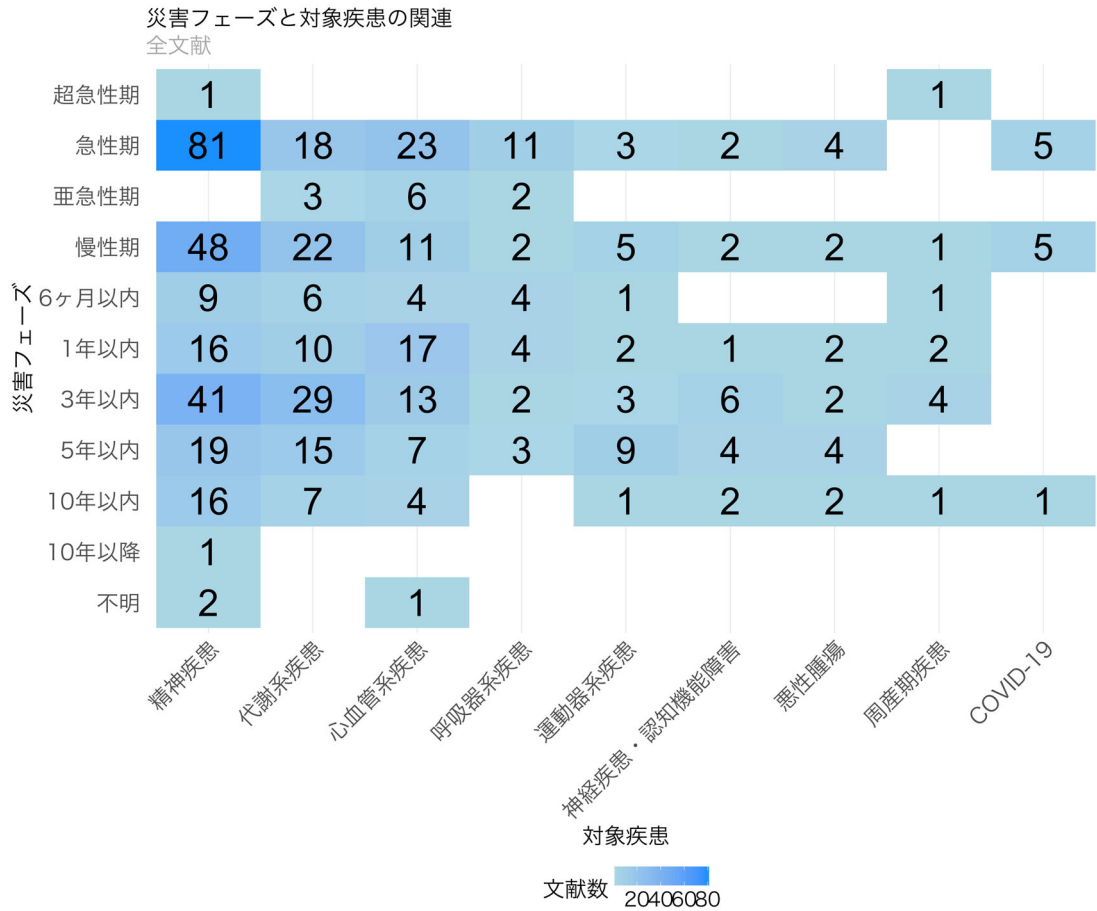


データソース:東日本大震災関連文献 (n=612)

考察:
地理的範囲の分析から、宮城県（208件、34%）と福島県（205件、33.5%）を対象にした文献が主である。東北地方の複数県、日本全体を対象とした広域研究も一定数ある。

7.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

東日本大震災関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



考察:
発災早期の時点では精神疾患を対象にした研究が多いが、遠隔期に移行するにつれて減少傾向を認める。代謝系疾患や心血管系疾患に関しては中長期的なフォローアップを実施した研究が複数報告されており、運動器系疾患も比較的長期的にフォローアップがされている。これは、災害による直接的な影響のみならず、長期化する避難生活や、仮設住宅等への移住による生活環境の変化による影響の重要性を反映している。

7.8 保護因子の分析

東日本大震災関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	28	36.4%
社会的支援	37	48.1%
医療サービス	1	1.3%

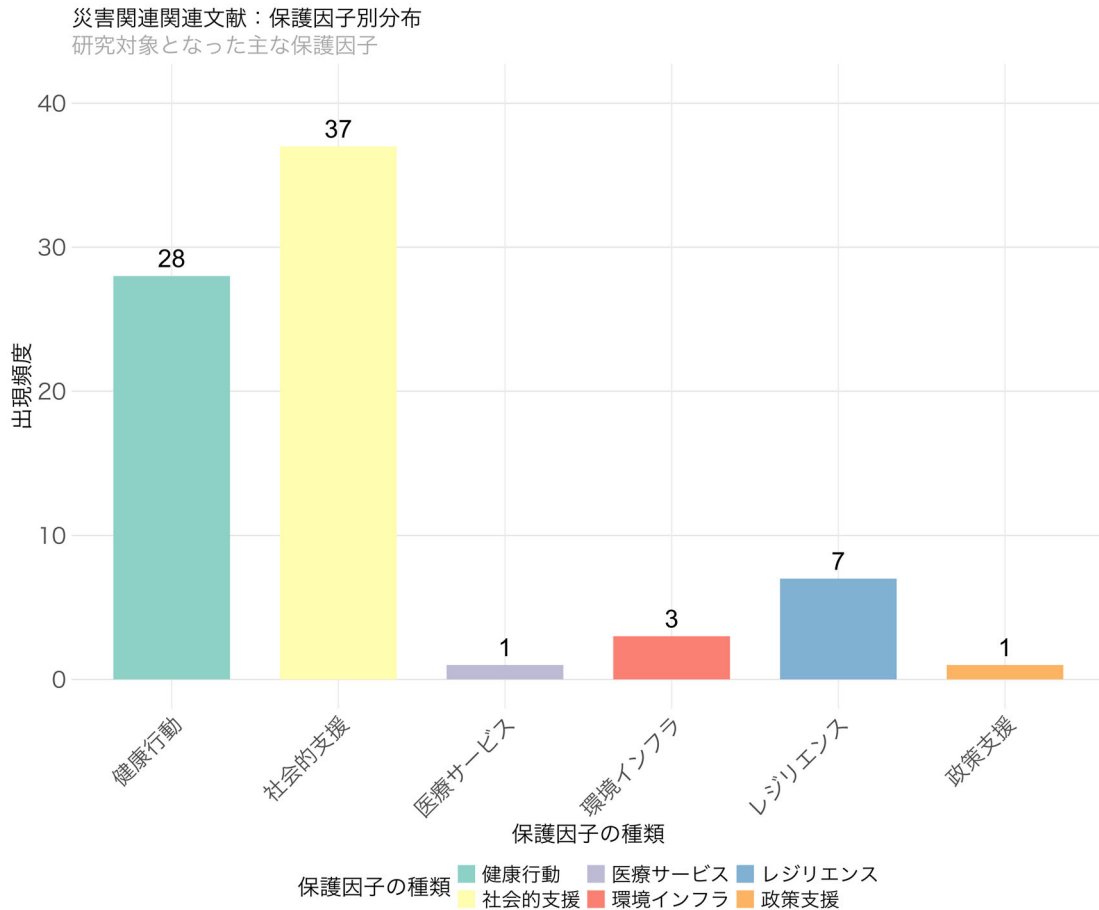
保護因子の出現頻度

保護因子の種類 出現頻度 割合(%)

環境インフラ 3 3.9%

レジリエンス 7 9.1%

政策支援 1 1.3%



データソース:保護因子を取り扱った文献(n=77)

考察:

保護因子に関する研究は77件であり、東日本大震災関連文献（612件）の12.6%を占めていた。社会的支援について調査した研究が最も多く、健康行動に関する研究が続いていた。

7.9 東日本大震災文献分析の概要

東日本大震災関連文献の概要は以下の通りである。

東日本大震災文献分析の概要

分析項目 結果

総文献数 1287件

東日本大震災関連文献数 612件

最も多い出版年 2021年（71件）

東日本大震災文献分析の概要

分析項目	結果
主要出版言語	英語（510件）
最も多い研究デザイン	横断研究（258件）
最も多い対象疾患	精神疾患（234件）
保護因子に関する文献	77件
最も多い研究対象地域	宮城県（234件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、東日本大震災関連文献は612件（47.6%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移：文献数は2011年から徐々に増加し、2016年と2020年頃に二峰性のピークがあり、長期的影響評価研究の増加を示唆している。

言語分布：英語（510件、83.3%）、日本語（102件、16.7%）であり英語文献が多い。

研究デザイン：横断研究（258件、42.2%）が最も多く、前向きコホート研究（186件、30.4%）と後ろ向きコホート研究（134件、21.9%）が続く。

災害フェーズ：横断研究では急性期～慢性期に行われたものが大部分を占めている。縦断研究では3年以内にフォローアップが終了されている研究が多数であり、10年以上のフォローアップを実施した研究は限定的である。

対象疾患：精神疾患（234件、38.2%）が多く、次いで代謝系疾患（110件、18%）、心血管系疾患（86件、14.1%）に関する研究が続く。

保護因子：保護因子に関する研究は77件であり、東日本大震災関連文献（612件）の12.6%を占めていた。社会的支援について調査した研究（86件、12.6%）が最も多く、健康行動に関する研究（81件、13.2%）が続く。

地理的範囲：宮城県（208件、34%）と福島県（205件、33.5%）が主な研究範囲である。

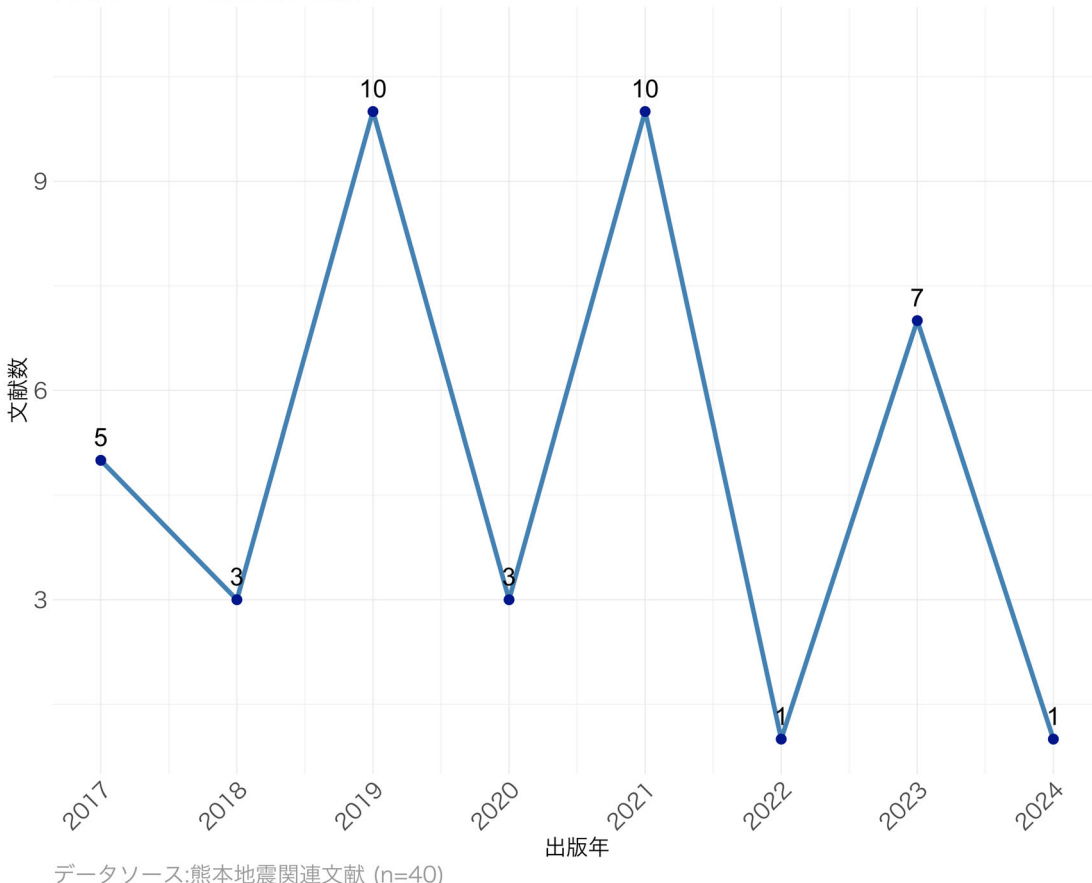
8. 熊本地震に関する文献の分析

次に、熊本地震に焦点を当てて詳細な検討を行う。熊本地震関連の文献は計40件あり、全体の3.1%を占めている。

8.1 出版年別の推移

熊本地震関連文献の出版年別の分布を確認する。

熊本地震関連文献の出版年推移 (2016-2024)
長期間にわたる研究出版の特徴



考察:

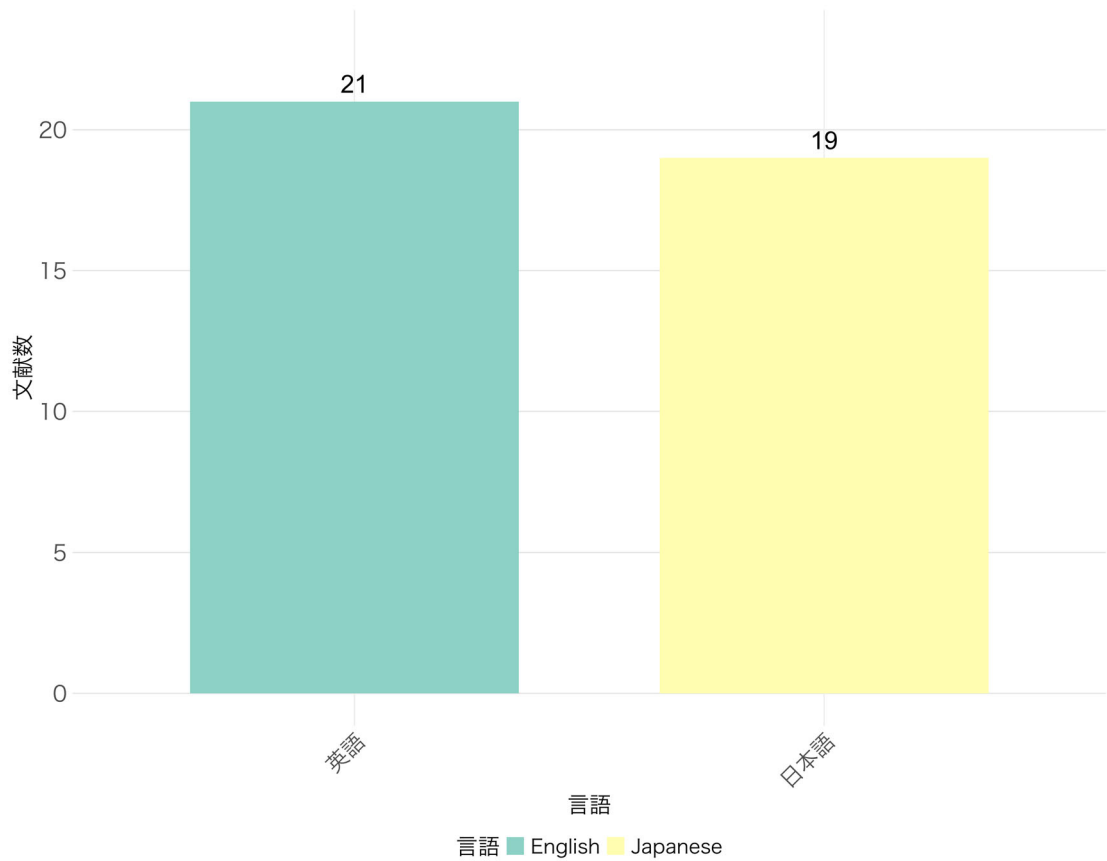
発災翌年の2017年から文献が増えており、特定のピークは認められない。

8.2 言語別の分析

熊本地震関連文献の言語別の分布を確認する。

出版言語別の分布		
出版言語別	文献数	割合(%)
日本語	19	47.5%
英語	21	52.5%

熊本地震関連文献：言語別分布



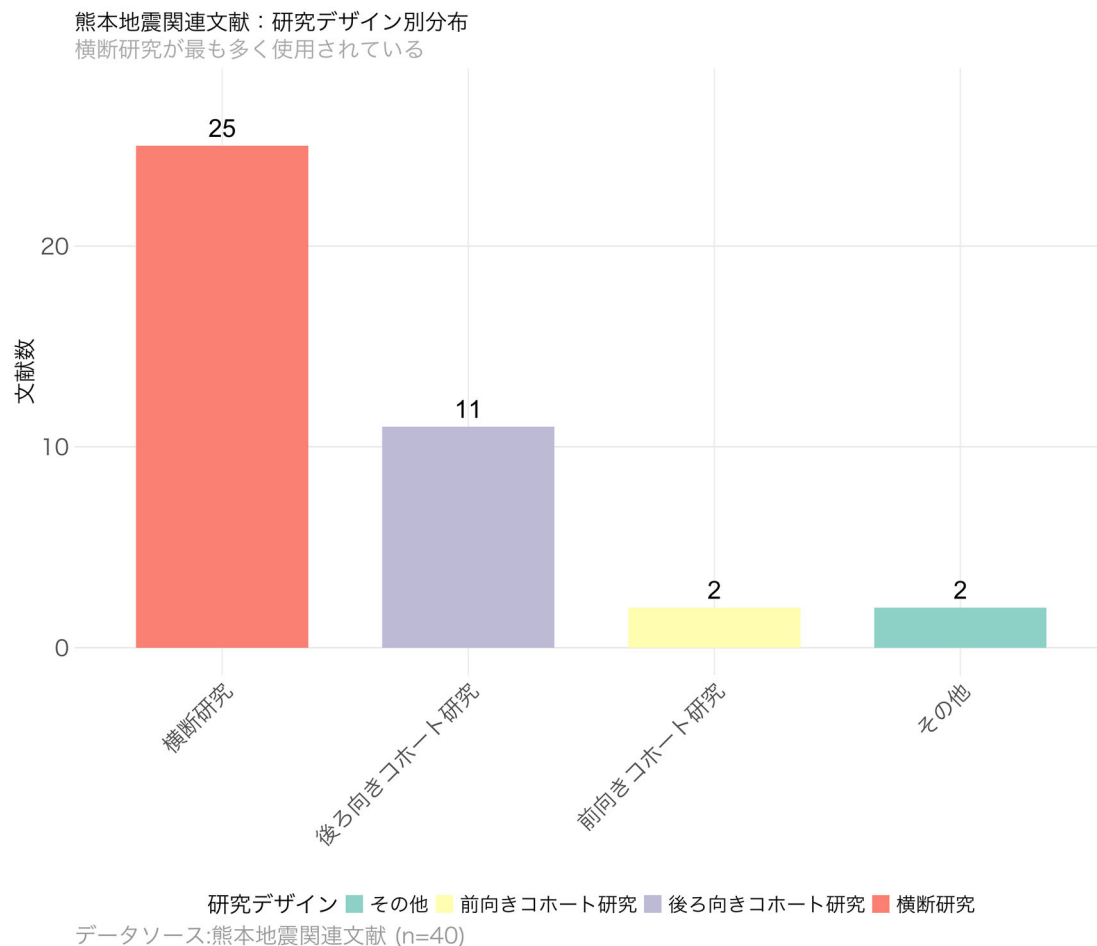
データソース:熊本地震関連文献 (n=40)

考察:
言語別の分析から、熊本地震関連文献の出版言語は英語（21件、52.5%）と日本語（19件、47.5%）がほぼ同数である。

8.3 研究デザインの分析

熊本地震関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	25	62.5%
後ろ向きコホート研究	11	27.5%
前向きコホート研究	2	5.0%
その他	2	5.0%



考察:

研究デザインの分析から、熊本地震関連文献では横断研究が最も多く用いられており（25件、62.5%）、次いで後ろ向きコホート研究（11件、27.5%）、前向きコホート研究（2件、5%）、が続いている。

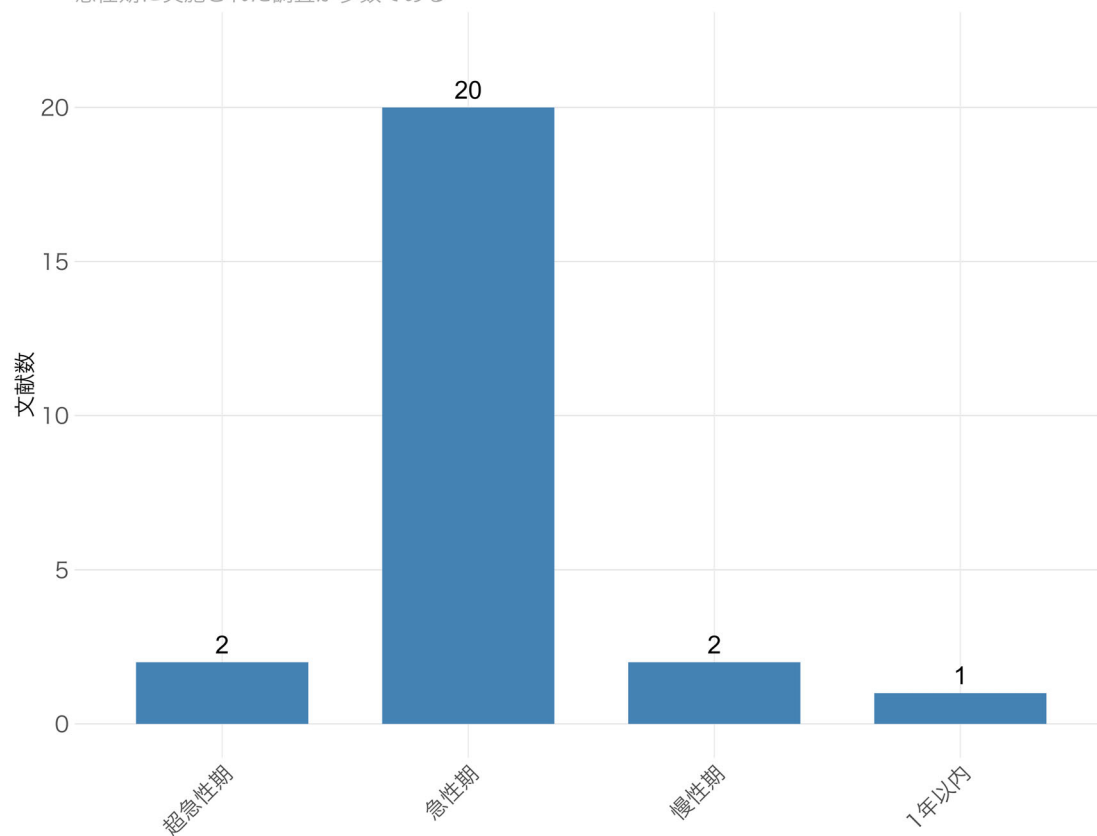
8.4 災害フェーズの分類と分析

熊本地震関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布		
災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	2	8.0%
急性期	20	80.0%
慢性期	2	8.0%
1年以内	1	4.0%

横断研究における災害フェーズ別分布
急性期に実施された調査が多数である

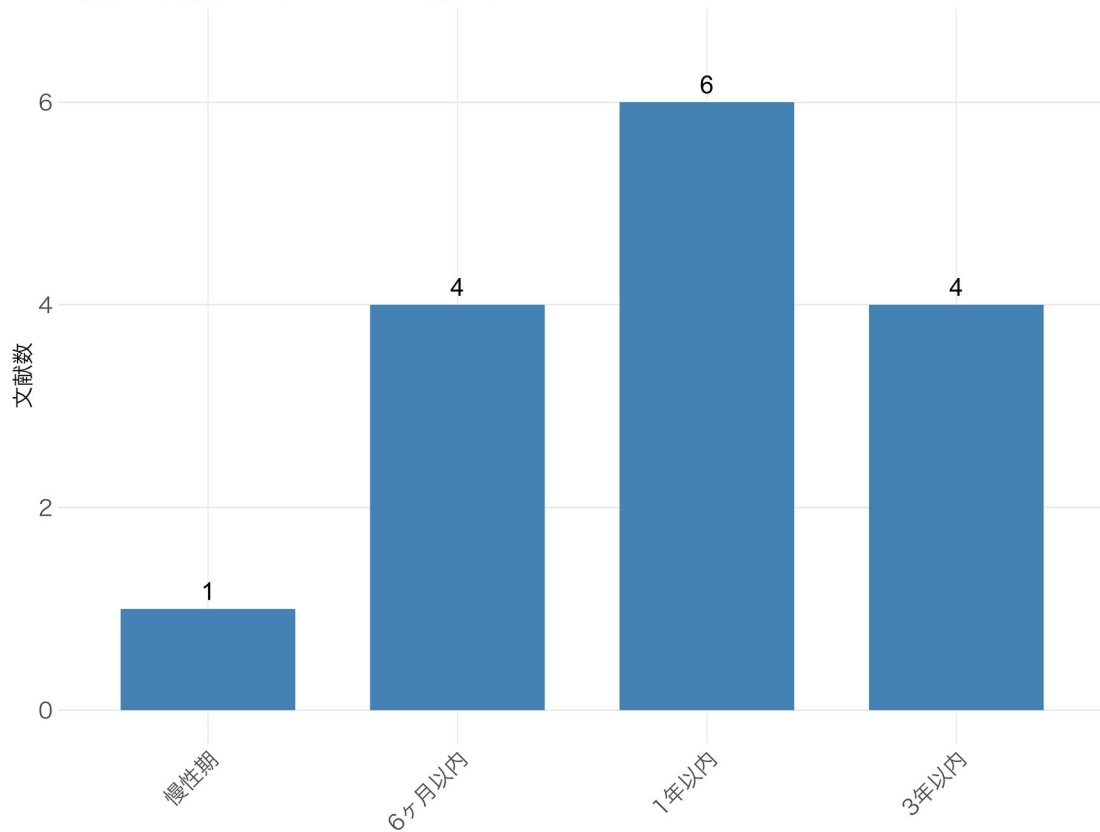


データソース:熊本地震関連文献 (n=40)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
慢性期	1	6.7%
6ヶ月以内	4	26.7%
1年以内	6	40.0%
3年以内	4	26.7%

縦断研究における災害フェーズ別分布
3年以上の長期的なフォローアップは実施されていない



データソース:熊本地震関連文献 (n=40)

考察:

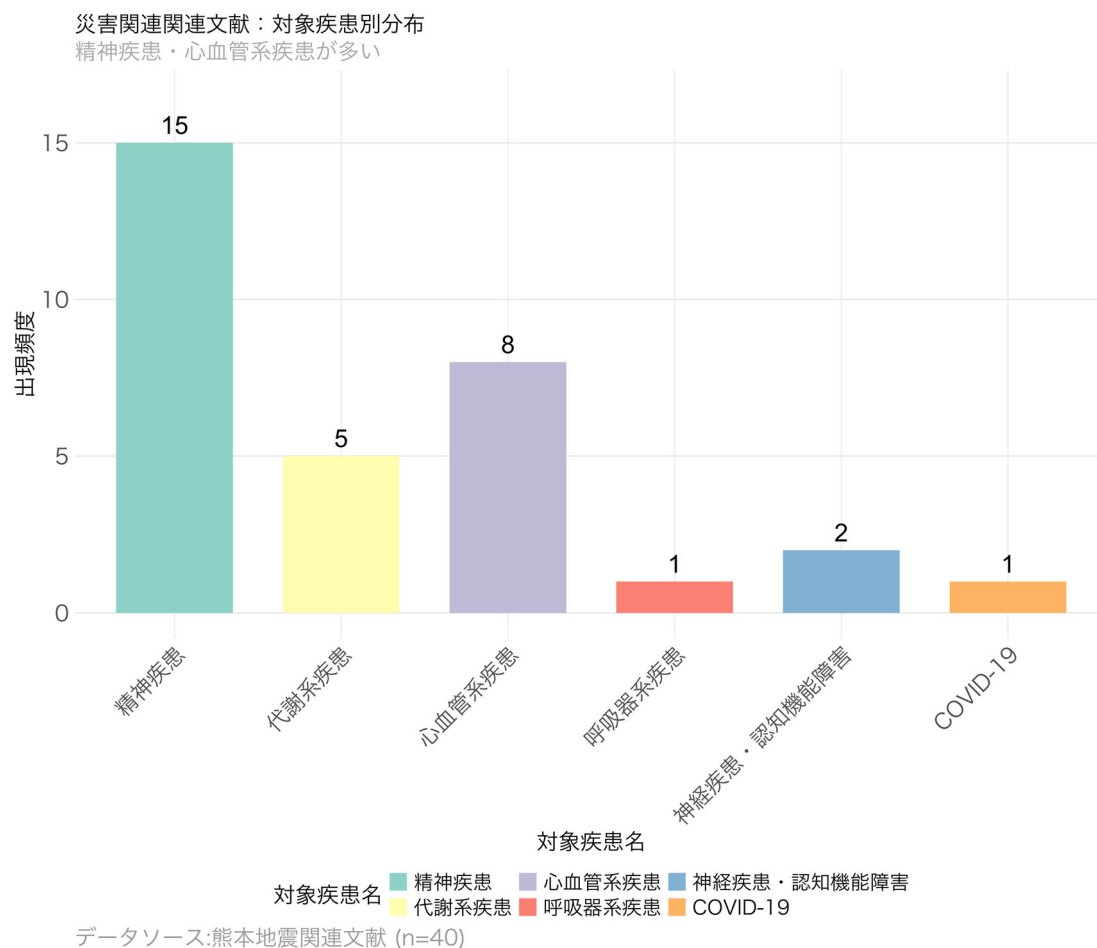
横断研究では急性期（20件）が最多数であり、急性期までに行われたものを合わせて大部分を占めている。

縦断研究では1年以内にフォローアップが終了されている研究が多数を占めており、1年以上の長期間のフォローアップを実施した研究は限定的である。

8.5 対象疾患の分析

熊本地震関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	15	46.9%
代謝系疾患	5	15.6%
心血管系疾患	8	25.0%
呼吸器系疾患	1	3.1%
神経疾患・認知機能障害	2	6.2%
COVID-19	1	3.1%



考察:

対象疾患の分析結果から、精神疾患を対象にした研究が最も多く占めている（15件、37.5%）。これは災害後のメンタルヘルス問題の重要性を反映している。高血圧や深部静脈血栓症などの循環器系疾患（8件、20%）、次いで、糖尿病や甲状腺関連疾患などの代謝系疾患（5件、12.5%）に関する研究が続いている。これは熊本地震で特に多かった車中泊とそれに関連した心血管系疾患が重要視されていたことを反映していると考えられる。

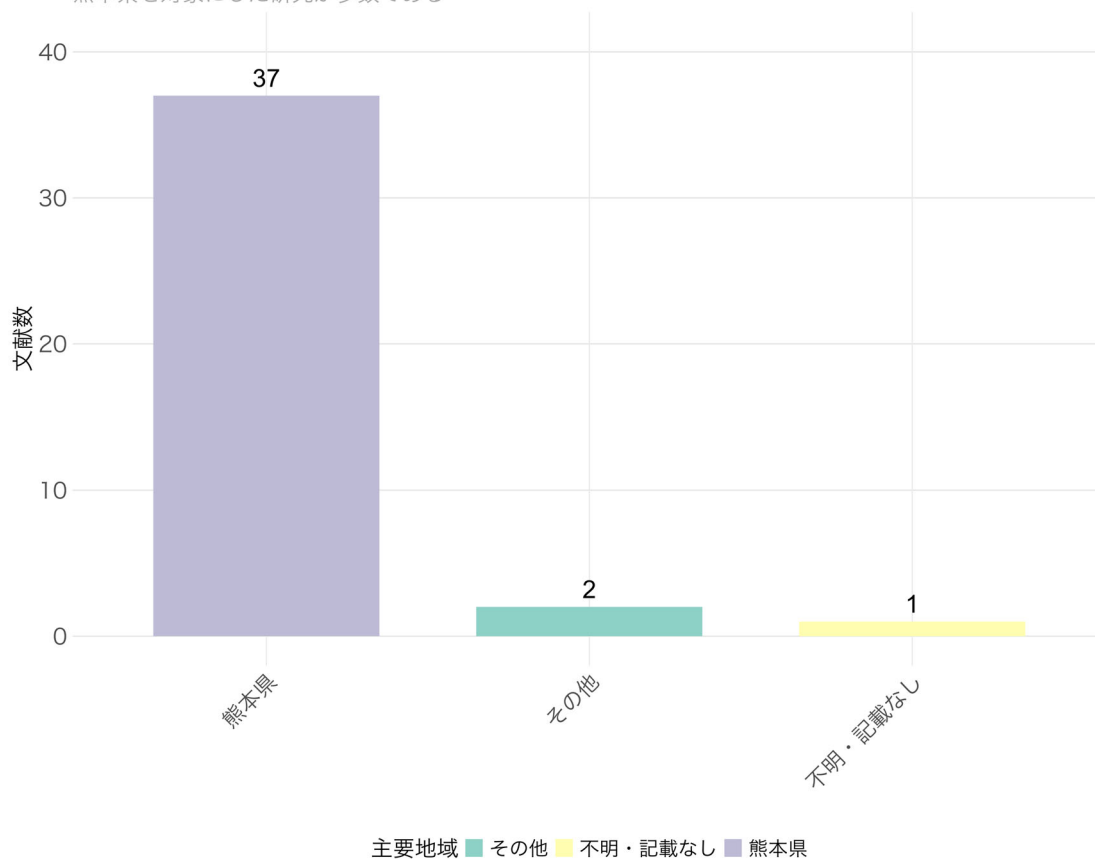
8.6 地理的範囲の分析

熊本地震関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

熊本地震関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
熊本県	37	92.5%
その他	2	5.0%
不明・記載なし	1	2.5%

熊本地震関連文献：主要地域別分布
熊本県を対象にした研究が多数である



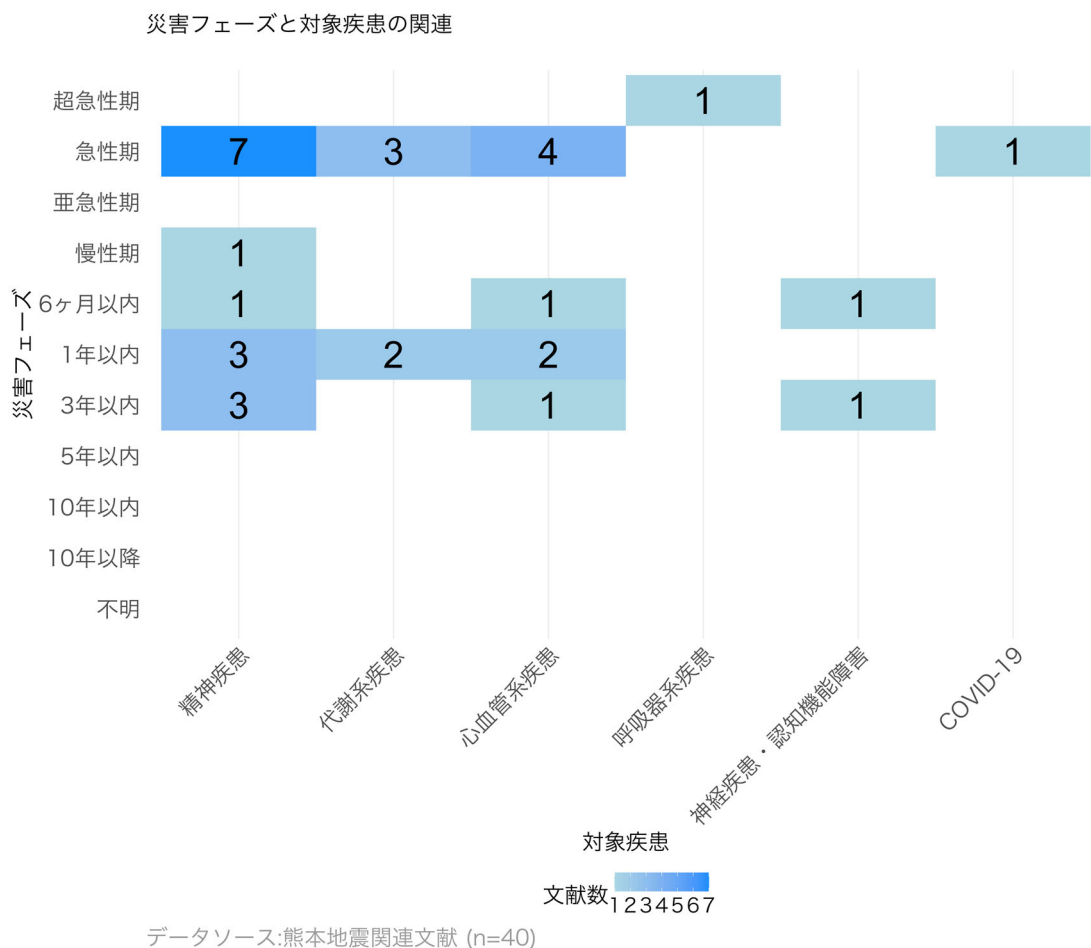
データソース:熊本地震関連文献 (n=40)

考察:

地理的範囲の分析から、熊本県（37件、92.5%）を対象にした文献が主である。

8.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

熊本地震関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



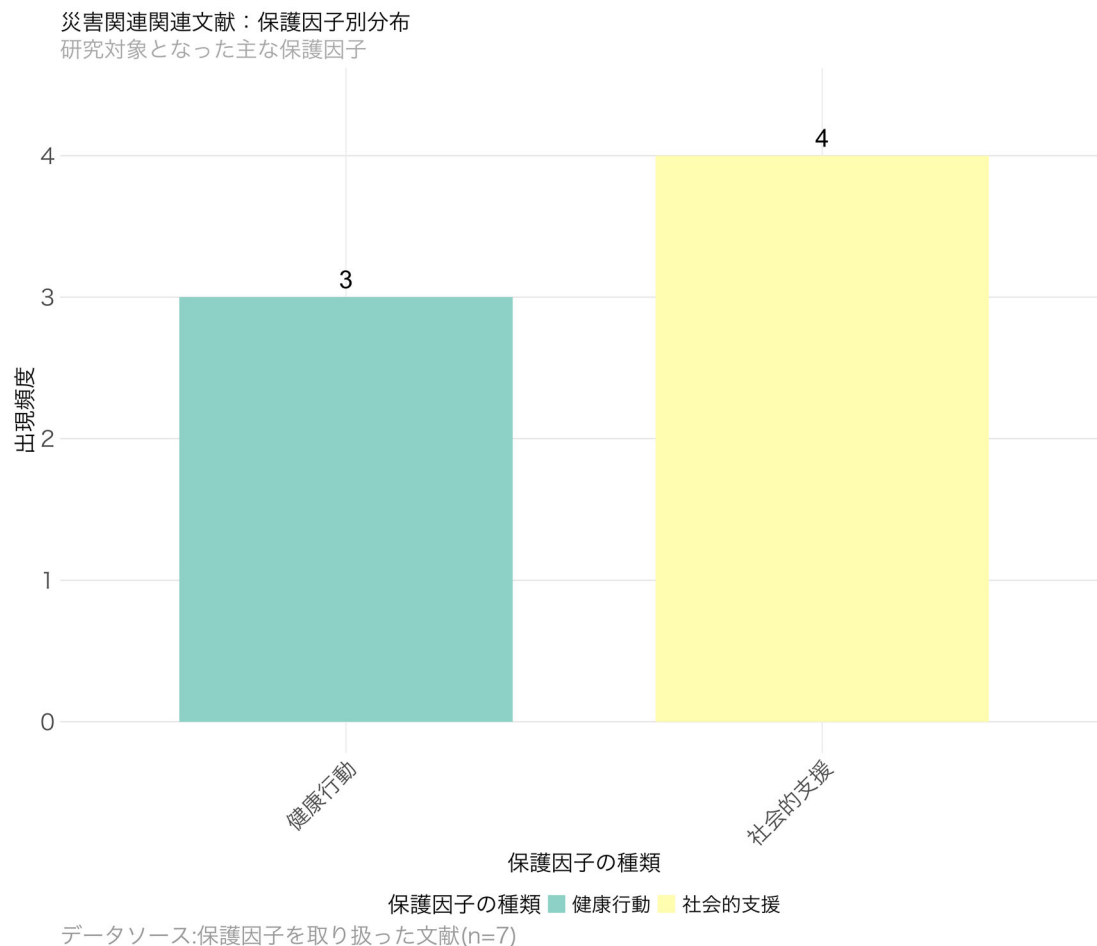
考察:

急性期から遠隔期にかけて、精神疾患・心血管系疾患・代謝系疾患の研究が実施されている。発災から時間が経過するにつれて文献数が減少しており、長期的なフォローアップが行われた研究に乏しい。

8.8 保護因子の分析

熊本地震関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	3	42.9%
社会的支援	4	57.1%



考察:

保護因子に関する研究は7件であり、熊本地震関連文献（40件）の17.5%を占めていた。社会的支援について調査した研究（86件、17.5%）が最も多く、健康行動に関する研究が続いていた（81件、202.5%）。

8.9 熊本地震文献分析の概要

熊本地震関連文献の概要は以下の通りである。

熊本地震関連文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
阪神・淡路大震災関連文献数	40件
最も多い出版年	2019年（10件）
主要出版言語	英語（21件）
最も多い研究デザイン	横断研究（25件）
最も多い対象疾患	精神疾患（15件）
保護因子に関する文献	7件
最も多い研究対象地域	熊本県（15件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、熊本地震関連文献は40件（3.1%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移: 発災翌年の2017年から文献が増えており、特定のピークは認められない。

言語分布: 英語（21件、52.5%）、日本語（19件、47.5%）でほぼ同数である。

研究デザイン: 横断研究（25件、62.5%）が最も多く、後ろ向きコホート研究（11件、27.5%）と前向きコホート研究（2件、5%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究では急性期までに行われたものが大部分を占めている。縦断研究では1年以内にフォローアップが終了されている研究が多数であり、1年以上のフォローアップを実施した研究は限定的である。

対象疾患: 精神疾患（15件、37.5%）が多く、次いで心血管系疾患（8件、20%）、代謝系疾患（5件、12.5%）に関する研究が続く。

保護因子: 保護因子に関する研究は7件であり、熊本地震関連文献（40件）の17.5%を占めていた。

地理的範囲: 熊本県（37件、92.5%）が主な研究範囲である。

9. COVID-19感染症に関する文献の分析

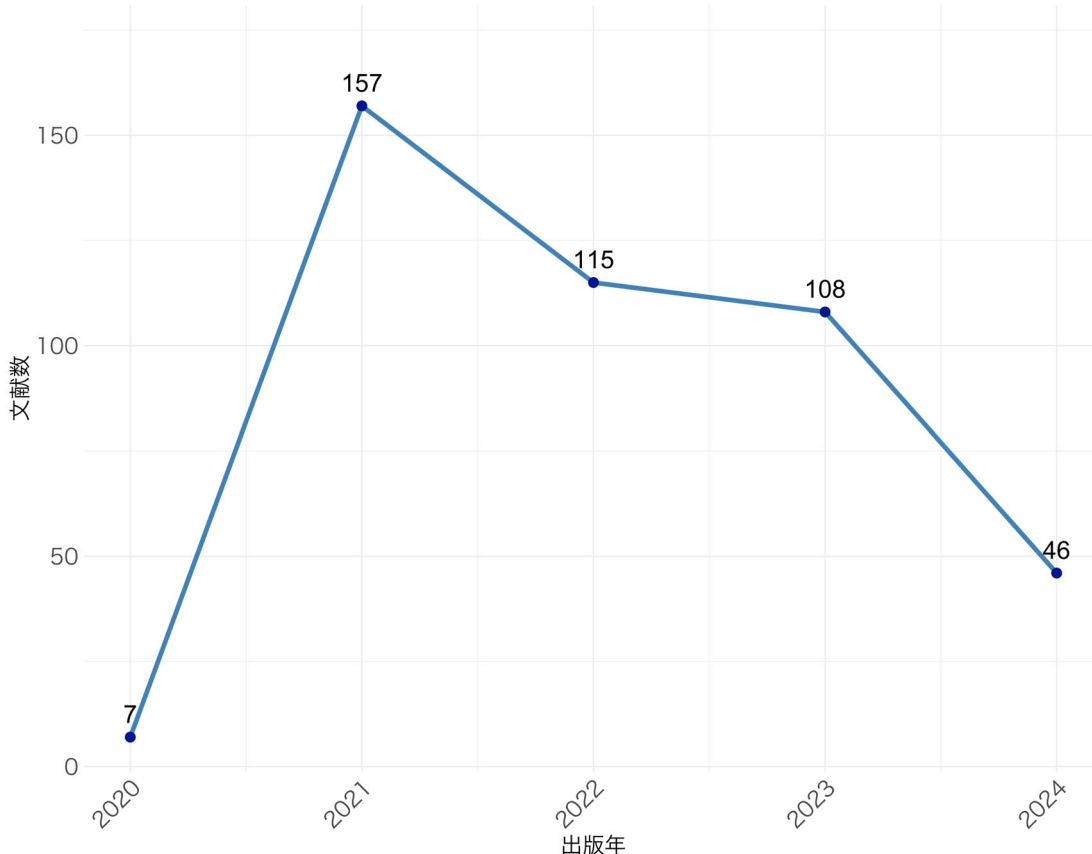
次に、COVID-19感染症に焦点を当てて詳細な検討を行う。COVID-19関連の文献は計438件あり、全体の34%を占めている。

9.1 出版年別の推移

COVID-19感染症関連文献の出版年別の分布を確認する。

COVID-19関連文献の出版年推移 (2020-2024)

2021年にピークを迎え、その後減少傾向



データソース:COVID-19関連文献 (n=438)

考察:

COVID-19関連文献の出版年推移を見ると、パンデミック発生直後の2020年（8件）から研究が始まり、2021年（162件）に急増しピークを迎え、その後緩やかに減少傾向にあることがわかる。

9.2 言語別の分析

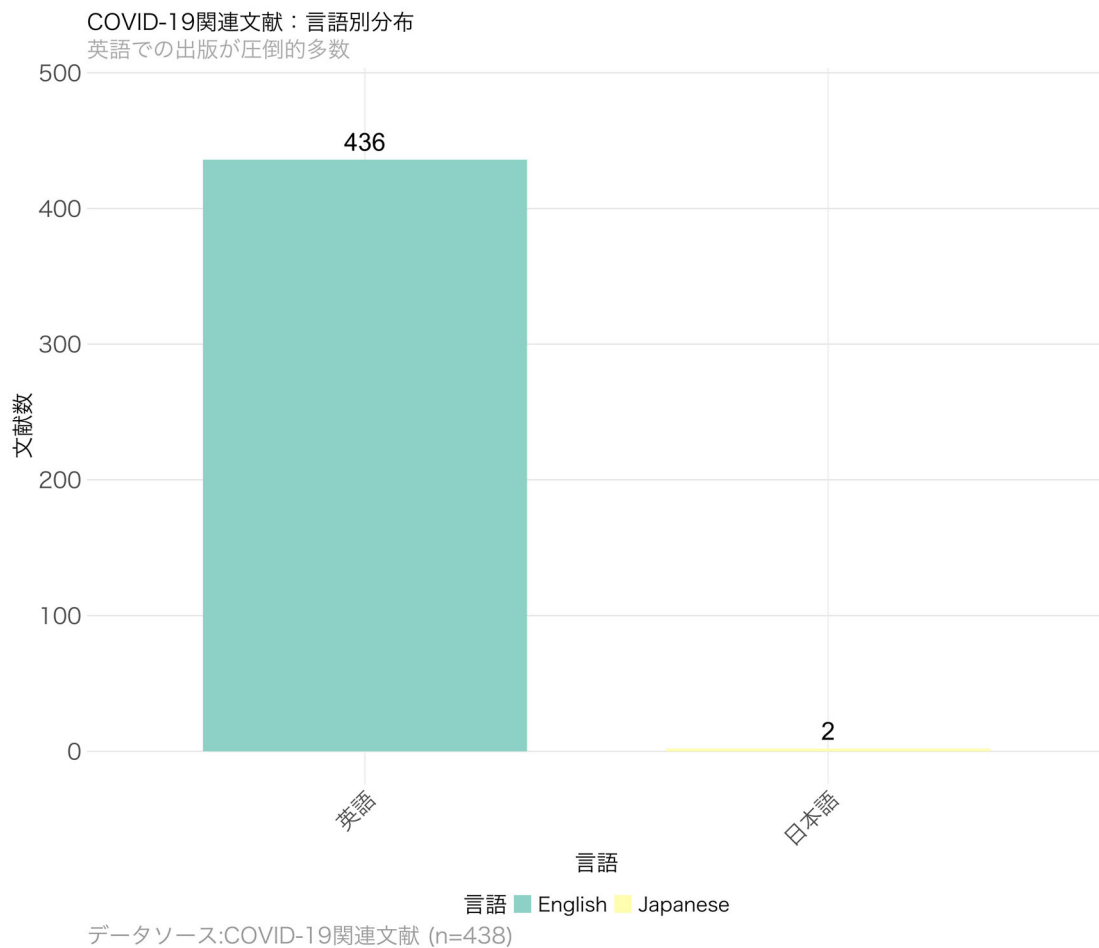
COVID-19感染症関連文献の言語別の分布を確認する。

出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
-------	-----	-------

日本語	2	0.5%
-----	---	------

英語	436	99.5%
----	-----	-------



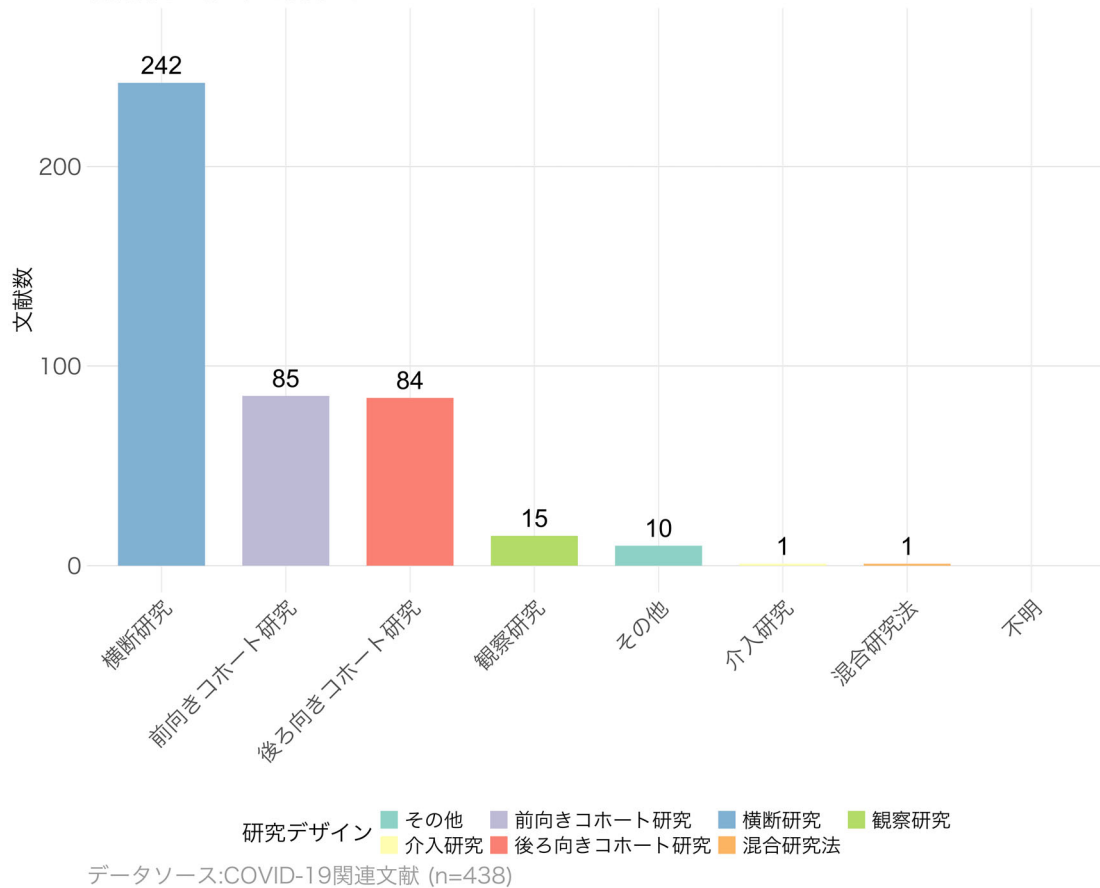
考察: 言語別の分析から、COVID-19関連文献の出版言語は英語（436件、99.5%）が多数を占める。

9.3 研究デザインの分析

COVID-19感染症関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	242	55.3%
前向きコホート研究	85	19.4%
後ろ向きコホート研究	84	19.2%
観察研究	15	3.4%
その他	10	2.3%
介入研究	1	0.2%
混合研究法	1	0.2%

COVID-19関連文献：研究デザイン別分布（上位10件）
横断研究が最も多く使用されている



考察:

研究デザインの分析から、COVID-19関連研究でも横断研究が最も多く用いられていることがわかる。

9.4 災害フェーズの分類と分析

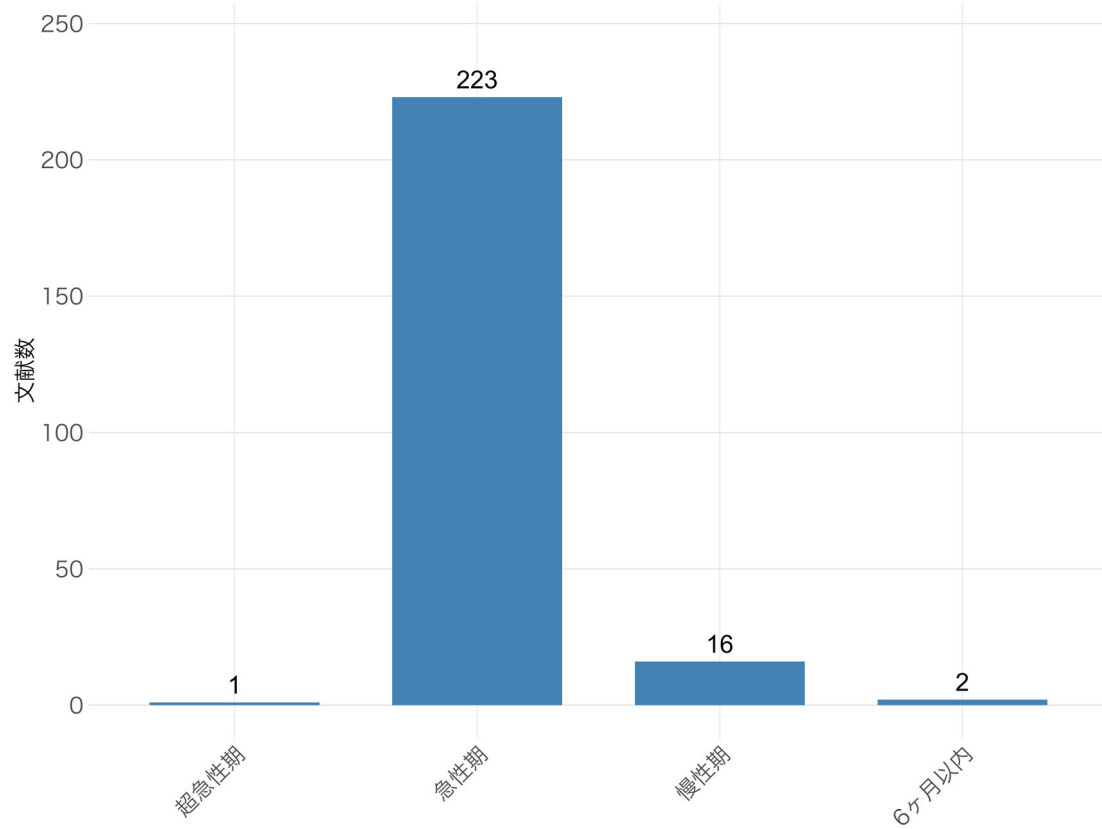
COVID-19感染症関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	1	0.4%
急性期	223	92.1%
慢性期	16	6.6%
6ヶ月以内	2	0.8%

横断研究における災害フェーズ別分布
調査対象期間は急性期に集中している

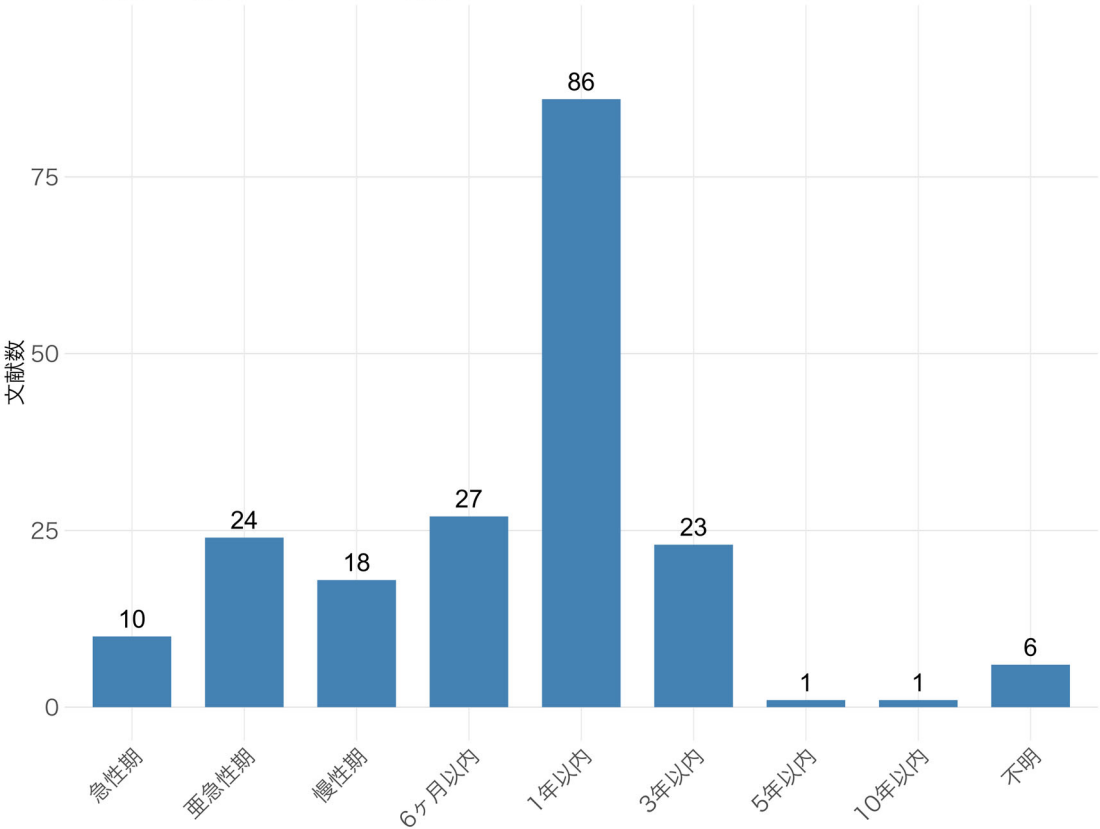


データソース:COVID-19関連文献 (n=438)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	10	5.1%
亜急性期	24	12.2%
慢性期	18	9.2%
6ヶ月以内	27	13.8%
1年以内	86	43.9%
3年以内	23	11.7%
5年以内	1	0.5%
10年以内	1	0.5%
不明	6	3.1%

縦断研究における災害フェーズ別分布
1年以内の短期間のフォローアップ期間が多い



データソース:COVID-19関連文献 (n=438)

考察:

横断研究は急性期に実施されたものが最も多い。
縦断研究では1年以内のフォローアップが多いが、COVID-19感染症が発生してから長期的なフォローアップに関して今後の調査報告を待つ必要がある。

9.5 対象疾患の分析

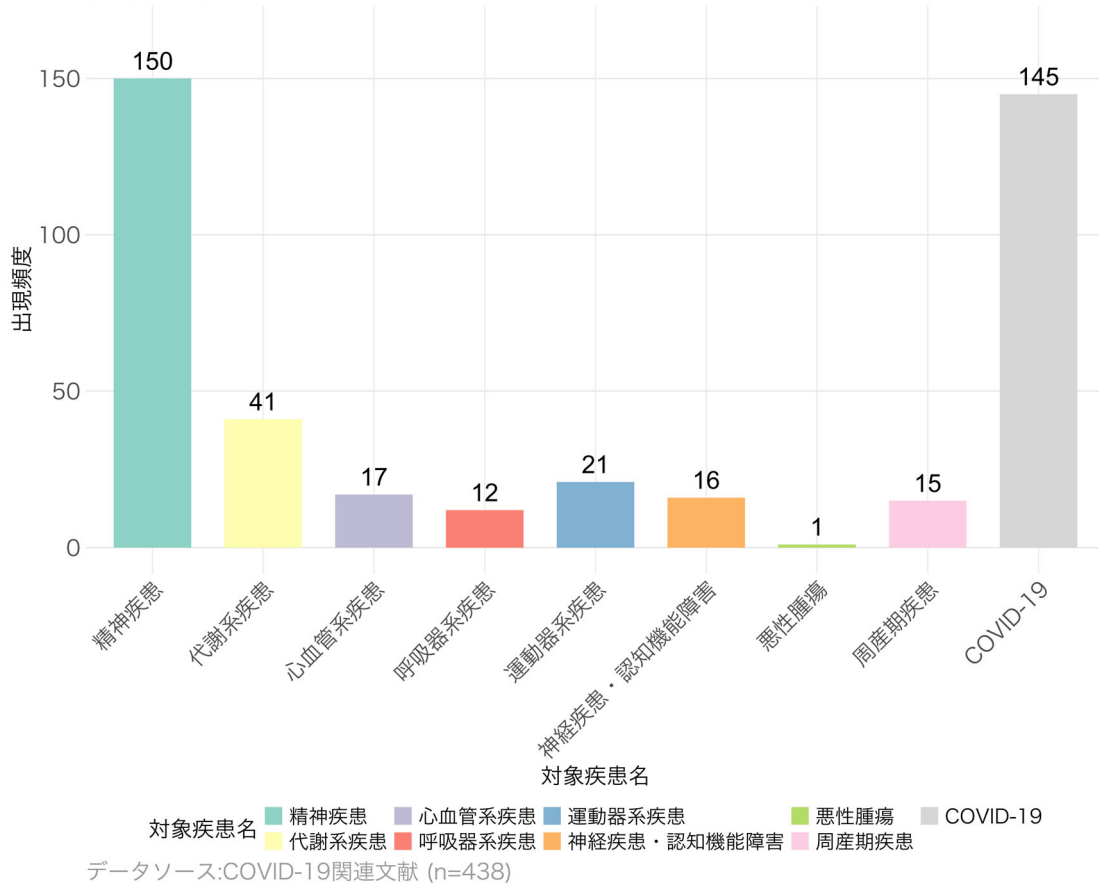
COVID-19感染症関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	150	35.9%
代謝系疾患	41	9.8%
心血管系疾患	17	4.1%
呼吸器系疾患	12	2.9%
運動器系疾患	21	5.0%
神経疾患・認知機能障害	16	3.8%
悪性腫瘍	1	0.2%
周産期疾患	15	3.6%

対象疾患の出現頻度

対象疾患名	出現頻度	割合(%)
COVID-19	145	34.7%

災害関連関連文献：対象疾患別分布
精神疾患が最も多い



考察:

COVID-19関連文献でも精神疾患（150件、34.2%）に関する研究が多数見られる。次いで代謝系疾患（41件、9.4%）、COVID-19感染症（145件、33.1%）が多い。

9.6 地理的範囲の分析

COVID-19感染症関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

COVID-19関連文献の地理的範囲分布（上位10地域）

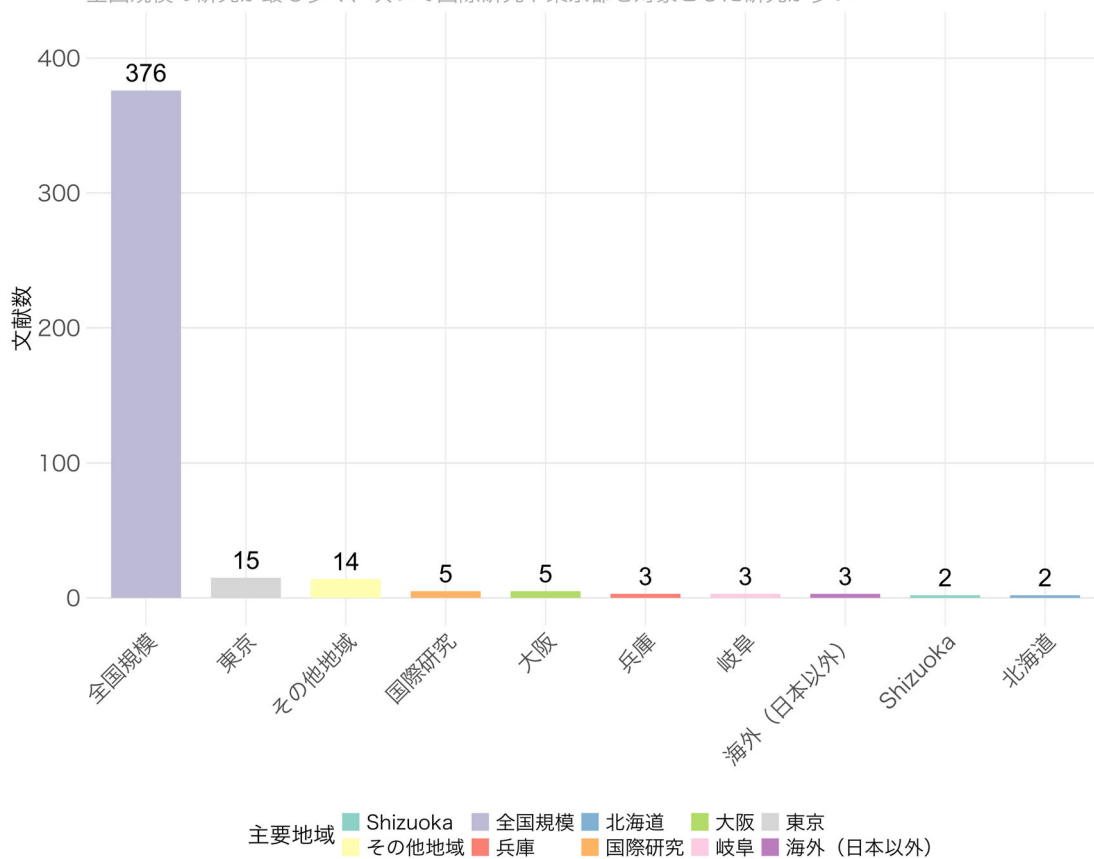
地域区分	文献数	割合(%)
全国規模	376	85.8%
東京	15	3.4%
国際研究	5	1.1%
大阪	5	1.1%
兵庫	3	0.7%

COVID-19関連文献の地理的範囲分布（上位10地域）

地域区分	文献数	割合(%)
岐阜	3	0.7%
海外（日本以外）	3	0.7%
Shizuoka	2	0.5%
北海道	2	0.5%
その他地域	14	3.2%

COVID-19関連文献：主要地域別分布（上位10地域）

全国規模の研究が最も多く、次いで国際研究や東京都を対象とした研究が多い



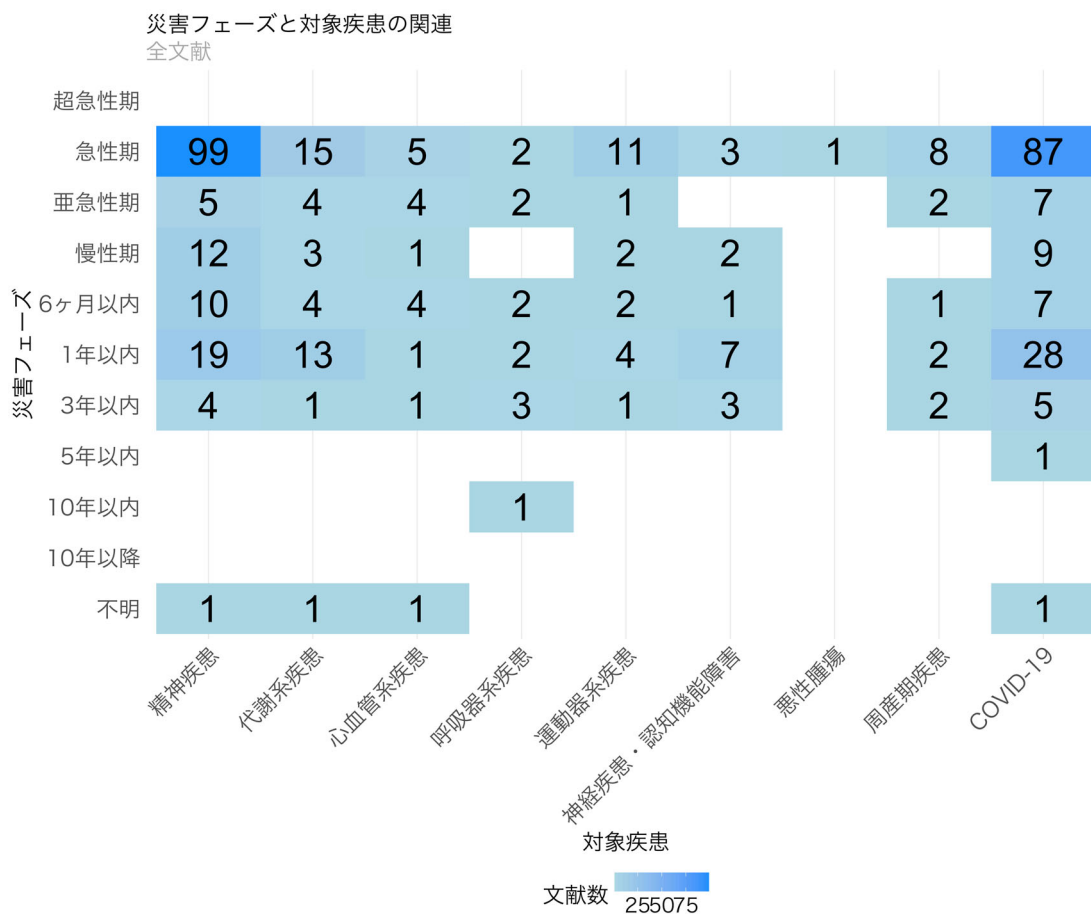
データソース:COVID-19関連文献 (n=438)

考察:

地理的範囲の分析から、COVID-19関連研究では全国規模を対象とした研究が最も多く（376件、85.8%）、次いで東京（15件、3.4%）、その他地域（150件、34.2%）、国際研究（5件、1.1%）、大阪（5件、1.1%）の順となっている。これはCOVID-19が全国的な影響を与えたことと、パンデミック下での研究実施の制約からオンライン調査が増加したことを反映している。東日本大震災研究と比較すると、特定の被災地域に集中するのではなく、より広域的で分散した地理的範囲を対象としている点が特徴的である。

9.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

COVID-19感染症関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



考察:

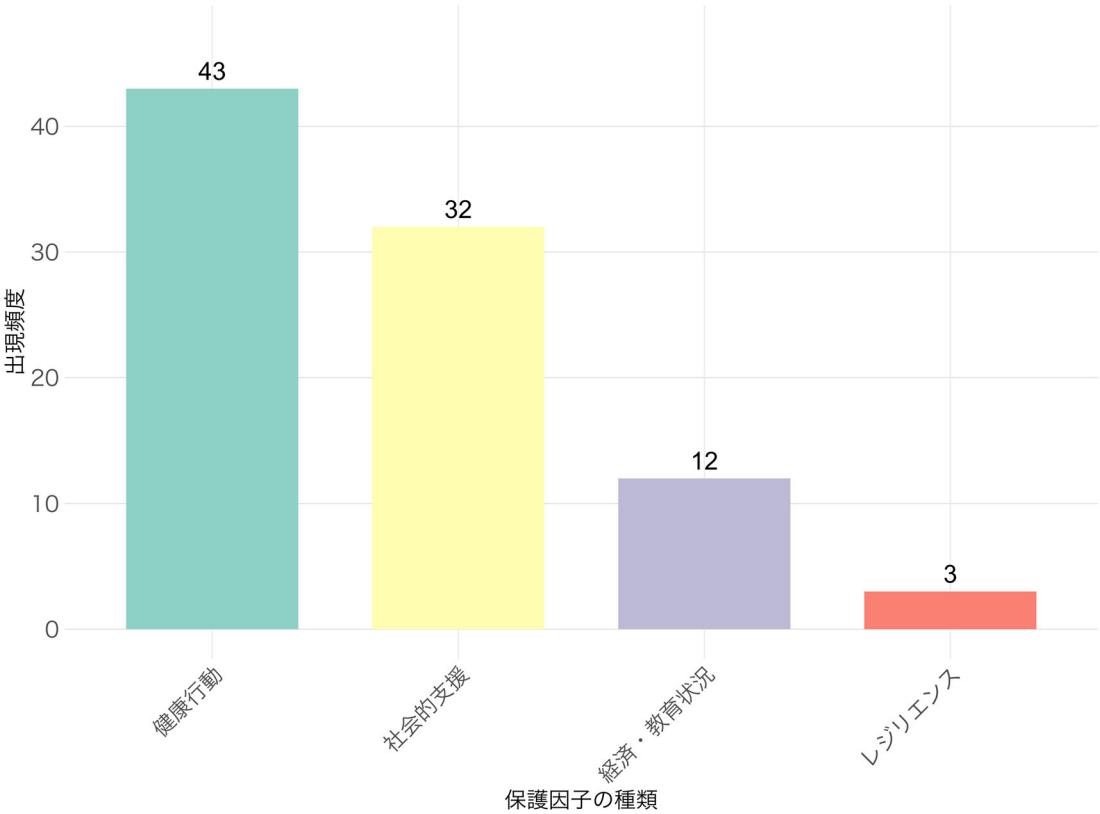
COVID-19感染症が発生してから長期間のフォローアップができるほどの時間が経過していないため、比較的短期間のフォローアップによる調査が主体である。

9.8 保護因子の分析

COVID-19感染症関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	43	47.8%
社会的支援	32	35.6%
経済・教育状況	12	13.3%
レジリエンス	3	3.3%

災害関連関連文献：保護因子別分布
研究対象となった主な保護因子



保護因子の種類 健康行動 社会的支援 経済・教育状況 レジリエンス
データソース:保護因子を取り扱った文献(n=90)

考察:
保護因子に関する研究は90件であり、東日本大震災関連文献（438件）の20.5%を占めていた。健康行動について調査した研究が最も多く、社会的支援に関する研究が続いていた。

9.9 COVID-19文献分析の概要

COVID-19感染症関連文献の概要は以下の通りである。

COVID-19文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
COVID-19関連文献数	438件
最も多い出版年	2021年（157件）
主要出版言語	英語（436件）
最も多い研究デザイン	横断研究（242件）
最も多い対象疾患	精神疾患（150件）
保護因子に関する文献	90件
最も多い研究対象地域	全国規模（150件）

考察: 二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、COVID-19感染症関連文献は438件（34%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

時間的推移: 文献数は2020年（8件）から急速に増加し、2021年（162件）にピークを迎えた後、緩やかに減少している。これは東日本大震災関連文献が発災から5年後の2016年にピークを迎えたのとは対照的である。

言語分布: 英語（436件、99.5%）、日本語（2件、0.5%）であり英語文献が圧倒的に多い。

研究デザイン: 横断研究（242件、55.3%）が最も多く、前向きコホート研究（85件、19.4%）と後ろ向きコホート研究（84件、19.2%）が続く。この分布パターンは東日本大震災関連研究と類似している。

対象疾患: 精神疾患（150件、34.2%）が多く、次いで代謝系疾患（41件、9.4%）に関する研究が続く。精神疾患の重要性は東日本大震災研究と共通している。

保護因子: 保護因子に関する研究は90件であり、COVID-19感染症関連文献（438件）の20.5%を占めていた。社会的支援について調査した研究（86件、20.5%）が最も多く、健康行動に関する研究（81件、18.5%）が続く。

地理的範囲: 全国規模の研究（395件、85.9%）が大多数を占め、特定地域を対象とした研究は少数である。これは特定被災地に集中する東日本大震災研究とは対照的であり、パンデミックの全国的影響と研究実施環境の制約を反映している。

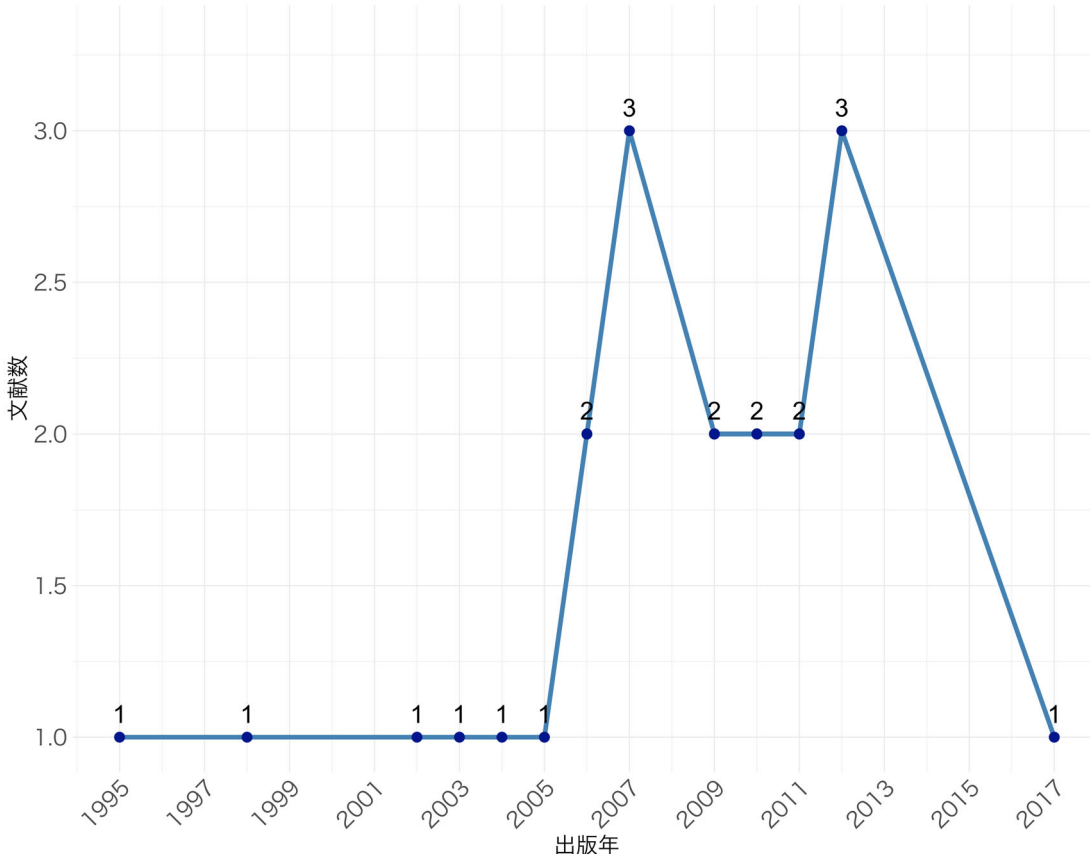
10. 火山・噴火災害に関する文献の分析

次に、火山・噴火災害に焦点を当てて詳細な検討を行う。火山・噴火災害関連の文献は計21件あり、全体の1.6%を占めている。

10.1 出版年別の推移

火山・噴火災害関連文献の出版年別の分布を確認する。

火山・噴火災害関連文献の出版年推移 (1995-2024)
長期間にわたる研究出版の特徴



データソース: 火山・噴火災害関連文献 (n=21)

考察:

火山・噴火災害関連文献の出版数は地震災害に比較して極めて少ない状態が続いている。

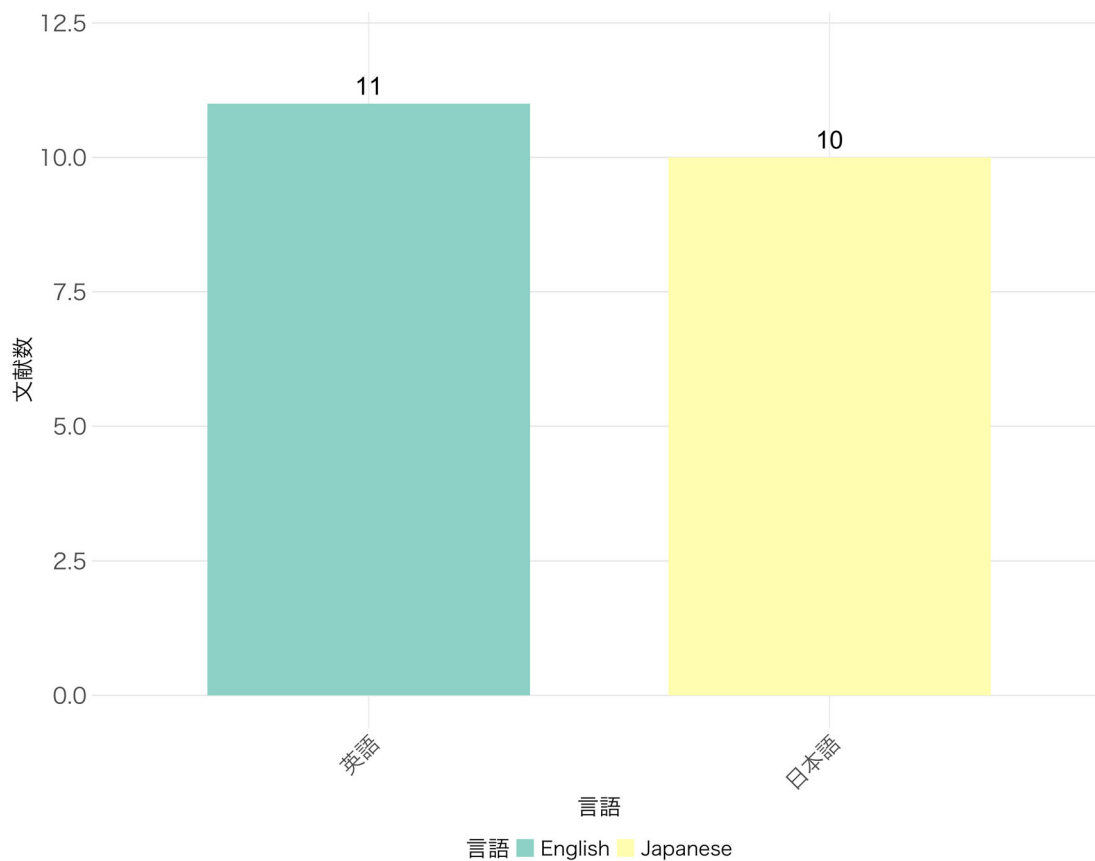
10.2 言語別の分析

火山・噴火災害関連文献の言語別の分布を確認する。

出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
日本語	10	47.6%
英語	11	52.4%

火山・噴火災害関連文献：言語別分布



データソース: 火山・噴火災害関連文献 (n=21)

考察:

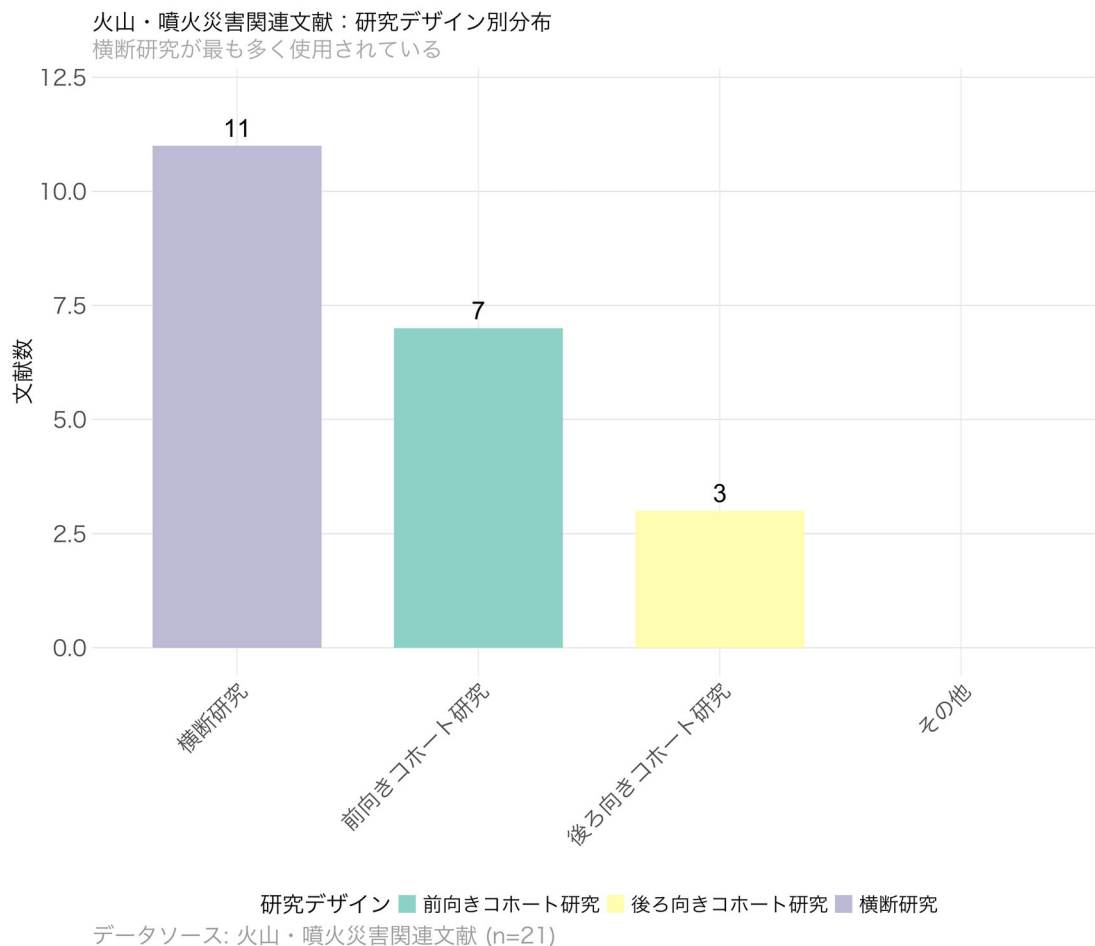
言語別の分析から、関連文献の出版言語は英語（11件、52.4%）と日本語（10件、47.6%）がほぼ同数である。

10.3 研究デザインの分析

火山・噴火災害関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布

研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	11	52.4%
前向きコホート研究	7	33.3%
後ろ向きコホート研究	3	14.3%



考察:

研究デザインの分析から、火山・噴火災害関連研究では横断研究が最も多く用いられており（11件、52.4%）、半数を占めている。これに次いで、前向きコホート研究（7件、33.3%）と後ろ向きコホート研究（3件、14.3%）が続いている。

10.4 災害フェーズの分類と分析

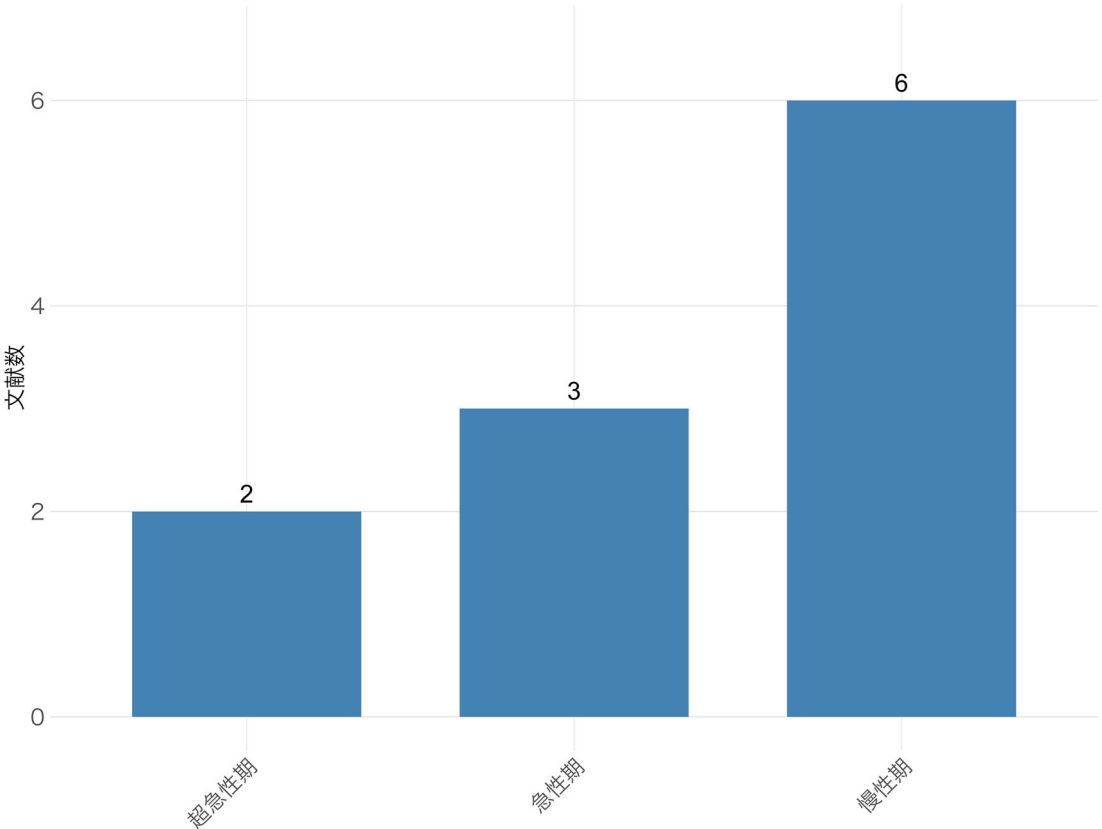
火山・噴火災害関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
超急性期	2	18.2%
急性期	3	27.3%
慢性期	6	54.5%

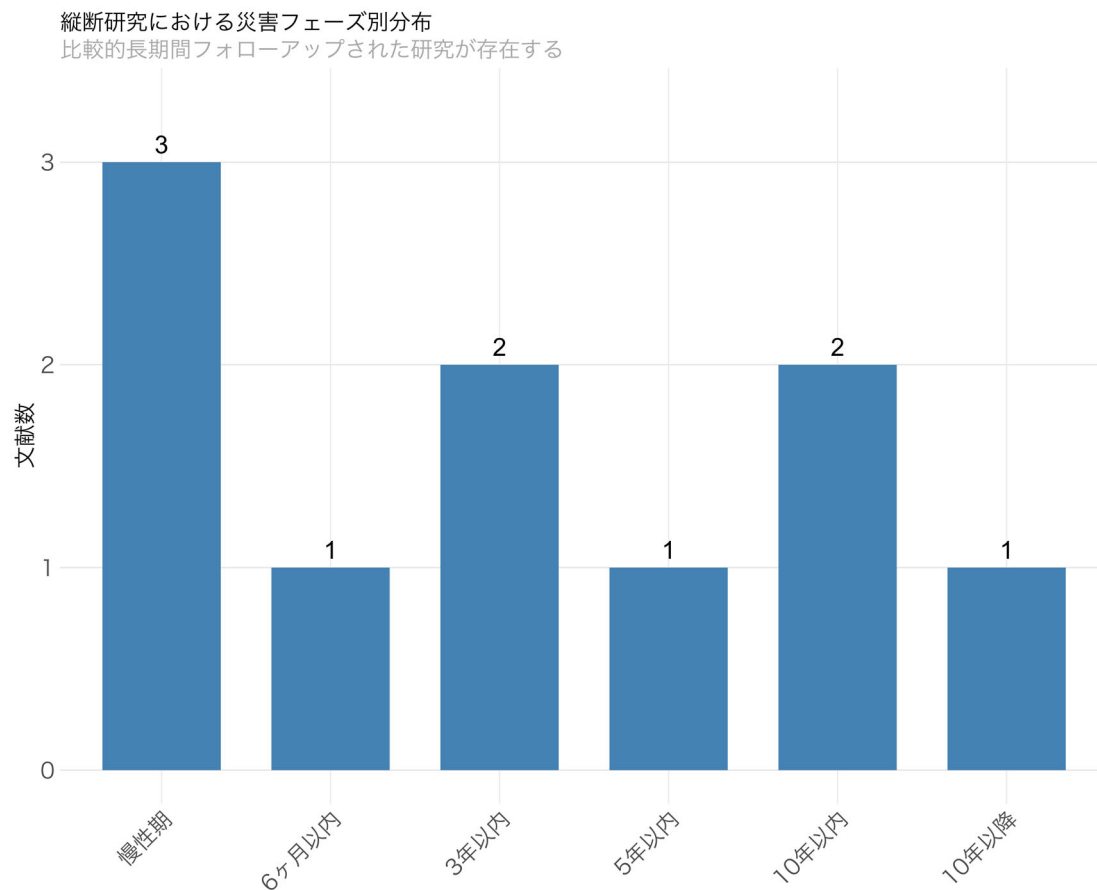
横断研究における災害フェーズ別分布
慢性期に行われた研究が最も多い



データソース: 火山・噴火災害関連文献 (n=21)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
慢性期	3	30.0%
6ヶ月以内	1	10.0%
3年以内	2	20.0%
5年以内	1	10.0%
10年以内	2	20.0%
10年以降	1	10.0%



データソース: 火山・噴火災害関連文献 (n=21)

考察:

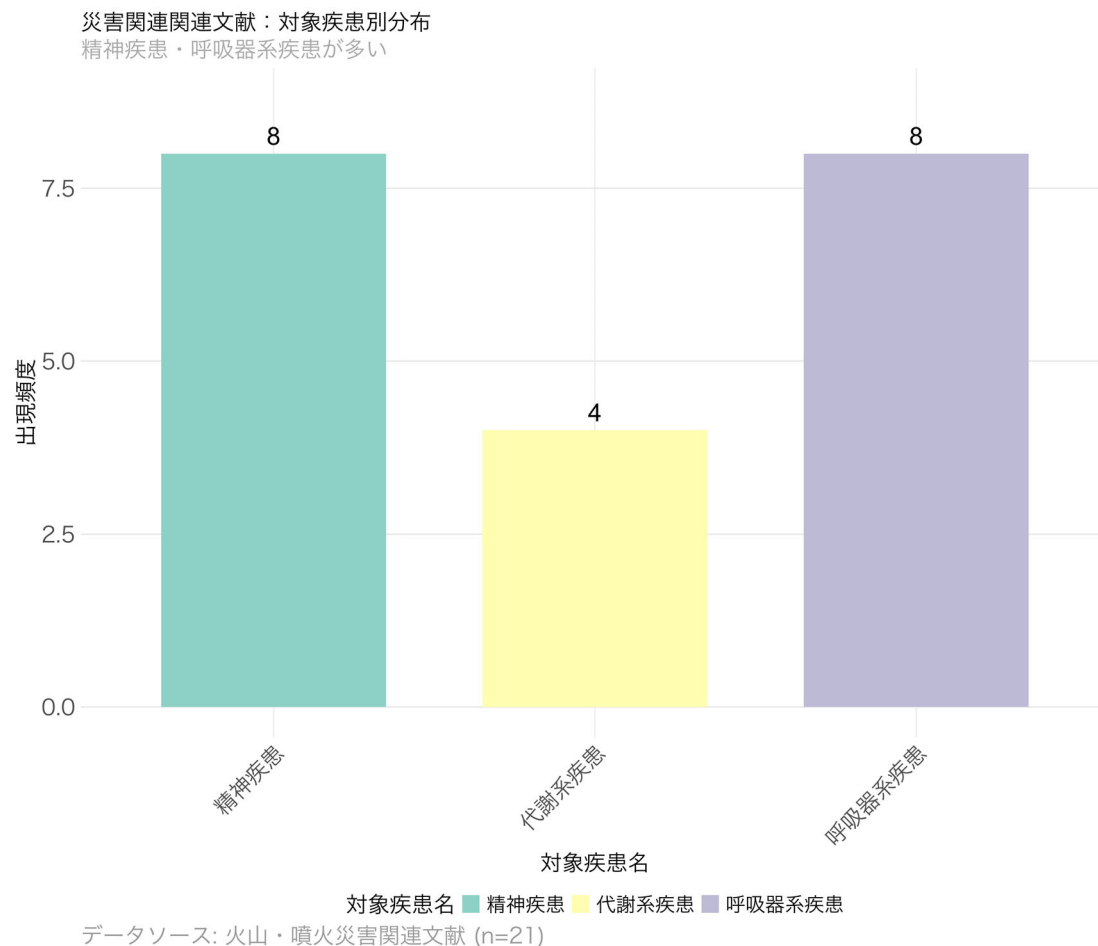
横断研究では全ての研究が慢性期までに行われている。最も件数が多かったのは慢性期に行われたものであり、約半数を占めている（11件、52.4%）。

縦断研究は年単位の比較的長期間フォローアップがされている研究が複数存在している。火山・噴火災害は発災直後の被害のみならず、火山灰や有毒ガスなどによる長期的な健康被害や、長期間にわたる避難生活を余儀なくされる場合もあるため、比較的長期間観察されている可能性がある。

10.5 対象疾患の分析

火山・噴火災害関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	8	40.0%
代謝系疾患	4	20.0%
呼吸器系疾患	8	40.0%



考察:

対象疾患の分析結果から、精神疾患（8件、38.1%）と呼吸器系疾患（8件、38.1%）が調査対象として用いられている。これは、火山活動に関連した有毒ガスや火山灰による健康被害の調査が行われていることを反映している。

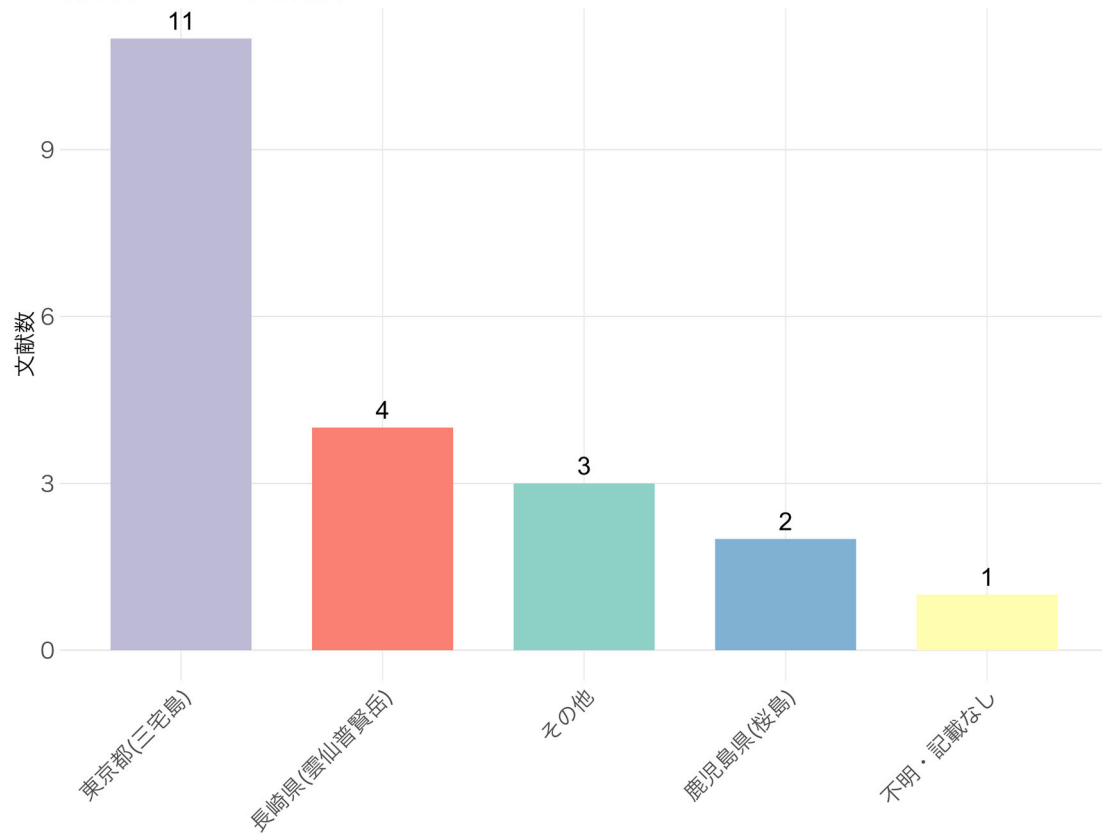
10.6 地理的範囲の分析

火山・噴火災害文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

火山災害関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
東京都(三宅島)	11	52.4%
長崎県(雲仙普賢岳)	4	19.0%
その他	3	14.3%
鹿児島県(桜島)	2	9.5%
不明・記載なし	1	4.8%

火山・噴火災害関連文献：地域別分布
研究対象となった地理的範囲



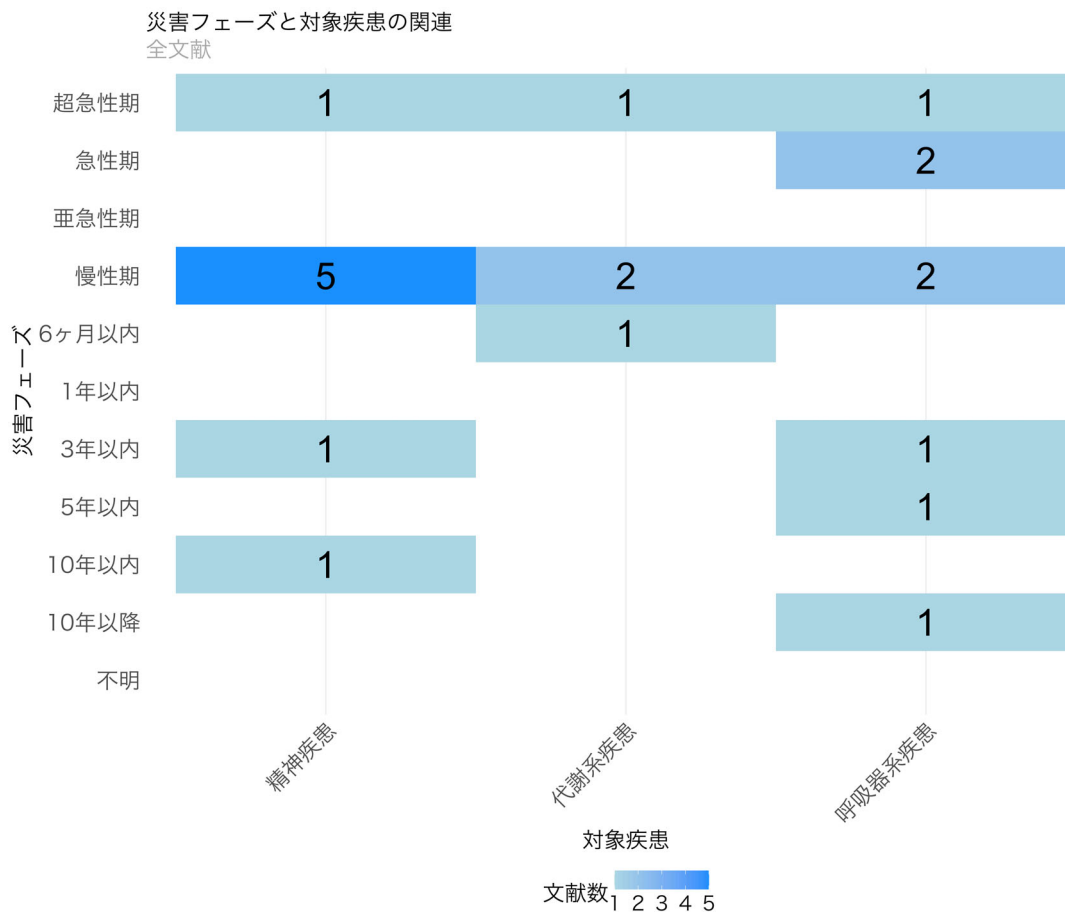
データソース: 火山・噴火災害関連文献 (n=21)

考察:

東京都三宅島、長崎県雲仙普賢岳、鹿児島県桜島などの代表的な火山地域で行われ研究が主体である。

10.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

火山・噴火災害文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



データソース: 阪神・淡路大震災関連文献 (n=21)

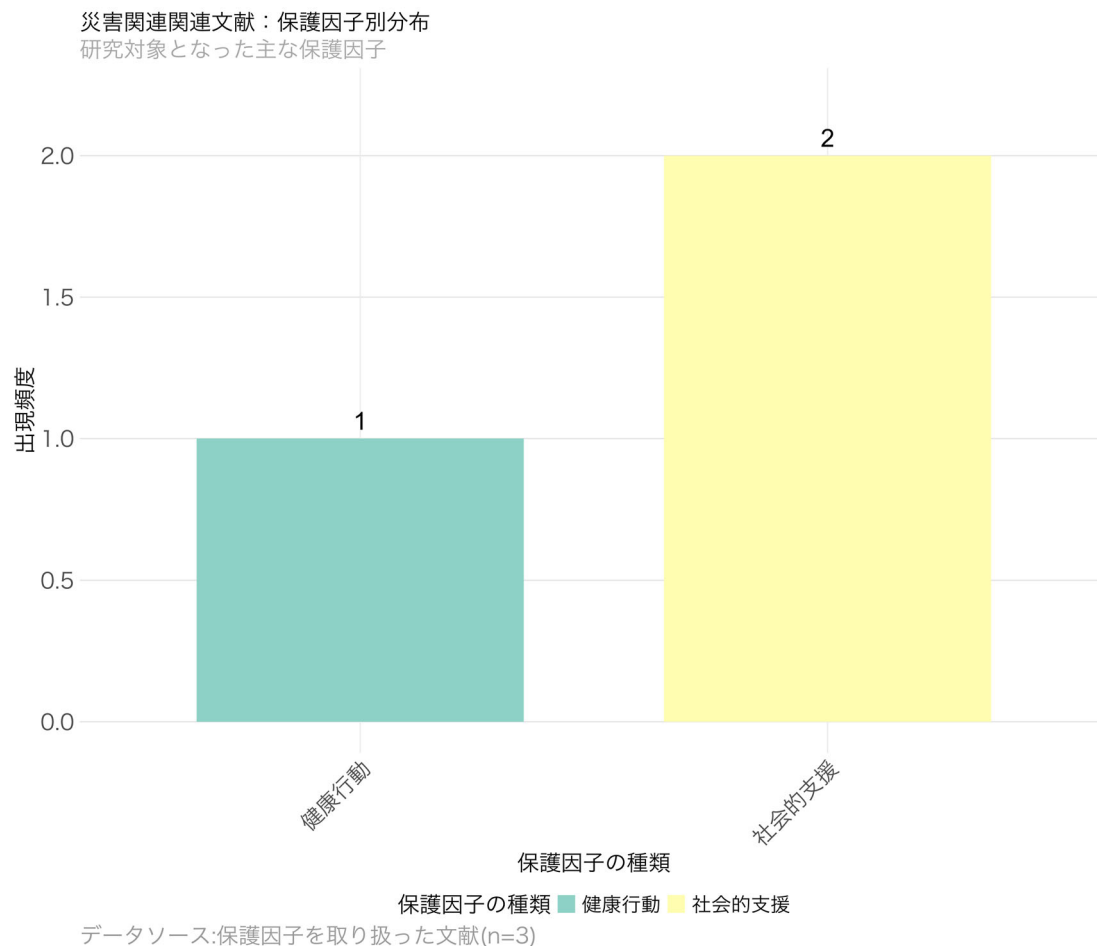
考察:

慢性期を中心に研究が行われているが、遠隔期にかけて散発的に研究が行われている。

10.8 保護因子の分析

火山・噴火災害文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
健康行動	1	33.3%
社会的支援	2	66.7%



考察:

保護因子に関する研究は3件であり、東日本大震災関連文献（21件）の14.3%と極めて限定的であった。

10.9 火山・噴火災害文献分析の概要

火山・噴火災害文献の概要は以下の通りである。

火山・噴火災害文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
阪神・淡路大震災関連文献数	21件
最も多い出版年	2007年（3件）
主要出版言語	英語（11件）
最も多い研究デザイン	横断研究（11件）
最も多い対象疾患	精神疾患（8件）
保護因子に関する文献	3件
最も多い研究対象地域	東京都(三宅島)（8件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、火山・噴火災害文献は21件（1.6%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

言語分布: 英語（11件、52.4%）、日本語（10件、47.6%）はほぼ同数である。

研究デザイン: 横断研究（11件、52.4%）が最も多く、前向きコホート研究（7件、33.3%）と後ろ向きコホート研究（3件、14.3%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究では慢性期までに行われたものが大部分を占めている。縦断研究では5年以内にフォローアップが終了されている研究が多数であり、10年以上のフォローアップを実施した研究は限定的である。

対象疾患: 精神疾患（8件、38.1%）と呼吸器系疾患（8件、38.1%）が多く、次いで代謝系疾患（4件、19%）に関する研究が続く。

保護因子: 保護因子に関する研究は3件であり、東日本大震災関連文献（21件）の14.3%と限定的であった。

地理的範囲: 代表的な火山災害である東京都三宅島、長崎県雲仙普賢岳、鹿児島県桜島が主たる研究対象である。

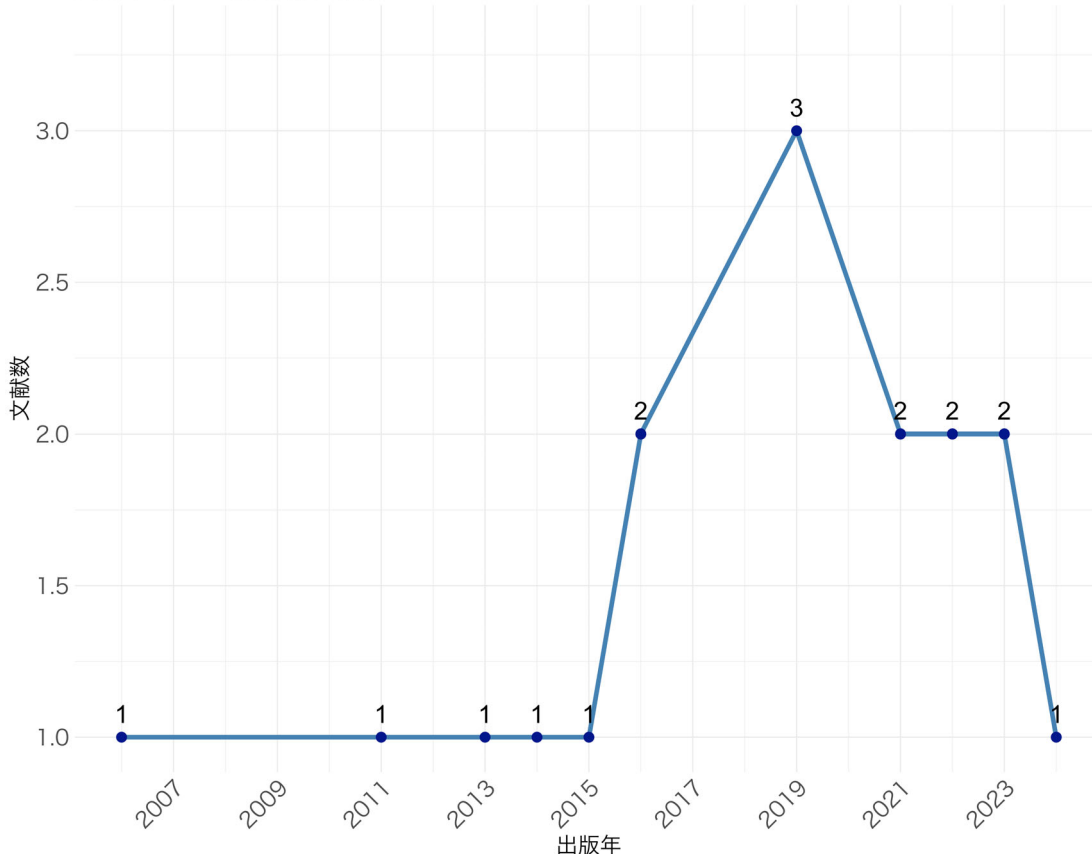
11. 水害に関する文献の分析

次に、水害に焦点を当てて詳細な検討を行う。水害関連の文献は計17件あり、全体の1.3%を占めている。

11.1 出版年別の推移

水害関連文献の出版年別の分布を確認する。

水害関連文献の出版年推移 (1995-2024)
長期間にわたる研究出版の特徴



データソース:水害関連文献 (n=17)

考察:

研究対象期間において平成30年7月豪雨災害をはじめとする多数の水害が生じているにもかかわらず、水害関連文献の出版数は地震災害に比較して極めて少ない状態が続いている。

11.2 言語別の分析

水害関連文献の言語別の分布を確認する。

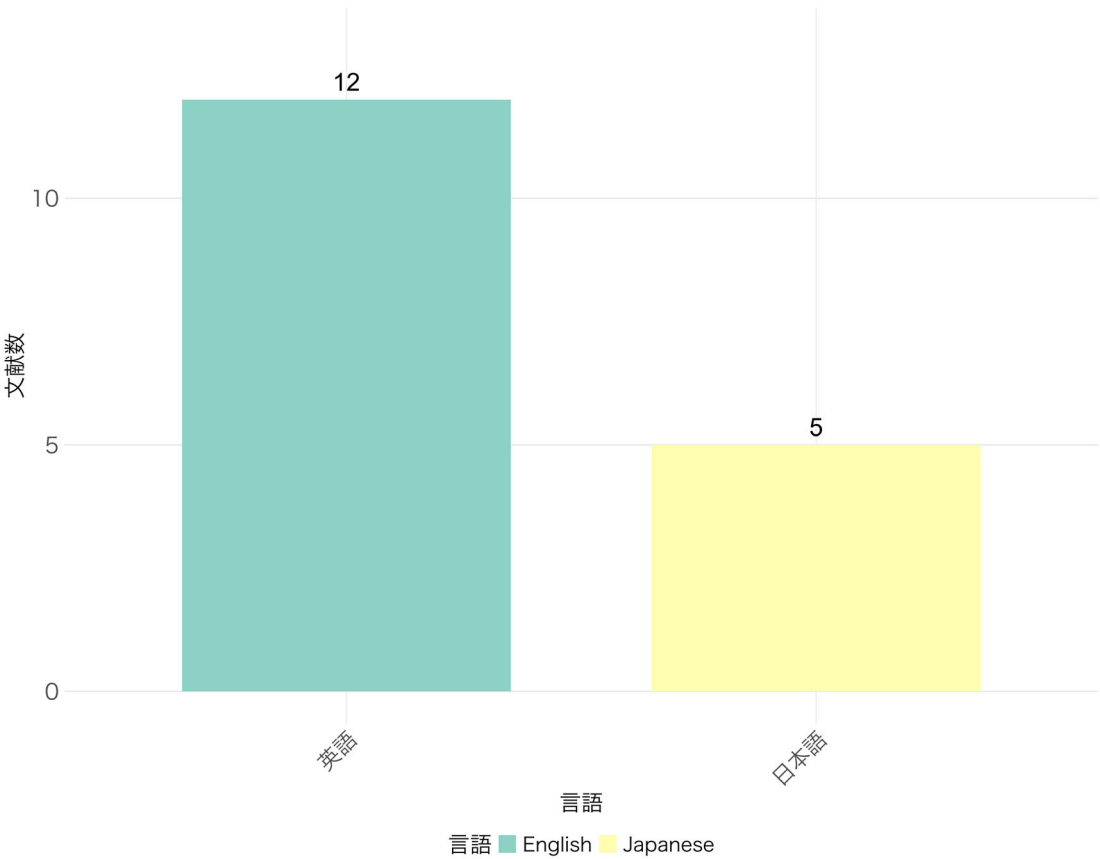
出版言語別の分布

出版言語別	文献数	割合(%)
-------	-----	-------

日本語	5	29.4%
-----	---	-------

英語	12	70.6%
----	----	-------

水害関連文献：言語別分布



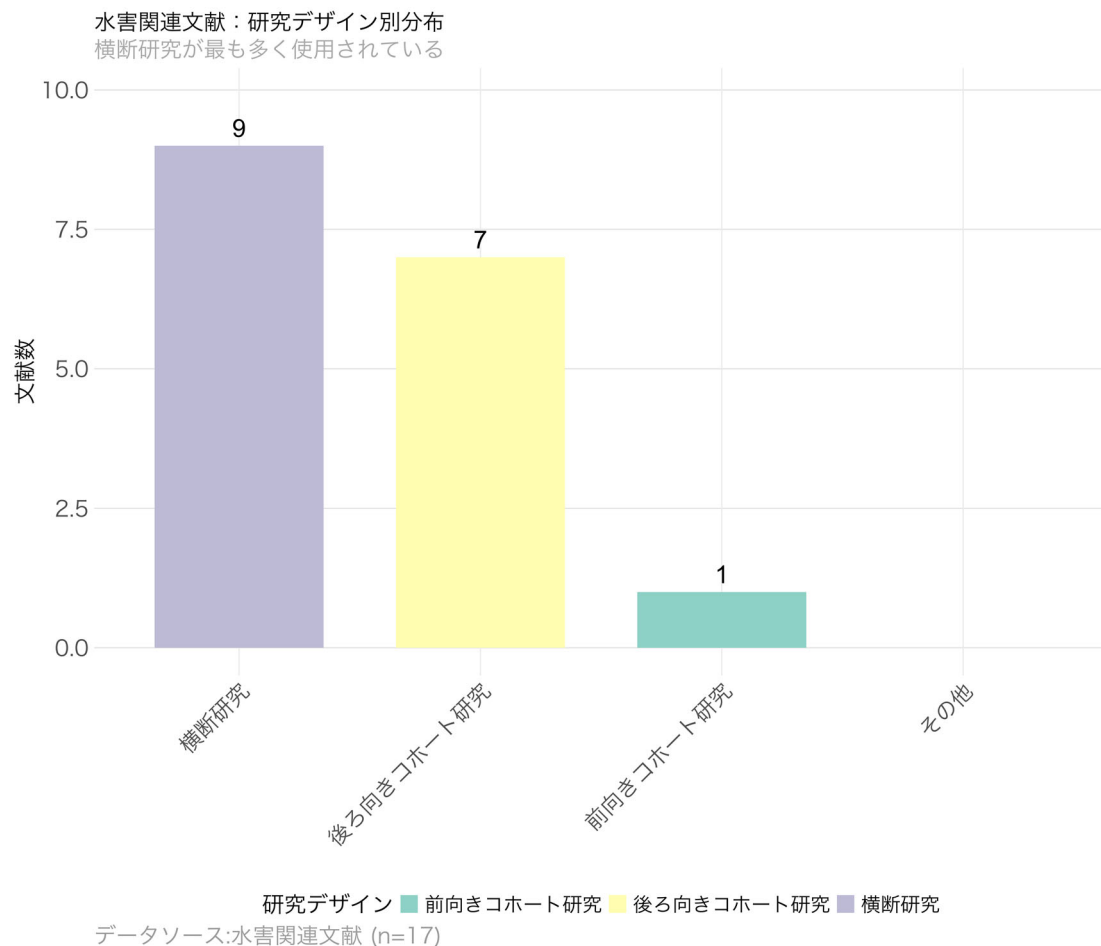
データソース: 水害関連文献 (n=17)

考察:
言語別の分析から水害関連文献の出版言語は英語（12件、70.6%）が最も多く、次いで日本語（5件、29.4%）の順となっている。

11.3 研究デザインの分析

水害関連文献の研究デザイン別の分布を確認する。

研究デザイン別分布		
研究デザイン別	文献数	割合(%)
横断研究	9	52.9%
後ろ向きコホート研究	7	41.2%
前向きコホート研究	1	5.9%



考察:

研究デザインの分析から、水害関連研究では横断研究が最も多く用いられており（9件、52.9%）、半数を占めている。これに次いで、後ろ向きコホート研究（7件、41.2%）が続いている。前向きコホート研究の実施数は極めて限定的である（1件、5.9%）。

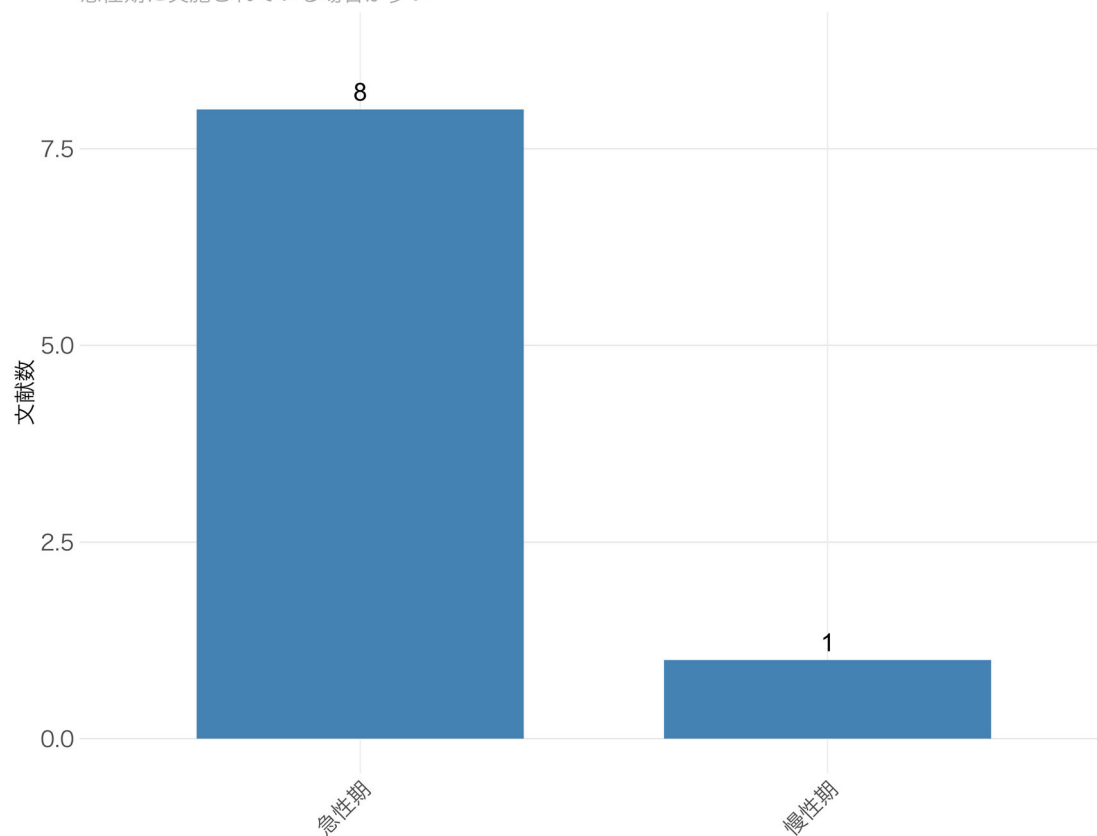
11.4 災害フェーズの分類と分析

水害関連文献の災害フェーズ別の分布を確認する。

横断研究と縦断研究に分けて分析を行った。横断研究については調査開始時期、縦断研究については調査終了時期を示している。

横断研究における災害フェーズ別分布		
災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	8	88.9%
慢性期	1	11.1%

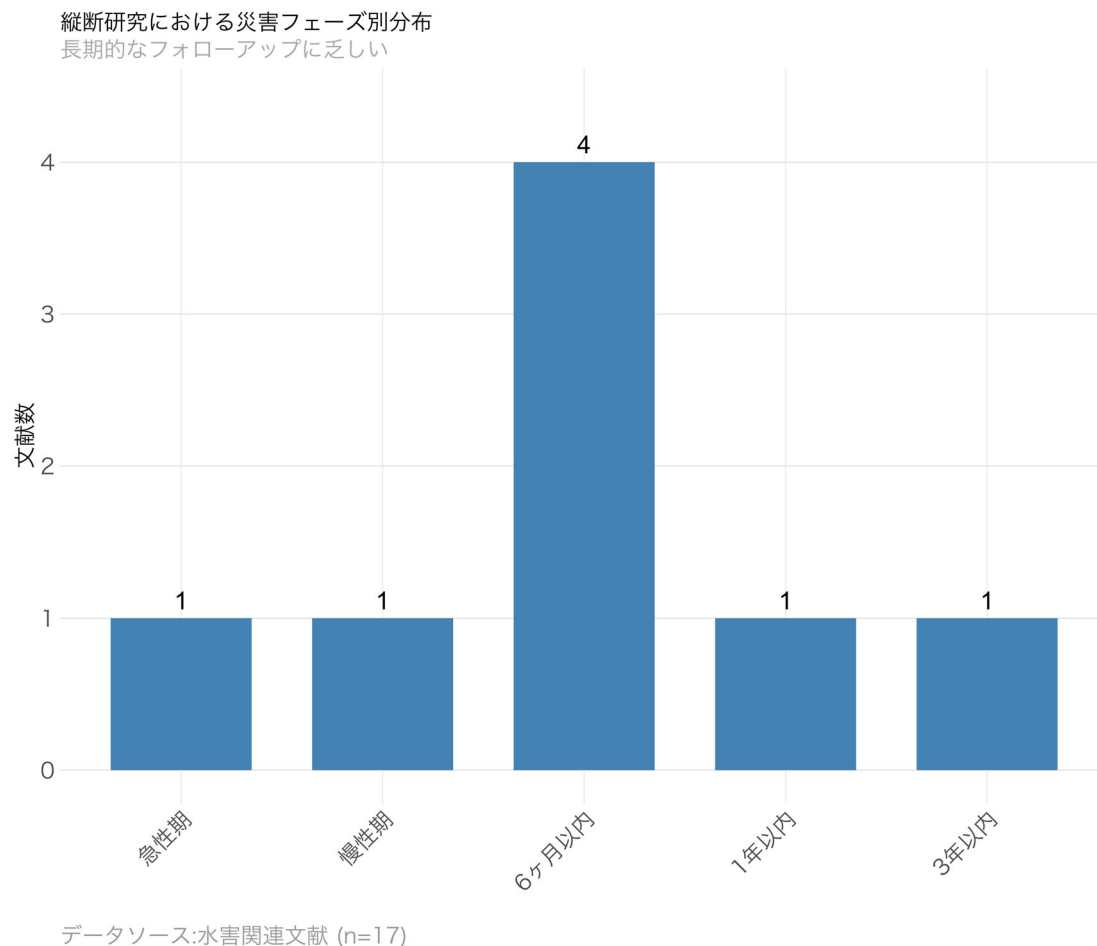
横断研究における災害フェーズ別分布
急性期に実施されている場合が多い



データソース:水害関連文献 (n=17)

縦断研究における災害フェーズ別分布

災害フェーズ	文献数	割合(%)
急性期	1	12.5%
慢性期	1	12.5%
6ヶ月以内	4	50.0%
1年以内	1	12.5%
3年以内	1	12.5%



考察:

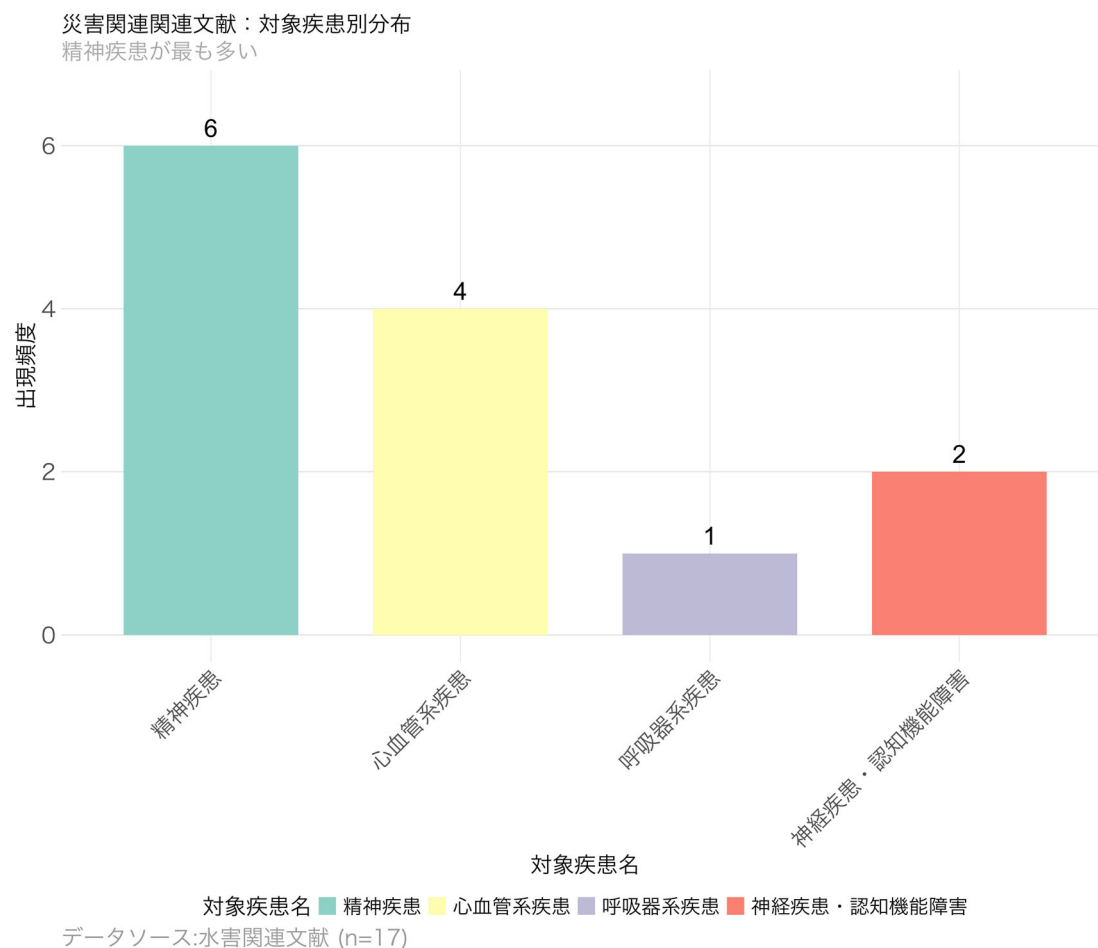
横断研究では全ての研究が慢性期までに行われている。最も件数が多かったのは慢性期に行われたものであり、約半数を占めている（460件、52.4%）。

縦断研究は年単位の比較的長期間フォローアップがされている研究が複数存在している。火山・噴火災害は発災直後の被害のみならず、火山灰や有毒ガスなどによる長期的な健康被害や、長期間にわたる避難生活を余儀なくされる場合もあるため、比較的長期間観察されている可能性がある。

11.5 対象疾患の分析

水害関連文献の対象疾患別の分布を確認する。

対象疾患の出現頻度		
対象疾患名	出現頻度	割合(%)
精神疾患	6	46.2%
心血管系疾患	4	30.8%
呼吸器系疾患	1	7.7%
神経疾患・認知機能障害	2	15.4%



考察:

対象疾患の分析結果から、精神疾患を対象にした研究が最も多く占めている（6件、35.3%）。次いで、心血管系疾患（4件、23.5%）に関する研究が続いている。

11.6 地理的範囲の分析

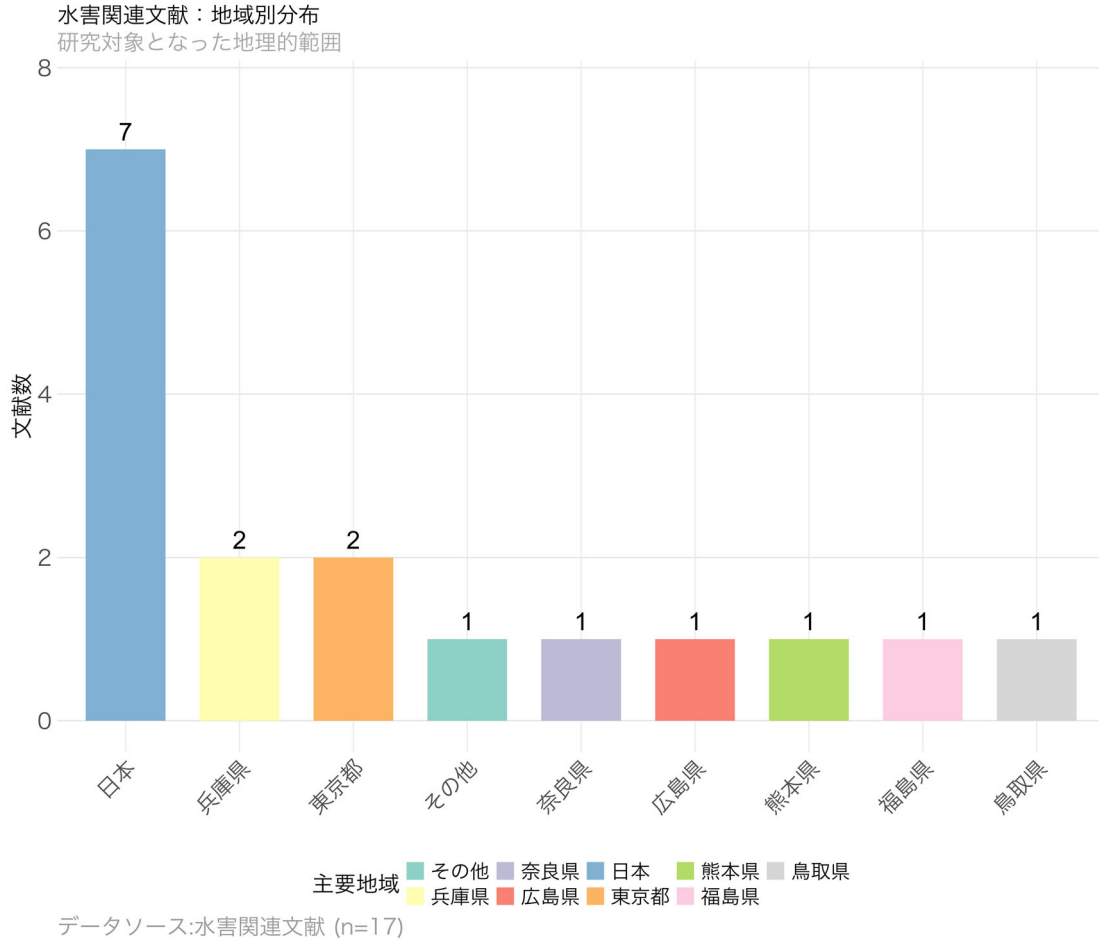
水害関連文献の対象地域の地理的範囲別の分布を確認する。

豪雨災害関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
日本	7	41.2%
兵庫県	2	11.8%
東京都	2	11.8%
その他	1	5.9%
奈良県	1	5.9%
広島県	1	5.9%
熊本県	1	5.9%
福島県	1	5.9%

豪雨災害関連文献：主要地域別分布

地域区分	文献数	割合(%)
鳥取県	1	5.9%

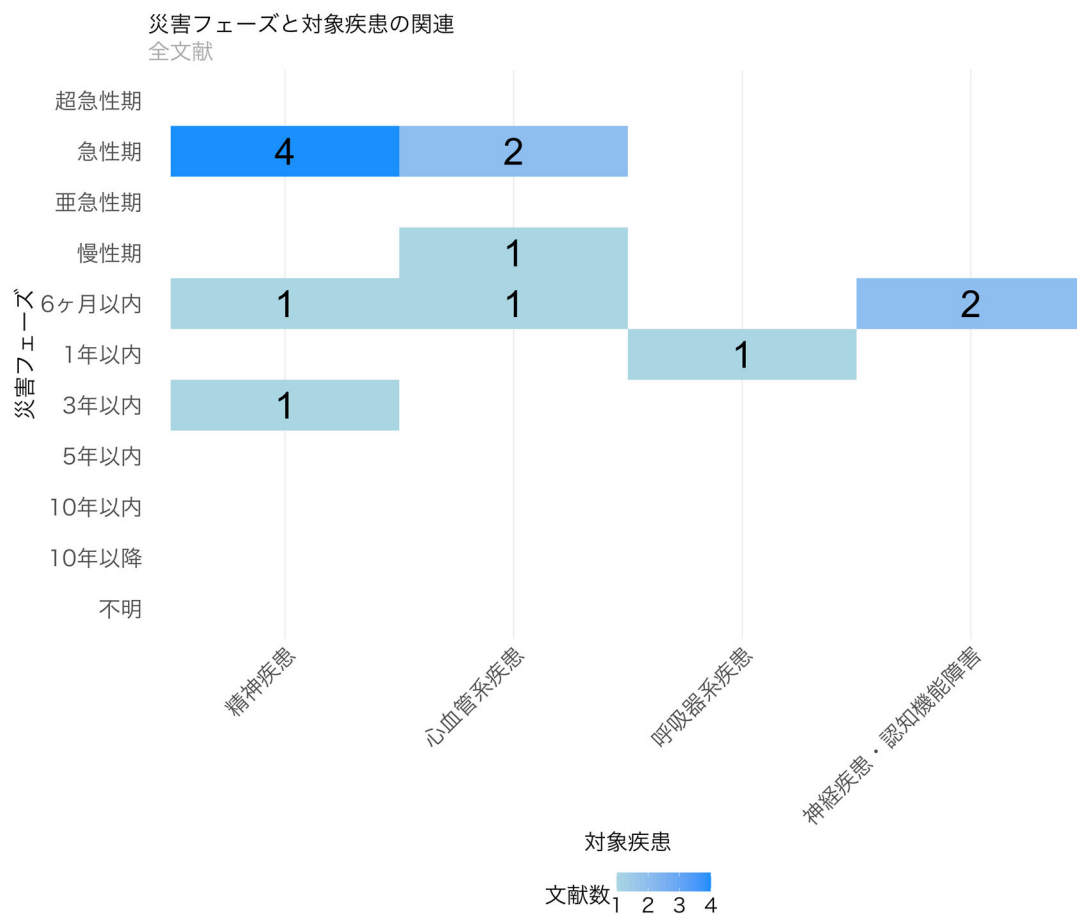


考察:

水害は局所災害に留まらず、平成30年7月豪雨災害を代表とする広域災害も含まれているため、特定のパターンは認められない。

11.7 クロス分析：対象疾患と災害フェーズの関係

水害関連文献における、災害フェーズと対象疾患の分布を確認する。



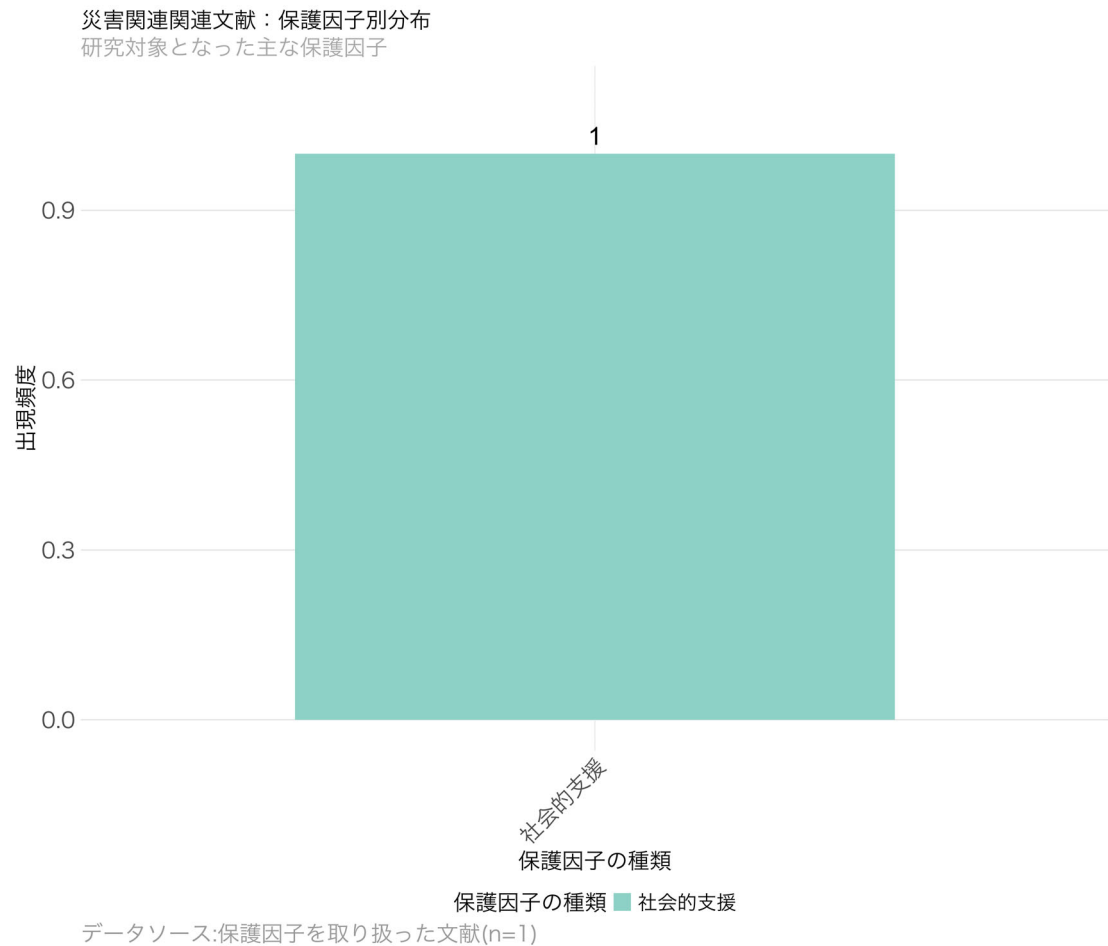
考察:

短期間のフォローアップが主体であり、遠隔期における研究に乏しい。

10.8 保護因子の分析

水害関連文献の保護因子別の分布を確認する。

保護因子の出現頻度		
保護因子の種類	出現頻度	割合(%)
社会的支援	1	100.0%



考察:
保護因子に関する研究は1件のみであり、水害関連文献（17件）の5.9%を占めていた。

11.9 水害関連文献分析の概要

水害関連文献の概要は以下の通りである。

水害関連文献分析の概要	
分析項目	結果
総文献数	1287件
水害関連文献数	17件
最も多い出版年	2019年（3件）
主要出版言語	英語（12件）
最も多い研究デザイン	横断研究（9件）
最も多い対象疾患	精神疾患（6件）
保護因子に関する文献	1件
最も多い研究対象地域	日本（6件）

考察:

二次スクリーニングを通過した1287件の文献のうち、水害関連文献は17件（1.3%）を占め、以下の特徴が明らかとなった。

言語分布: 英語（12件、70.6%）、日本語（5件、29.4%）であり英語文献が多い。

研究デザイン: 横断研究（9件、52.9%）が最も多く、後ろ向きコホート研究（7件、41.2%）と前向きコホート研究（1件、5.9%）が続く。

災害フェーズ: 横断研究では急性期～慢性期までに行われている。縦断研究では年単位の比較的長期間フォローアップがされている研究が複数存在している。

対象疾患: 対象疾患の分析結果から、精神疾患を対象にした研究が最も多く占めている（6件、35.3%）。次いで、代謝系疾患（件、%）に関する研究が続く。

保護因子: 保護因子に関する研究は1件のみであり、水害関連文献（17件）の5.9%を占めている。

地理的範囲: 水害は局所災害に留まらず、平成30年7月豪雨災害を代表とする広域災害も含まれているため、特定のパターンは認められない。

12. 今後の展望と結語

本報告では、二次スクリーニングを通過した1287件の文献について、災害イベント別、出版年、研究デザイン、対象疾患、地理的範囲などの基本的特性を分析した。特に東日本大震災とCOVID-19感染症に関する文献が全体の80%以上を占め、両者の間にはいくつかの共通点と相違点が見られた。現在、WHO発行のHealth-EDRM（Health Emergency and Disaster Risk Management）研究手法ガイダンス等を引用・参考にしている文献の抽出作業も並行して進めている。加えて、災害フェーズの分類と対象疾患との関連性について、より詳細な検討を行う予定である。